

---

# きみが好き

とんがり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きみが好き

### 【Nコード】

N5952N

### 【作者名】

とんがり

### 【あらすじ】

臆病な少女が異世界で出会ったのは、貴族の青年や我が儘な王子、そして謎の黒い男。様々な苦難に遭いながらも、異世界にいる人々と共に成長していくお話。

恋愛メインで、残酷描写少々。

強くはない少女の成長を、生暖かい目でご覧下さい（笑）

## プロローグ

薄暗い、夕方の校舎。

橙色の夕日が窓から差し込み、私の姿を照らし出す。

走っていた、逃げる宛も無く、ひたすらに。

どンドン息が荒くなり、足も悲鳴を上げそうになる。

冷や汗がただただ流れ、背中にぞわぞわと悪寒が走る。

どこでもいい、見つからない場所に、早く行かなくちゃ。

誰でも良い、あの人達でないならば、誰か、誰か。

誰か、私を

……ヤエちやあん？ねえ、私達の大事な大事なヤエちゃん。どこへ逃げたの？

ああ、そんな所にいたのね。

…つかまえたあ

## プロローグ（後書き）

のっけからホラー風味（笑）

ですが、次からは本編にはいりますっ

亀並のスピードですが、頑張っていきたいと思えます！

## 1 知らない部屋

「…………あ、起きましたか？」

重い瞼をあけると、ぼやけた景色が映る。

しばらくぼおっとしていたが、段々と明確になり、思考も回復してきた。

オキマシタカ？

…………誰の声？

目の前に居るこの人は、誰？

「ちょっと失礼しますね」

先程の声の主は、少し微笑みこちらへ手を伸ばして来る。

そして額に手を置いて、「熱はありませんね」とすぐに手を退けた。

「私が見えています？声も、聞こえていますか？」

綺麗な女の人が見えていますし、聞こえています。

そう言いたかったが、言葉が思う様にでない。

出そうにも咽せてしまったので、とりあえず無言で頷いた。

「わかりました、では少し御待ちください」

そう言っただけで女性も視界からすっと消える。

少し遠くでボタンとドアを閉める音が聞こえた。

そうなるここは部屋。

私の、部屋？

「……私の部屋じゃない」  
ようやく出せた声は、自分でも聞き取れない程小さかった。  
先程は何が何だかわからなかったが、段々と状況が理解できる様になる。

目の前に広がる天井、それは自分の部屋の物とは明らかに違っていた。

自分が眠っていたベッドも、少しクリーム色でとても柔らかな感触。

ゆっくり身を起こして周りを見渡すと、金のテーブルや椅子がさも当たり前のように置かれている。

床に敷かれている高価そうな絨毯も、綺麗に整えられごみ一つ落ちていない。

部屋の奥にある窓は、ステンドグラスがはめ込まれていてキラキラと輝いている。

言うなれば、外国のお金持ちの家の様な、テレビで見た事の有る様な、部屋である。

「どうして……」  
「ここは一体……」  
「僕の家だよ」

背後でドアがゆっくり開く音がした。

# 1 知らない部屋（後書き）

ようやく一話。

まだ名前すらちやんとできてないってこと……

## 2 知らない人

慌てて振り返ると、先程の女性を含めて三人、部屋に入ってきた。最初に入ってきたのは青年で、ゆつくりとこちらへ近づく。

金色の少し長めの髪の毛に、宝石の様に美しい蒼眼。

色が白く整った顔立ちは、思わず見惚れてしまいそうになる。

彼は、外国人なのだろうか。

「よかった、目が覚めて」

「あ、あの……」

「ああ、無理しないで。アンナ、彼女に水を」

かしこまりました、と先程の女性アンナが軽く頭を下げ、テーブルの上にある水差しとコップを持ってやって来た。

「飲めますか？」と優しい声音で問いかけられ、小さく頷く。

上等そうなコップに触れると、ひんやりとちょうどいい冷たさが手に伝わって来る。

ゆつくりと水を口に含むと、乾いた喉が潤っていく実感が、確かにわかった。

これは、夢じゃない。

「君はね、自然公園で倒れていたんだよ」

「しぜん……公園？」

「うん、あそこはまだ野良の動物が沢山いるから、危険だと思って君を保護したんだ」

自然公園。

保護。

やはり何が何だかわからず、不安げに青年を見つめる。  
彼は不思議そうに首を傾げ、微笑む。

「何か、気になる？」

「は、はい……あの、私、家に居たんです。自然公園、なんて、  
お、覚えがなくて……」

「覚えが無い？」

「す、すみません」

青年の声色がほんの少しだけ暗くなった気がした。  
慌てて意味も無く謝ってしまうが、青年は少し怪訝な顔を見せる。  
けれどこちらが不安な表情を見せると、すぐに表情を柔らかくす  
る。

「謝る必要は無いよ、少し気になっただけだから」

「は、はい……すみません」

「大丈夫、怖くないから」

そう言っつて青年は、三度目の微笑みを向けた。

彼の微笑は、何故だかとても安心する。

少しだけ頬が熱くなっている気がするの、気のせいだろうか。

「……だから」

キン、と金属の様な音が聞こえた。  
ジャキツ、と何かを入れた様な音がした。

「大人しく、僕の質問に答えてね」

細長い銃口と銀色の短剣が、私の首元に待ち構えていた。

## 2 知らない人(後書き)

なんつー展開(笑)  
というかまた名前・

### 3 よじって

あまりにも、それは突然だった。

右には、ライフルを持ったアンナ。

左には短剣を持った黒い縁の眼鏡をかけた長身の男。

獲物を見る様な目で、こちらを鋭く睨みつける。

短剣はともかく、アンナの着るメイド服の一体どこからライフルがでてきたのだろうか。

……いや、今はそんな事を考えている暇なんてない。

「君の名前は？」

「あ、の……泉ヤ、八重です」

「ヤエ、ね。じゃあ何処から来たの？やっぱり西から？」

「どこって……家は日本で、すけど……」

「ニホン？……ふーん」

次々と繰り出される質問に、少女ヤエの不安は頂点に達していた。先程とは違う、青年の低く冷たい声色が、彼女の身体を震わせる。怖い、怖い、私は殺されてしまうの？

「ヤエはここがどこだか分かって入ったんだよね？どうやって見張りの目から逃れたの？」

「見張り……？意味がわから……」

「答える娘」

突然眼鏡の男が何かを取り出し、ヤエの首元へ突きつけた。思わず悲鳴をあげそうになったが、急いで強く唇を噛み締める。こうでもしないと悲鳴を上げてしまいそうになる。短剣がもう一つ、首に突きつけられている事実によって。

「西の移民のスパイの可能性もありそうだね」  
スパイ？

「その可能性の方が高いと思われませんが、旦那様」  
眼鏡の男は表情も変えず、淡々と呟く。

「とりあえず、尋問かな。陛下に報告する前に、僕たちが出る事をしなきゃね」

尋問……それは、まさか。

「旦那様、それでは地下室をご使用になられますか？」

「そうだね、あまり僕は得意じゃないけど」

「旦那様が自ら御手を汚す必要はございません、この私めに御任せください。爪剥がしに水責め、火炙り、針地獄に電気椅子、地下でなかつたら家畜に紐を括り付けて引かせましょう。ああ、花の蜜でも塗りたくって害虫や害獣との戯れもよろしいかと」

呼吸が荒くなる。

心臓が、可笑しいくらい叫び続けている。

私は、今から拷問される？

口の中が、喉が、痛い程乾いて行く。

頭の中がまつしろになり、何も考えられなくなる。

そして、その中に恐怖と疑問が急激に埋め尽くされていった。

どうして、どうしてこんな事になったの。

私は、ただ家に居ただけなのに。

どうして、どうしていつもこんな目に遭わなければいけないの。  
どうして。

「……あっ」

青年が焦った様な表情を見せ、こちらを見た。

そして困惑した顔で俯き、うーと唸る。

「……もうこれでいいだろう、ガイル。これ以上、こんな事したくないよ」

消え入りそうな小さな声が、ぽつりと響く。

俯いた青年は顔をすぐに上げて、眼鏡の男にきつと睨んだ。

### 3 どうして(後書き)

うーん、なんか間延びしちゃった感じが^^^;  
次でいったん区切りますねー

## 4 ルカ

突然の主人の言葉に、ガイルという男は目をぱちぱちと瞬かせた。

「この子はスパイじゃないよ、短剣をおろして」

「その確証は一体どこにあるんです？ルカ様」

「確証はないよ、でもこんなに怯えて涙を流してる子に短剣を突きつけるのは可哀想だ」

涙？

ヤエは無意識の内にはるぼると涙を流していた。

泣いていると自覚した途端、得体の知れない感情の渦がわき上がって来る。

怖い、悲しい、辛い。

どんな感情を述べればいいのかすら、わからない。

「短剣をしまっんだ、ガイル。この子が泣きすぎて死んだらお前の所為だよ」

「ご安心を。泣きすぎて死んだ人間などおりません」

「ガイル！」

青年ルカが声を荒げると、ガイルは不満そうに短剣を首元から離す。

いつのまにか、右に構えていたライフルの銃口は消えていた。代わりにアンナが申し訳なさそうにヤエの首に触れる。

「ヤエ様、怖がらせてしまって申し訳有りません。あの頭の固く主人の命令も聞けない執事の事など、お忘れになってください」  
アンナが頭を下げると、むっとしたようにガイルが口を挟んだ。

「アンナ、貴女はアルケミラ家メイドとしての自覚が足りない様だ。ルカ様に徒なす者を排除するのが我々の仕事ではないのか」

「だからってひ弱な女の子に拷問の話をしてもいいと？相も変わらずガイル様の思考は立派ですね、羨ましすぎて吐き気が致しますわ」

「ひ弱な少女は敵ではないと断言できるのか？短絡的で怠惰な貴女は、疑う事すら怠惰になっていると見える」

か。………なんだか火花が散っている様にも見えるが、気のせいだろうか。

「やめな、二人とも。ヤエが怯えてる」

不意にルカの手がこちらへ伸びる。

ぼろぼろと涙を流すヤエの頬に優しく触れ、そっと涙を拭いた。にこりと微笑み、「ごめんね」と甘く囁かれる。

「儀式みたいなものだったんだ、こうでもしないとガイルが怒るんだ」

「当たり前です、これでも足りないというのにルカ様はまったく

………」

「ふふ、ごめんねガイル」

もう彼の声は冷たい声ではない。

それに安心したのか、ヤエは必死に保っていた気力を手放した。気を失い倒れたヤエの身体を、ルカが慌てて支える。

「ごめんね……次に起きたらいっぱい話そうね」

そう聞こえた様な気がしたけれど、ヤエには考える気力は既に無かった。

#### 4 ルカ（後書き）

やあつと青年の名前だせた・・っ  
しかしこの家、変な奴らばかりだな（笑）

## 5 思い出せない

二回目に目が覚めた時、一番最初に見たのはアンナの顔だった。

寝起きとはいえ、先程の騒動でヤエはかなり頭が混乱していた。

小さいながらも彼女へ抵抗の意志をみせたものの、

半強制的に風呂に入れられ、髪を乾かされ、暖かいスープを飲まさせられる等、

めまぐるしく世話をされた為に、スープを飲んだ時点でもうアンナのなすがままとなっていた。

まあドレスを用意された時は、さすがに拒否したのだが。

「もう入っても良いかな」

ドアを三回程ノックする音とルカの声がした。

ヤエが無言で頷くと、アンナは何も言わずドアを開けた。

「あれ？ドレスじゃなくてよかったの？」

「あ、はい……！ちよ、ちよっとドレスは無理でした……。これも、は、恥ずかしいんですけど」

「そう？ワンピースもとっても似合ってると思うけど。かわいいよ」

さらっとそんな事を言われてしまうと、無性に恥ずかしくなってしまう。

お世辞にも豪華とはいえない、シンプルな薄桃色のワンピース。

別に可愛い所なんて、見つからない。

誉めてくれたルカは天然なのか、紳士なのか。

どちらにせよ、ヤエにとっては聞き慣れないため、こそばゆい。

「……じゃあ、そろそろ話そうか」

「あ……はい」

「大丈夫、さつきみたいにガイルが脅しに来ないから。ガイルは、お使いに出させたからね」

隣でアンナが失笑する。ざまあみろ、とでも言いたげだ。

「それで、さ。僕も君の事をいろいろ聞きたいけど、やっぱり君も知らないとフェアじゃないから」

「……はい」

「教えるけど、でも最後に一つだけ。ヤエ、君は本当に西の移民ではないんだね？その黒い髪や目を持っていたとしても」

またその質問だ。

西の移民、とは何なのだろうか。

それに髪や目？ありきたりなこの黒髪が、何か問題でもあるのだろうか。

「わ、私は西の移民じゃありません……日本という国に生まれて……髪も目も日本人の間なら、大抵はこれです」

「そっか。よかった」

ほっとした様にルカが微笑む。

そして凜とした表情で、ヤエを見つめた。

「とりあえず、自己紹介。僕はルカ＝アルケミラ。第一族国の建国に携わったアルケミラ家の当主です」

「第一族、国？」

「今僕たちがいる国の名前だよ、人種は名の通り第一族の直系に

なる」

第一族、という言葉初めて聞いた。  
国の名前だつて、世界地図に載っていただろうか。  
知らないだけで、小さく片隅にあるのかもしれない。

「ヤエが居た国は、ニホン、だったよね」

「は、はい」

「残念だけど、そんな国はやっぱり知らない。この世界には、国は四つしか無いからね」

言葉を失った。

国が四つしかない？

そんな事、あり得ない。

「百年前の大きい戦で、小さい国も大きい国もみんな燃えてしまつたんだ。第一族国を含めた、四つの種族の国だけが戦火をくぐり抜け大国へと発展した」

「い、意味が……わかりません」

「つまりは、君の居た所は国ではないという事になる。多分、外界から隔絶された里や村……、僕は西だと踏んでいたけれど違うみたいだね」

日本が国ではない、なんてあり得ない。

けれどこの人達は日本を知らない。

何が起こっている？何が変わってしまった？

思い出せ、日本の事を、家を、生活を、場所を……

「……あれ……?」

「どうしたの?」

「思い、出せない」

ぼつりと呟くと、ルカが眉を潜めてアンナの方を見た。

アンナは困った表情をして頷く。

「思い出せない、んです。日本、の事……どうして、さっきまで分かっていたのに」

「落ち着いて、ゆっくり思い出すんだ」

「わからない……どうして、思い出したいのに……!」

声が震える。

日本のどこに住んでいたのか。

どんな家に住んでいたか。

父や母がどんな顔をしていたか。

学校はどこに会ったか。

そこで誰に会ったのか。

思い出せない。

「まさか異世界の人間、とかいわないですよね。アルケミラ伯爵」  
「?」

態とらしく問いかけてきたのは、  
念そつな表情をする白衣の男だ  
った。

5 思い出せない(後書き)

今回はちょっと長めになりました

そしてヤエの苦悩の始まりです(笑)

## 6 アンリ

「朝っぱらから呼び出されたから何だと思ったが……ルカ、お前恋人でも作ったのか？」

先程とはまるつきり違う荒々しい声音で、男は問いかけた。と、言っても相手の返事を聞く間も無くずかずかと部屋に入り、ヤエの目の前まで来てぴたりと止まった。

ルカよりも高い背丈、ガイルよりもキツイ目つきの男がじろりとこちらを見下ろす。

人相が悪い所為で、白衣がかなり似合わない。

「おい」

「は、はい」

また睨まれる。

まあ本人は睨んだと思っていないだろうが。

「脱げ」

「は……？」

「アンリ！！」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

今、自分は最高に変な顔をしているに違いない。

隣でルカが恥ずかしいのか怒っているのかわからない顔をしている。

「勘違いすんな、何もお前の貧弱な胸やら尻やらを見たい訳でも襲う気でもねえ。診察だ、し・ん・さ・つ」

「え、あ、あの」

「失礼だよアンリ!!」

「あ？お前は見たいのか？ルカ伯爵つてば助平」

真顔で棒読み。

だが、確実に悪意の籠っている言動である。

「怒るよアンリ!!」

「何だよ、お前が診察しにこいって言った癖に……おら、さっさとそれ脱げ。一枚だからすぐだろ」

「やつ……」

ルカの言葉を聞き流し、白衣の男アンリはヤエのワンピースに手をかけた。

無意識に抵抗すると、アンリがまた面倒くさそうに顔を歪める。

「何が『やつ』だ、何が。俺にはそういう誘いは聞かんぞ」

「さ、さそ……!？」

「もういいアンリ、帰って」

ルカがこめかみを抑えながら、アンリの頭をはたいた。

良い音がした気がした。

## 6 アンリ（後書き）

アンリ登場。

のっけから変態ですねこいつは^^^；

7 白夢病

「ったく。このアンリ大先生を殴れるのはお前くらいだぞルカ」

服を脱げだなんやの一悶着があつてから、一時間は経つた。

ルカに殴られた場所を擦りながら、アンリは諦めた様にまだ握つていたワンピースから手を離し、ベッドに座り込んだ。

勢い良く座られたお陰で、ベッドが跳ね、またヤエを怯えさせる。

「移民の女はビビリなのか？こんな所まで入りこめたのに」

「彼女は西の移民じゃないよ、アンリだってさっき異世界がどうとかいっていたじゃないか」

「あれは婆さんが言つてたの思い出しただけ、異世界がどうとか次元がどうとか」

そう言いながら、アンリはヤエの髪の毛をくるくる指に巻き付けながら遊び始めた。

当然の如く、ヤエは固まったまま動けない。

アンナに助けを求めようとしたが、彼女は申し訳なさそうに微笑むだけだった。

「そうだ、ヤエ。紹介するよ。これは、僕の友人のアンリ。さっきは馬鹿な事させちゃってごめんね」

「い、いえ……」

「ほら、アンリも何か言つてあげて」

ルカに小突かれ、アンリは仏頂面のまま溜息を吐く。  
ヤエの髪から手を離し、きちんとこちらに向き直った。

「アンリ・レイヴン。性別、男。歳は想像に御任せします。第一族国出身で、レイヴン家次男坊。ヤエちゃんよろしくね」

あまりにもふざけた棒読みの台詞に、ヤエ以外は皆苦笑する。  
ヤエはというと、警戒はしつつ彼の自己紹介にただ頷いた。  
やっぱりこの人は変だ。

……後怖いし。

「で、白夢病を五年前から研究している」

その瞬間、周りの空気が凍り付いた。  
ルカの顔から、笑顔が消える。

「はく……む……？」

「さつきお前……ヤエがなっていた奴だ。異世界だろうが移民だろうが、ここにいれば関係ねえらしいな」

凍り付いた空気の中、アンリは依然飄々とした態度だった。  
さすがにヤエもその空気に異変を感じ、ルカの方を見上げる。  
なんだか、悲しげな顔をしていた。

「この国の人間はね、皆病に罹っているんだ。二十年前から、ずっと」

「え……？」

「……記憶がね、消えてしまっただよ」

すつと、ルカの手がこちらへ伸びて来た。

優しい手付きで髪を撫で、「可哀想に」と呟く。

彼の甘い声が切なさを帯び、上から少しずつ降って来る。

「この国に居る限り、君は大事な事を思い出せなくなるんだ。ずつとね」

7 白夢病（後書き）

シリアス展開突入。

あ、でもラブもかきたいな……

「白夢病は、何かを思い出そうとすると頭が真っ白になって夢を見ている様な心地に陥る。そして、思い出したくても思い出せなくなる。だから白夢病って言うんだ」

ルカの瞳が微かに揺れる。

今にも泣きそうな表情を見せたが、そんな表情でも整った彼の顔によく映えた。

「それだったら……ルカさんも……？」

「うん、僕は十三年前に発症したんだ。……十三年経っても、まだ思い出せないけどね」

思い出したくても、思い出せないんだ。

そう言いながら、ルカは名残惜しそうにヤエの髪から手を離れた。

「だからその為に、俺がいるんだろうが阿呆」

「ああ、それもそうだったね」

アンリがルカを小突くと、苦笑しながらルカは頷いた。

胸ポケットから煙草を取り出し、ぷかぷかと煙を吐くアンリ。

……空気が読めない人だ。

「でも、アンリはすごいんだよ、白夢病の進行を止める薬まで作ったんだから」

「まあ婆さんの入れ知恵が六割って所だな。記憶促進剤、なんて一から作れつかよ」

記憶促進剤。

想像はできないが、名前からして怪しい気がしてならない。

訝しんでいると、アンリは煙草が入っていた胸ポケットから、小さいケースを取り出した。

中に一つのカプセルが見える。これが、記憶促進剤？

と、どうか煙草と一緒にの所に入れないで欲しい。

「白夢病が日に日に記憶を消してく……長期記憶の減衰説に基づいた病だと仮定して作った。作り方は企業秘密だぞ」

「え、あ、何を言ってるかさっぱり……」

「俺もそんなもんだ。死んだ婆さんなら知ってたかもな」

そういつてケースからカプセルを取り出し、ヤエの目の前にずいっと突き出す。

え？何？

「飲め」

「え……」

「飲め、お前も白夢病だろ」

「いや、あの、ちょっと、怖いです……」

いかに素晴らしい薬と言っても、得体の知れない薬を貰う事はかなり勇気がいる。

見た目は普通のカプセルだが、ほんのり赤みが内側からにじみ出ているのが少し恐ろしい。

「飲め、ヤエ」

「や、あの、いいです……大丈夫ですか……」

「飲まんと口移しするぞ。5、4、3、2、1……」

「のっ、飲みます」

慌てて彼の手からカプセルをひったくり、水と一緒に流し込む。  
最後のカウン트가、妙に早かったあたり悪意が感じられた。

「はい上出来。じゃ、俺は帰るぞ」

「お金は？僕の薬だったんでしょ？お代は出しとくよ」

「いらん、俺は早く帰って寝たい」

煙草をくわえながら、アンリはベッドから立ち上がる。

ヤエの頭をくしゃりと撫で、「じゃあな」とだけ言い残し部屋を  
出て行った。

部屋に残ったのはヤエとルカのみ、アンナはいつの間にか居なく  
なっていた。

「……ヤエ、君はこれからどうする？」

「どう……すると言われても……」

知らない国、知らない人々、思い出せない記憶。

あまりにも重い問題が、彼女へ押しかかっている。

どうすればいいかなんて、わからない。

「行く所が無いなら、僕の家に住なよ。多分、今の君が外へでて  
も人買いに捕まるか拒絶されるだけだよ」

人買い。

そんな者までこの世界にはいるのか。

自分が売られている所を想像し、肝が冷えた。

「で、でもいいんですか？迷惑じゃ、ないですか？」

「全然。僕は、ヤエが居る方が楽しいな」

「ね？と可愛げに首を傾げられると……何だか断れない。」

「じゃ、じゃあ……よろしくお願ひします」

「うん、よろしくお願ひします。ヤエ」

にこにこ嬉しそうに彼の顔を見てみると、つられてこっちまで  
微笑んでしまう。

優しい人だ、本当に。

「しかし働かざる者は食うべからず、でございます旦那様！」

ガイルの少し怒りの籠った声が、ドアを勢い良く開ける音と共に  
響いた。

……変な人達。

## 8 よろしく(後書き)

とりあえず一区切りです。疲れた！  
次からヤエの奮闘記です(笑)  
こっから本番ですよー^^

## 9 お手伝い初日

「アルケミラ家に世話になる以上、いくら貴女がルカ様のご友人であろうがやはりある程度恩返しなるものをするのが礼儀でしょう。貴女が、アンリ様の言う異世界？とやらの人間であるならば、ここで慣れる事でこの世界やアルケミラ家に貢献できるかもしれませぬよ」

朝っぱらからのガイルの説教じみた説明。

もうかれこれ一時間はアルケミラ家のすばらしさについて語られた気がする。

それでもまだ言い足りなさそうなガイルを、アンナが面倒くさそうな顔で見つめていた。

大分くたびれたヤエを、「話を聞きなさい」とガイルが睨みつける。

アルケミラ家に住む事が決まった翌日、さっそくガイルの指導が始まった。

指導といってもアルケミラ家での手伝いを教える、というだけの事である。

当初はルカに大反対されたが、ガイルの言う通り世話になる以上甘えてばかりではいられなかった。

ガイルはまだ怖い、アンナが側に居てくれるだけでも大分心強い。

「では、まずこの屋敷の掃除から。窓と家具を拭いて、花瓶の花も取り替える様に。ベッドメイクはできないでしょうからやらなくて良いです」

「はい」

「次に洗濯、シーツは汚れ一つ無い様に完全に洗う事。もちろん手早く終わらせなさい」

「はい」

「食事……はいいでしょう。貴女はできそうに見えませんか。自分の分を作るといふならば文句は言いませんが。代わりに皿洗いを二時間以内にやりなさい。もちろんちゃんと棚にしまつまでです。詳しい事は他のメイドに聞きなさい」

「は、はい」

「そうですね、後は屋敷の庭の掃き掃除に花壇の水やり。ルカ様のお気に入りの花壇であるので、絶対に間違つても枯らしてしまう様の無い事を」

「あ、あの……」

恐る恐る手を挙げる。

ぎらりと冷たい視線を送り、「何ですか、質問は受け付けませんよ」と吐き付けられる。

「さ、さすがにそんなに沢山は……」

「できないのですか？ここでは日常茶飯事であるのに？」

わ、わたしはこのメイドじゃないのに。

なんて事は死んでも言えなかった。

「……まあ初日ですからね。洗濯ぐらいは抜いてあげましょう」

「あ、ありがとうございます」

「よかったですわねや工様。小姑みたいなガイル様が微生物に満たない程の慈悲をくださいましたね」

沈黙。

思わず固まるヤエに、腹黒い笑みを見せるアンナ。

そして相変わらず無表情のガイル。

しかし確実にこの場の空気は凍っていた。

「……貴女という人は、これだから腹立たしい。文句しか言えない人間であるようだ、アンナ」

「あら、文句に聞こえてしまいましたか？それは失礼しました、私はガイル様を心の底から誉めたつもりだったのですが……御耳が腐敗している様ですわね」

「貴女の口も大分ひん曲がっている、そこから貴女の腹黒さがありありと見えますね」

「まあガイル様ったら。女性の中身をご覧になるだなんて。堅物で遠慮も知らない頭と卑猥な双眸をお持ちになさっているのですわ。くりぬいて差し上げたいですわ」

「私も、貴女の胸くそ悪い言葉を話すその舌を引き抜いてやりたいですよ」

……本当に仲が悪い。

今だ続く二人の貶しあいには耐えきれず、ヤエはその場から逃げ出した。

本当に、ここでやっていけるのだろうか。

逃げる途中で、ルカに「鬼ごっこでもしてるの？」と笑われたの

が、少し恥ずかしかった。

9 お手伝い初日(後書き)

ガイルとアンナが早速かましています^^  
こいつらが出ると変な方向になっちゃうんですよね……

10 指切り(前書き)

今回はちょっと長めです。

まあいつもよりってだけです^^;;

## 10 指切り

「あつ……ごめんなさい」

パリン、と食器の割れる音がした。

ガイルから受けた指令、二番目の掃除の皿洗いをしていた時の事だった。

二、三人のメイドと共に館中の食器を洗い、一区切りつけようと洗い終えた皿を手に持った時、それは起こってしまった。

手から落ちた純白の大皿は、いかにも高価な食器ブランドのエンブレムが掘られている。

ヤエは、しばらく呆然としていたがすぐに罪悪感が追いついて来た。

「すみません、ヤエ様！私がぶつかってしまったばかりに……！お許しを！」

「い、いえ。私が悪いんです、ちゃんと持っていなかったから……」

泣きそうな顔をするメイドに苦笑いをみせ、慌ててヤエはしゃがみ込んだ。

こんな所、ガイルさんに見つかってしまったら……

そう思いながら割れた破片に手を伸ばすと、すっと何かの影が手の甲に映った。

「……っ！」

「ああ！申し訳ありませんヤエ様！バランスを崩してしまいましたし

た……！」

手に、鈍い痛みが走る。

破片を拾おうとした手の甲が、別のメイドの足で踏まれていた。すぐにメイドの足はどいたが、細かい食器がその所為で手にめり込んでいる。

痛みを堪えていると、廊下から何かが近づいて来る音が聞こえた。

「何の騒ぎですか、今の割れた音と……、貴女ですかヤエ・ガイルだ。」

あの冷酷な視線が、ヤエに振り落とされる。

後ろには遅れてやって来たアンナがいたが、状況を飲み込めていないらしかった。

「貴女と言う人は……旦那様のお気に入りの皿を……」

「す、すいませ……」

「お待ちくださいガイル様！」

先程の手を踏んでしまったメイドが、ガイルに向かって声を張り上げた。

何をいうのだろうか。

「何です」

「ヤエ様は、まだここに来て日が浅く体調も完全ではございません。皿を割ってしまったのも、調子が思わしくないからに決まっています！それに、『普段やり慣れていない事』でしょうしこの程度のミスは仕様が無いかと」

私は、どこも悪い所なんてないのだけれど。

何故だか弁解してくれるメイドの発言が、心突き刺す。

「やり慣れていないとはいえ、やはりこれぐらい出来ないというのは……」

「いえ、ヤエ様は悪く有りません！ちゃんと見ていなかった私達の責任なのです、ヤエ様ならできるとそう勝手に思ってしまった私達の責任ですわ」

子供扱いされている？

段々と身体が熱くなっていく。

やめて、それ以上いわなくていいから。

「……まったく、この皿の一枚も完璧にしまえないとは。もう皿洗いは結構、貴女は花壇に水やりをしているといい。ただ水をあげるだけなのだから」

「ヤエ様、我々が付いていきましようか？」

かっとなぎに頬が赤くなる。

あまりの羞恥に耐えられず、混み上がる涙を必死で食い止めながら洗い場を走り出た。

アンナが「ヤエ様！」と追いかけてようとして洗い場をでたが、ガイルに手を掴まれ止められる。

「……何です、この恥知らずが。ルカ様のご友人であるヤエ様に、なんたる愚弄」

「愚弄ではない、正論だ」

「そうですね、貴方はそういう方でしたものね。手を離してください、貴方に触れられるとこっちまで愚かな思考になる」

「貴女は仕事に戻りなさい、職務放棄こそルカ様への愚弄と思え」

ぐっと悔しそうにアンナが顔を歪めた。

この男、いつか必ず……

『ねえ、ちゃんと恥かかせられたかしら？』

洗い場の奥から、ひそひそと小さな声が聞こえた。

『今のあの女の顔……ざまあみなさいよね。移民の癖に』

『役立たずはここからでていけばいいのよねえ』

『あんたってひどおい……』

アンナの目が鋭く上がる。

乗り込もうとすると、やはりまたガイルが止めた。

今度こそ、アンナはガイルを殴ろうと思った。

「あ、見つけたよヤエ」

花壇へ逃げ込む様に入ると、じょうろを持ったルカがにこやかに手を振った。

潤んだ瞳を慌てて隠し、精一杯笑顔でそれに答えた。

「ル、ルカさん。どうしてここに？」

「仕事が一段落付いたんだ、だからヤエがいるかなって思って来ちゃった」

来ちゃった、というルカの表情が何とも微笑ましい。

私よりも、女の子みたいだ。

「一緒に水やりしようよ、ヤエと一緒に話したいし」

「で、でも……ガイルさんが……」

「大丈夫、ガイルには秘密にしよう？」

そう言っつて小指を突き出し、ね？と首を傾げる。

ヤエもそれに答える様に小指を近づけると、待ってましたと彼の小指に絡めとられる。

なんてお手軽な指切り。

……でもそれが落ち着いてしまうのは何故だろう。

「…………ヤエ？」

ルカが悲しそうな顔をして、ヤエを見る。

また瞳が潤んだ。

声も震えてしまい、慌てて下を俯く。

ダメだ、泣いちゃダメだ。

「何か、あったの？」

「い、え…………何も…………」

何故涙が引つ込まないのだろうと、幾度も思った。

こんなの、ただ同情されたい様にしか見えない。

「嫌じゃなかったら、教えて？僕はちゃんと聞くから」  
そう言って覗き込んだ彼の顔が、とても優しく、とても暖かくて。

頭をそつと撫でられた時には、感情が決壊してしまった。

10 指切り（後書き）

ガイルが本当に嫌いキャラに（笑）  
ああ書いている分には楽しいんですけどねー

11 味方だから(前書き)

またちょい長め。

まあ前回と同じくらいです^^

## 11 味方だから

「……落ち着いた？」

ひとしきり泣いた後、ルカが囁いた。

涙はもうでないが、泣いた所為で目が赤くなったのでルカに見られない様俯いたままだった。

「は、はい……」

「まだ鼻声だよ」

くすつと笑われ、また頭に手を置かれる。

子供扱いされている様で、何だか恥ずかしい。

「……ガイルがいじめた？」

「いつ、いえ！そんな、事は……」

「やっぱりいじめたのかあ」

ごめんね、と苦笑しながら謝られた。

この人には、筒抜けだった

「ガイルは、ちょっとキツイけど、でもあれが普通だから。良い所もあるんだよ？」

「はあ……」

「まあ多分……君の事があんまり気に食わないのかもしれないね」彼の言葉に、妙に胸が痛んだ。

この髪と目、この国の人間はそれを嫌う。

「西の移民はね、昔から僕たちと因縁があつたんだって。他国はよく知らないけど、少なくとも第一族の人間は先祖の代からいがみ

合っていたらしい」

ルカはじょうろを持ち替え、ヤエの手をとった。  
そしてそのまま、花壇の近くにあるベンチに向っていく。

「ただでさえ西は、国として成り立っていないかったし政治経済、産業や工業、農業においてあまり発展していなかった。だから、軽視されやすいって言うのもあったらしい」

「そうなんですか……」

「そして、百年前に起きた大戦も……彼らが起こしてしまったものなんだ」

差別、戦争、貧困。

たとえここが違う世界だとしても、ヤエにはこの現状がまったく関係ない物だとは思えなかった。

「沢山死んだんだ、王族も貴族も移民も……僕たち第一族はその原因が僕たちにあるにせよ移民をずっと憎み続けた。あまり興味も無い人もいるけど、少なくとも古参の人達は嫌っているね」

ベンチに着くと、ルカが手を引いて座らせてくれた。

彼も座るのかと思っていたが、ルカはヤエの目の前に移り彼女と同じ目線でしゃがみ込んだ。

慌てて腫れた目を隠そうとすると、「隠さないで」と笑顔で嗜められる。

「君は、その髪と目でこれから沢山辛い事があるかもしれない。

この国には移民の末裔や混血の人々もいるけれど、人買いに攫われたり理由なく傷つけられたりしている。……僕は、君にそうなって欲しくない」

真剣な眼差しが、射抜く様にこちらへ向う。

じっと見られるのは慣れていないので、すぐに恥ずかしさで顔が熱くなる。

「何か困ったり、辛くなったり、今みたいに泣きたくなったら、僕の所においで。僕は、君の味方だから」

「え、あ……は、い」

美しい顔立ちの青年に、こんな事を言われれば誰だって照れてしまう。

恥ずかしさが、一気に身体の中を駆け巡る。

この齒の浮く様な台詞でさえも、ルカの口から聞くと何でこんなに安心してしまふのだろうか。

既に顔が真っ赤になったヤエを見て、ほっとしたようにルカが頷いた。

「じゃあ、水やり始めようか……」

「ヤエ！ヤエ！ここにいますか！」

タイミングの何と良い事だろうか。

顔を上げると、向こうからもの凄い勢いでやって来る人影が見えた。

もう予想がついてしまふ。

ガイルだ。

「水やりはもう結構です、それよりも至急貴女に仕事を」

「まだ水やりはやってないよ、ガイル。今から僕と一緒に……」

「なりません、なりませんよ旦那様。貴方はこれからこの書類に目を通し、ヤエはこの手紙を送らねばなりません」

ガイルはそう言って、分厚い書類の束をルカの手の上に乗せ、白い小さな手紙をヤエに手渡した。

「ミーシャ様が、もうヤエの事を御知りになっております」

「ミーシャが？まったく早いなあもっ……」

「返事のついでにヤエを持ってこいとこの事です。しかも至急と」  
「相変わらず強引だなあミーシャは」

ミーシャとは誰だろうか。  
伯爵という身分のルカにここまで言えるなんて、きつとすごい人物なのだろう。

……というか、何故自分が居る事を知っているのだろう。

「ごめんねヤエ、そう言う事だから……ミーシャの所にまでお使  
いして欲しいんだ」

「あ、わかりました……」

「誰か一緒に連れて行かせようか？」

慌てて頭を横に振る。

子供じゃないんだから、一人で行ける。……答だ。

「じゃあお願いするね。それと、これを被っていきな」

これを見越していたのか、ガイルは抱えていた布と小さな木で作  
られた籠を渡された。

布を頭から被せられ、赤ずきんちゃんのように結ばれる。

「不本意だろうけど、こうやって隠して行くんだ。花売りの子は  
それを被って花を売っているから、怪しまれる事もない。ここの花  
壇の花もいれて歩けば、大丈夫だよ」

赤や黄色、オレンジと色とりどりの美しい花を籠に敷き詰め、ガ  
イルにかかせた小さな地図を花の上に乗せる。

これにワインの瓶やパンを乗せれば、完全に赤ずきんちゃんだ。

「ミーシャは悪い人じゃないから、きつとヤエを気に入ってくれ  
るよ」

いつてらっしやい、と優しく見送ってくれるルカに、少しだけ胸  
が熱くなった。



11 味方だから(後書き)

なんか進展ないですね、すみません；；  
ガイルさんは、空気をとことん読まない男です(笑)。

## 12 赤い目の男

「わあ……！」

無意識に感嘆の声が漏れた。

第一族国のシンボル、グレヴィレア城が高く雄々しくそびえ立っている。

その城のすぐ真下にある中央広場には、第一族国の国民に溢れ帰っていた。

花を売る少女に、犬と共に散歩をする老婦人、大道芸をする若者や忙しそうに歩く男性。

髪の色は金に赤茶、グレーであるあたり、第一族の他の民族もいるようだった。

活気の溢れ、寛容的な国。

西の移民の件さえ無ければ、すばらしい国であつただらう。

「ミーシャさんの家はたしか……『酒場 タリトン』？ だっけ。中央広場のすぐ近く……」

花かごに乗せたメモを確認し、もう一度中央広場を見る。

見た所、それと思しき看板は見当たらない。

それどころかきよろきよろと探していると、街行く人々の好奇の視線を送られる。

髪を隠しているから決して侮蔑や憎悪のそれではないが、やはりいろいろな人に見られるのは気恥ずかしい。

「こ、こつちじゃないのかな」

被っていたスカーフを深く被り直し、慌てて後ろを振り向いた。

その瞬間、焦げ茶色に覆われた視界と何かに勢い良くぶつかった

感触が彼女を迎えた。

「きゃ……………！」

「……………何処見て歩いてるんだ」

ぶつかった人物の、ドスの低い声がかから降って来る。

思わず見上げると、頭から焦げ茶のローブを被った人物がこちらを見落としていた。

ヤエと同じ様に暗いローブを深く被っているため、顔は見えない。しかし、鋭い眼光のみが確かに見えた。

怒っている、たったそれだけで分かってしまった。

「あ、あの……………すいませ……………！」

「謝るんだっいたらつたつてんじゃねえよ、目障りだ」

「あ……………」

何も答えられなくなった。

ダメだ、怖くて何も言えない。

「大体花売り風情が俺の邪魔をする……………なん……………て」

突然、ローブの人物の声が威勢を無くした。

それどころかいきなり起こった事に驚いた、そんな様子である。

「お前……………その髪……………」

「え……………、っ！」

はらり、とスカーフが音も無く落ちた。

ヤエの体中に悪寒が走る。

ぶつかった拍子にとれたのだ。

慌ててスカーフを被り直そうとすると、ヤエの手首をいきなり掴まれる。

「あっ……………あの、な、なんですか……………」

「お前のその髪は何だ」  
ローブの人物の声が、更に低くなる。  
怒りに満ちているのか、声が震えている。  
「お前の髪は何だつて聞いてんだよ。……移民か？」  
「ち、違います……！」  
ぐつと相手の手に力がこもった。  
掴まれた手首に、鈍い痛みが走る。

「ほ、本当に違うんです……！私は、ニホンから……！」  
「ニホン？移民が俺を騙そうとするな。」  
「だから、本当に……！」  
痛みで目に涙が滲む。  
顔を歪めると、一瞬だけ手の力が緩んだ。

「……と、とにかくお前は俺と来い。どうせ行く所なんてないんだろ」

「行く所……って……」  
「来い、俺の言う事を聞け」  
強く手首を引っ張られて、身体が相手の方へ倒れ込む。  
身体を抱きとめられ、腰のくびれに手を回された。  
そして相手の顔元まで引き寄せられる。

「俺に口答えするな」  
「……っ！」

男だ。

血の様に赤い双眸をした、男。  
息がかかりそうなくらい近くまで顔を引き寄せられ、冷たく睨みつけられる。  
殺される。

本能が、確かにそう感じた。

「嫌っ……っ！」

「っ！」

思い切り力を込めて、男を突き飛ばす。

逃げるのは無理だとは思っていたが、男の身体がぐらりと揺らいだ。

逃げなきゃ。

「お、おい！待て！」

スカーフを急いで被り直し、全速力でその場から逃げる。

後ろで男の叫ぶ声が聞こえるが、必死に頭の中に入れない様にする。

籠から花が零れ落ち、それを踏んでしまったが気に留める余裕も無い。

逃げなきゃ、ここから早く。

追って来るだろうと思った男は、何故かヤエを追って来ようとはしなかった。

12 赤い目の男(後書き)

新しい人物登場。

不穏な男です、いろんな意味で。

「な、なんだったの……あの人」

辿り着いた場所は、中央広場から少しだけ離れた路地裏だった。走り疲れて身体がふらつき、壁によりかかって切れ切れの息を必死に整える。

思い出した様に籠を見ると、中の花は殆ど無くなってしまっていた。

ルカさんごめんなさい、と心の中で謝っておく。

「こ、わかった……一緒に、来い、って……？」

走って来たからなのか、それともあの男の所為なのか。頭がやけに混乱し、考えがまとまらない。

先程の人物は、何者なのだろうか。

いや、何者だろうとヤエにとっては恐怖でしかなかった。

あの人は、私を殺す気だったのかも知れない。

『目障りだ』

「あ……」

男の言葉が頭の中に再生される。

ヤエに向けられた、侮蔑と怒りが籠る台詞。

思い出すと、何故か頭がずきつと痛んだ。

知らない人に言われた、なのに何故か『覚えがある』。

白夢病で、忘れていた筈なのに。

私は、この言葉を聞いた事が有る……？

「あら、花売りさんがそんな所でどうしたの？」  
背後から、女の声がした。

敏感に反応すると、振り返る前にぶつと女に吹き出された。

「そんなに驚かないでよー、私別に怖くないよ？」

「あ………すみません」

からからと笑っているのは、ヤエと同じ年くらいの少女だった。

一つにまとまった美しい金髪もさることながら、彼女の目鼻立ち  
は女のヤエでもどきりとしてしまう。

大きな紙袋を抱えて、「ごめんねー、買い物しちゃってもうお金  
すつからかななの」と悪びれずに言う。

「い、いえ。そんなつもりは………」

「そう？ だったらいいんだけどさ、とりあえずこっちおいで。路  
地裏にいと、変なの寄って来るよ」

来い来い、と手招きされ少し考えたがヤエは少女の方へ向う。

おずおずと路地裏からでると、「あれ？」と少女が首を傾げる。

「君つてもしかして………」

「ヤエ様!!」

少女が話している途中で、誰かが叫びに似た声音で呼びかける。

街中では目立つのであるうメイド服で走りよってきたのは、血相を  
変えたアンナだった。

「あ、アンナさん………?」

「ヤエ様、大丈夫でしたか？ すごくすごく探しましたわ」

すごく探しまわった割には、息が切れていない。

ちよつと走っただけで息が切れてしまうヤエとは大違いだ。

「で、でも私一人でも大丈夫で……」

「私が心配なのですヤエ様！ヤエ様がいつ無粋な輩に攫われてしまふかと思うと……気が気でなくて。先程も……本当に申し訳ありませんでした。私がいながら……ヤエ様をあんな酷い目に」

アンナの目尻に少しだけ涙が滲んでいる。

本当に心配してくれたんだ。

……嬉しい。

ほおつと安堵の溜息をついたアンナは、滲んだ涙をぎゅっと拳で拭う。

「あの堅物で空気の読めない執事は私が殴っておきました、だからまた何かあったらいつてくさいね」

「えっ！な、殴ったんですか……？」

「ええ殴りました」

にこつと白々しく微笑まれる。

アンナさん、すごい……。

「ねえ、ちよつとお話中いいかな」

少女が待ったと手を挙げた。

アンナが少女の方を見ると、はっとしたようにお辞儀をする。

「お久しぶりです」

「ん、アンナも相変わらずのガイル嫌いだね」

少女は紙袋を持ち直し、「てことは」とヤエの方を見る。

「君がああのヤエちゃんね。ニホンから来た黒髪黒目の女の子、ヤエちゃん」

「えっ！ど、どうしてそれを……」

驚いたヤエの顔を、面白そうに少女は笑う。

そして「想像してたよりかわいいね」とはにかむ。

「私がミーシャ。ミーシャ・タリトン。よろしくねヤエちゃん」  
「あれえ、ミーシャ何してるの？」

……ん？

いつの間にか、彼女の隣に青年がいた。

ミーシャは不満そうに「今自己紹介してたのに」と文句を言うと、隣に居た背の高い赤茶髪の青年が「ごめんね」と謝った。

青年はヤエをちらりと見て、ぎくつと顔を強張らせたがすぐに穏やかな表情に戻る。

今度は誰？

「まあとにかく店において、そこで色々お話ししましょうよ」

そう言われた時には、ミーシャに手を引っ張られていた。

強引だなあ

13 ミーシャ（後書き）

放置してすいませんでした……  
その割には特に進展なく……いつも通りか

14 働いてみない？（前書き）

ちよい長めです。

終始ミーシャが喋ってます^^

14 働いてみない？

「酒場 タリトン」は、閉店前であるのかまだ客も店員もいなかった。

ミーシャに強引に引つ張られ、店のカウンターの椅子に座らせられる。

「あ、あのミーシャさん……？なんで、私の事……」

「ね、ヤエちゃん！あなたニホンから来たっていったわよね？」

「え、はい」

「そこってどんな所なの？ここと似てる？それとも他の三国に似てるの？」

目をキラキラと輝かせながら、ミーシャは矢継ぎ早に問うてくる。あまりの勢いに、ヤエの答える暇がない。

「民族は？国土面積はどれくらい？国民の数は？ニホンも王制なのかしら、法律はどうなっているの？」

「え、あの私……」

「言語はどういう感じなの？あ、そうだわニホンの医療技術は？」

「ミーシャ、そこまで」

先程の青年が、緩やかな動作でミーシャの口を手で覆う。

弾丸の様に喋っていたミーシャの言葉がぶつりと切れ、ぎゅっと眉を潜め彼の手を退かす。

けれど本当に不満そうには見えない、むしろ嬉しそうに見える。

「だめだよミーシャ、ヤエちゃんが何も喋れないよ？それにヤエ

ちゃんは故郷の事を覚えていないんだから」

「ん……わかった。ごめんねヤエちゃん」

まるで子供が謝る様に、口を尖らせて謝られた。

なんだかわいい、と思っていた矢先に、「うん、えらいね」と言いつつ青年の唇が彼女の頭に触れた。

その光景に、ヤエの頬は一瞬で赤くなった。

キ、キス……！

「ごめんね、仕事柄知らない事を聞いたりするのが好きなの。二ホンなんて聞いた事なかったから……つい」

「し、仕事？何をしてるんですか？」

まだ頬の熱がとれない。

「ミーシャ様は情報屋なるものをしてるんですよヤエ様」

「情報屋……アンリさんみたいなの？」

通りで自分について知っていた訳だ。

納得すると、途端にミーシャの表情が険しくなった。

「あんな三流と一緒にしないでよヤエちゃん！こっちはそれが本業なんだから！」

「す、すみません……」

「ヤエちゃん、あの男には近づいちゃダメだよ？あれ、結構いい顔してるけど中身は最悪なんだから！」

もの凄い剣幕のミーシャの顔が、目の前までやって来る。

「ミーシャは昔、具合が悪い時にアンリさんにひん剥かれたんだよね。だからあんまり好きじゃないんだ」

「エドガー！」

興奮したミーシャは顔を真っ赤にして叫び続ける。

あんまり、というよりかなり嫌いであろう。

それを青年、エドガーは楽しそうに眺めている。

これは止めた方がいいのかな……

「ミ、ミーシャさん！あの、怒っている所申し訳ないんですけど……  
……何で私を呼んだのか聞いても良いですか」

「え？……ああ、そうだったそれを話さなきゃね」

落ち着いたミーシャは、ふつと溜息をつき髪を整え「実は」と口を開く。

「ヤエちゃん、ここで働いてみない？」

「え？」

「ヤエちゃんはいわゆる『異世界』から来たって奴なんでしょう？」

「はい」

「ここって、裏とも繋がってて情報が入りやすいの。ヤエちゃんが居た世界の事もわかるかもしれないよ？あ、もちろん私もヤエちゃんの為に情報を集めるよ」

何を言っただかと思えば。

私の忘れた事を、教えてくれる。

そんな事が、可能だなんて。

「私もニホンの事知りたいし、ヤエちゃんも思い出したいでしょう？だからいいかな……って思ったんだけどダメかな」

「いや……私としては、嬉しいんです、けど」

けれど本当に情報等集まるのだろうか。

この国の人間は、全員日本を知らないかも知れない。

接点も見つからないこの場所で、帰れる方法なんてあるのだろうか。

帰れたとしても、それは何十年後になるのかも知れない。

だけど。

「ヤエちゃんは、自分の家に帰りたくない？」

「家……」

「帰れる場所があるんだから、帰らなきゃ。きっと君の親もお友達も、君を心配してるよ」

親、友達。

思い浮かばない彼らに、思いを馳せる。

「いいんですか、本当に……」

「うん！全然大丈夫！ねっ、エドガー！」

満面の笑みを浮かべ、エドガーを見ると彼は一瞬だけ黙り込む。けれどすぐに微笑み「もちろん」と頷かれた。

「すぐに働けとはいわないから。ヤエちゃんが大丈夫な時に来て  
！」

「はい……ありがとうございます」

見ず知らずの人間に、如何して皆こんなに優しくしてくれるんだろっ。

感謝の気持ちで胸が一杯になる。

ありがとう、本当に。

『目障りだ』

再びその声が頭の中で響いたのは、きつと気のせいだ。

14 働いてみない？（後書き）

と、いう事でヤエが働く事になりました^^  
次回で一区切りつけようと思います^^

15 我慢(前書き)

な、長いです。すみません……！  
そして今までよりは甘めです^^^

まあ微々たるものですが(笑)

「……っ！」

声にならない悲鳴と共に、ベッドから飛び起きる。

真つ暗な部屋の中で、ヤエの荒くなつた息だけが響く。

枕元の灯りを付け、時計を見ると夜中の二時をまわっていた。道理で外がまだ暗い筈だ。

「変な時間に起きちゃつたな……」

痛むこめかみを抑え、溜息を漏らす。

まただ、今度は名前を呼ばれた。

ミーシャの酒屋で働く事になつた日から数日、ヤエの身体に異変が起き始めていた。

一日に幾度も訪れる頭痛、ただの頭痛かと思えば直後に頭に沸き上がる何かの映像。

それは途切れ途切れであつたり鮮明であつたりとバラバラであつたが、何れも見るとヤエは恐怖に苛まれていた。

学校のような場所、街中を歩く人々、顔がぼやけて見えないが笑っている少女、そして自分を呼ぶ声。

私はその声を知っている。

けれど底知れぬ恐怖が、それらと共にまとわりつくのだ。

思い出す事が怖い、けれど思い出せないのも怖い。

日に日に強くなる頭痛は、ヤエの精神をすり減らしていった。

「喉……乾いたな。お水……」

水差しを探してみたが、あるのは空の水差しのみ。

そこまで飲みたい訳でも無いが、変な時間に目を覚ました所為ですぐに眠る事もできない。

「確かアンナさん、居間に居るって……いつてた様な」

ベッドからのそのそと這い出て、とりあえず簡単に髪を梳かす。暗闇の館を歩くのは然程勇気があるが……仕方ない。

ヤエはシヨールを羽織り、恐る恐る部屋を出て行った。

居間に着くと、そこにはヤエが予想していなかった人物が大きなソファに座っていた。

ルカである。

「ルカ……さん？」

「あれ？ヤエ？どうしたのこんな時間に」

話しかけられたルカは、最初驚いた顔をしたがすぐに柔らかい微笑をこちらへ向けた。

相変わらずこちらが照れてしまう様な笑顔だ。

「眠れなくて……あの、アンナさんは……」

「アンナは見回りだよ、しばらく帰って来ないと思うな」

そうですか、と答えると「おいで」と手招きされる。

側に寄ると、隣の席をぽんぽんと叩き座る様に促して来た。

断る理由も無かったので、隣に座るとルカの表情が一層優しげになった。

「もう慣れて来た？」

「は、はい。ルカさん達には、いろいろしてもらって……本当にありがとうございます。ルカさんが最初に会った人で、本当に良かったです」

「……本当？」

「はい、本当です」

そう答えると、ルカは一瞬黙り込んだ。

何か不味い事でもいったのかと彼を見上げると、ルカは何故か手で顔を覆い隠していた。

「あ、あの私何か変な事でも」

「……うつん、そうじゃ、ないんだ。本当に」

手をさげこちらを見たルカの顔は、少しか赤く染まっていた。気を悪くしてないなら、いいのだけれど。

「そ、それにミーシャさんとも遭わせてくれてありがとうございますー！」

場の雰囲気を変えようと慌ててミーシャの名を出すと、ルカはすぐにいつもの穏やかな顔に戻った。

「ああ、ヤエはミーシャのお店に働くんかもんね。最初聞いたときは吃驚したな……大丈夫？ 疲れてない？」

とりあえず毎日ミーシャの仕事を手伝っているのだが、ミーシャの所から帰ってくる旅にルカにそう問われる。

心配性なんだなあと、つくづく思ってしまう。

「大丈夫です、ミーシャさんすごく優しくって……毎日楽しいんです」

「そっか」

「一緒に買い物にも行っただんです、ご飯も食べたりとか……この国の洋服もすごく可愛くて」

「買い物に行ったの？」

ルカが少し驚いた様に呟く。

何処か可笑しかっただろうか。

「はい、エドガーさんも一緒でしたけど」

「エドガー……も一緒だったんだ」

気のせいだろうか。

彼の声音が少しだけ、しょんぼりとしているのは。

「……………妬けちゃうな」

「え？」

ぼつりと囁かれたその言葉は、何の意味を持つのだろうか。

「ヤエが他の男の人と仲良くすると、妬けちゃうな」

一瞬で、ヤエの思考がフリーズする。

彼の甘い声でそんな事をいわれると……………おかしくなりそうだ。

何気なく髪を触れられて、心臓がとてつもなく鼓動する。

こ、これはルカさんが紳士だからの行動で、別に、そんな訳じゃ

……………！

「……………っ！」

「ヤエ!？」

まただ。

また頭痛が彼女を襲う。

こんな時にまで、やって来るなんて。

頭を抑えていると、頭の奥底から何かが流れ込んで来る。

ぼやけた視界、掠れた声、これは一体……………

「お前なんて……………？」

「ヤエ……………?どうしたの？」

心配そうに覗き込むルカの言葉も入って来ない程、頭が真っ白になっ

なっていた。

『お前なんて』。

掠れた声は、確かにそう言った。

しかも、いままでより遥かに侮蔑の籠った声で。

「……………さ、最近変なんです」

「変つて？」

「時々思い出すんです……途切れ途切れだけど、記憶が……」  
その言葉にルカの表情が強張る。  
先程のヤエの状態も、その所為なのか。

「こ、わいんです……思い出す事が。思い出したいのに……すく怖くて……、拒んでしまふんです」

「怖い……」

「一日に何回もあ、あるんです……その度に嫌になって……もうわからなくて……」

身体が震える。

得体の知れない恐怖が、私の頭の中で蠢いている。  
欲しいものなのに、こんなにも欲しくないなんて。

「このままいつて……もし全部、お、思い出したら……私は……  
私は……！」

「ヤエ」

ふわりと何かの温もりが触れる。

震えていたヤエの身体を、包む様にルカが抱きしめていた。  
華奢に思われた彼の身体は思っていたよりずっと硬く、大きかった。  
た。

思わず言葉を失ったが、後から火の出る様な恥ずかしさがやって来る。  
だ、抱きしめられてる！

「あ、あのルカさ……」

「一人で怖かったね、ヤエ」

抱きしめたまま、ルカは耳元で囁いた。

びくつと身じろいだが、彼の抱擁は依然として緩まない。

「大丈夫だよ、僕が居るから」

「あ……」

「僕は、君の側にいるから。ヤエを一人にしないよ」

一層ぎゅっと抱きしめられ、背中を赤子をあやす様にぽんぽんと軽く叩かれる。

子供扱いされているのかな……

というよりも、ルカさんはこんな事誰にでもやってしまうのだろうか。

照れてしまう自分が、慣れていない自分が、本当に子供みたいでより恥ずかしくなる。

それでも顔は、熱を引いてくれない。

「……勘違い、しちゃいます」

暖かい彼の体温とやっと来た眠気が、ヤエの意識を手放せさせた。

「……寝ちゃった」

抱きしめた自分の腕の中で、彼女は静かな寝息を立てていた。

抱きしめられて眠ってしまうなんて赤ん坊の様だった。

そっと彼女を離し、起こさない様にソファに横たわらせる。

大切な物を扱う様に、そっと。

「我慢してたんだね……ごめんねヤエ」

ピンクに染まったヤエの頬に、ルカはそっと触れる。

彼女の苦しみ、痛み。

彼女を慰める事は出来ても、彼がそれを分かち合う事はできない。

……それがどれだけ辛い事か。

「……僕も我慢するから、ね」

ゆっくりとヤエの顔へ自分の顔を近づけ、額にそっと唇を付ける。  
今は、これまで。  
恋人でも見るかの様に、彼は眠っているヤエを見つめていた。

15 我慢(後書き)

少し甘めで(今までよりは)いってみました。  
そんなこんなで一区切りしましたが、次回からはシリアスで……い  
けたらいいな

「おい、邪魔するぞ」

「へっ、変態鬼畜男！よくもまあここに來れたわね！」

とある昼下がりに、開店前の「酒場 タリトン」で悲鳴にも似た怒声が響き渡った。

ミーシャの顔は真つ青になったり真つ赤になったりと、忙しなく変化する。

それというのも、最も会いたくない人物が自分の店に來たのだから仕方が無い事だが。

「なんだよつれねえ女だなお前は。昔どれだけ診てやったと思っ  
てんだ」

「きゃー！きゃー！言うな馬鹿！こっちは思い出たくも無いの  
よ！」

真つ赤になりながら、ミーシャは店のグラスやら布巾やらをアン  
リに投げつける。

嫌な顔をし、「おい、ため、やめる阿呆！」といいながらも全て  
それらを避けられる。

本当にこいつはいけ好かない。

「聞け阿呆女！今日は話が」

「私は無いわ！帰ってよ馬鹿！」

「帰らねえよ馬鹿」

「真似しないでよ！ー！」

完全に興奮したミーシャは地団駄を踏み、今にも髪を逆立てんばかりに叫び続ける。

面倒くさそうに溜息を吐き、アンリは頭を掻いた。

「じゃあ勝手に聞くぞ、いいな？」

「何よ、あんたになんて一つだって情報はあげないわよ！」

「違いよ、ヤエの事だよ」

怒り狂ったミーシャの動作がぴたりと止まる。

何でその名前が、と眉をひそめた。

「お前さ、何企んでる？」

「は？」

「何でいきなりヤエと仲良くなってんのかって言うてんだよ」

情報屋ミーシャ・タリトン。

アンリが生業としていられる何でも屋が扱う情報を、遥かに越える量を常に収集している女。

恋人のエドガーも手伝ってはいるらしいが、商品である数多の情報を恋人に私的に教える事は絶対はない。

そして馬鹿高い報酬を請求し、それが国王だろうが盗賊だろうが一切の遠慮もせずに情報を交換する。

自分を酷く嫌っている事以外、この女は仕事に益の無い事など興味を持たないだろうに。

何故、ヤエを店で働かし、『友達ごっこ』をしているのか。  
単に利用しているだけなのだろうか。

「別に……関係ないでしょ」

「二ホンとやらの事が知りたいからか？変だろそれ、お前が知らない場所をこの国の誰が知ってるって言うんだよ」

「情報は、他国からも常に入って来てるわ。他の三国分の情報も

あれば、一つくらい引つかかるでしょう?」

乱れた髪を整え、散らばった布巾を拾う。

避けられたグラスは……粉々だ。

「次元の違う人間の事を、どう調べるんだよ」

「あんたって本当に冷徹な奴ね、ヤエちゃんの前で同じ事いつてみなさいよ。私があつ飛ばしてやるから」

「友達ごっこも大概にしるよな。お前、そういうの得意じゃないだろ?」

友達ごっこ。

ぶちつと、頭の隅で何かが聞こえる。

完全に理性が飛んだ。

拾った布巾をぎゅつと握りしめ、もの凄い勢いでアンリの顔へ投げつける。

いきなりだったので、さすがのアンリも避けられず、ばふつと嫌な感触を受ける事になった。

「帰れ!!もう二度と来るな!」

「ミーシャさん、こんにちは……」

怒号と同タイミングで、噂の本人が現れた。

場の空気が凍り、頭に血の昇っていた筈のミーシャも勢いをしゆるしゅると無くしていく。

そしてやはりアンリだけは変わらず「おう、ヤエか」と挨拶をした。

「あ、あの……私、帰ります……」

「ちつ、違うのヤエちゃん!ヤエちゃんに言ったんじゃないの!この馬鹿男に言ったの!」

今にも泣きそうになったヤエの元へ、目に留まらぬ速さでミーシヤが駆け寄る。

もう憎き人物であったアンリの事など、彼女の頭のどこにも無い。

「今日は買い物よね！ごめんね迎えに来させちゃって！もう行く！私行きたい店あるの！」

「い、いいんですか……アンリさんがいるのに……私なんかと」

「ヤエちゃんの方が億倍大切よ、ほら行く！」

強引にヤエの背中を押し、アンリを店に残したままミーシヤは出かけてしまった。

焦りすぎて、俺が何かするかもしれないことすら考えてなかったのか。

アンリは、胸ポケットから煙草を取り出し、怠そうに口へ運んだ。

16 疑惑（後書き）

またまた放置……すいませんでした……

そして今回はもう恐らくないであろう（多分？）二人の絡み回でした。

犬猿とまではいきませんが、程よい仲の悪さです

第一族国は、春を迎えていた。

日本の様に桜や梅が咲いている訳ではなかったが、中央広場には薄桃色の恰好をした人々がパレードなるものを行っていた。

大きなバルーンで出来た兔を、踊り子の服を来た女性が手に持つて歩いていたり、

ケーキの形をしたフロート車の上に燕尾服を来た男が白いハトをどこからともなく繰り出している。

こんなの、普段は絶対に見れない。

ヤエは目を輝かせながらパレードを眺めている。

「春が来るとね、国を挙げてのお祭りをやるのよ。パレードも毎日変わって、お店もたくさんでるんだから」

「お祭り……すごいです、すごく綺麗です」

「でしょ？私、春の祭りは昔から好きでさー」

楽しそうにミーシャは微笑み、フロート車の上の男を指差す。

「ちなみに王宮騎士団も関わってるの、あれエドガーの友達よ」

「王宮騎士団？エドガーさんは、お城で働いているんですか？」

「うん、エドガーは王宮の護衛の兵士。普段はいろいろ怖い連中だけど、祭りになると馬鹿するんだから」

エドガーさんは王宮騎士団の人なのか。

おっとりして優しいそうな彼が、戦争で剣を振るう。

あまり想像ができなかった。

「……意外でした」

「そう？」

「はい、エドガーさんもこのお祭りも」

ミーシャの顔に、影が差す。

ここは移民を迫害する国、白夢病に苛まれた国。

彼女にとって居心地のいい場所では決してない。

それと相對して、春を愛でる祭りを国民総出で行う。

まるで誰一人、差別されている者など無い様に。

「……私さ、ヤエちゃんが可哀想だからあの時呼んだんじゃないよ……」

「ミーシャさん？」

ヤエの服の袖を、ミーシャはぎゅっと掴む。

「最初は、二ホンの事も知りたかったけど……でも、そうじゃなく……」

友達ごっこも大概にしるよな。

アンリの声が、ミーシャの心を抉る。

「この国が、ヤエちゃんにとってあんまり良くない事はわかってる。ヤエちゃんも、早く故郷に帰りたい事だって……わかってるつもりだよ」

「……」

「でもっ……、私はヤエちゃんと、友達になりたい。勝手だけど、帰って欲しくないって……思っちゃって」

かあつとミーシャの顔が赤くなる。

突然の事に、ヤエもどうしたらいいか分からなくなる。

「ごめんね、本当……いきなりこんな事」

「そっ、そんな事ないです！」

目尻に涙が滲むミーシャを見て、さすがのヤエも大声を出さずにはいられなかった。

「嬉しいです、ミーシャさん。ありがとうございます」

「……？」

「ミーシャさんがそういつてくれるなんて思いませんでした。私、一人で勝手にお友達になれたらなあ……思ってた」

「勝手にだなんて……」

ふるふると頭を振り、ヤエの言葉を全力で否定する。

私だって、ヤエちゃんとお友達になりたかったよ。

「それで、その、周りの女の子も少なかつたから……もう何てい  
つたらいいのかわかんないくらい、嬉しいんです」  
何だか気恥ずかしい。

友達の作り方って、こんなのだったつけ。

ヤエの顔も赤くなると、「そっか……」とミーシャの顔が綻ぶ。

「嬉しいな、ヤエちゃんは私の初めての友達だよ」

「えっ、そうなんですか？」

「えへへ、恥ずかしながら」

自分よりも可愛らしく、誰からも好かれそうなミーシャ。

私が、望んでも手に入らないものを持っているミーシャ。

そんな彼女に友達がないのが、不思議で仕様がなかった。

……私が望むものって？

「……とりあえず、私ジュース買って来るね！」

「え、あ、はい」

ぼおつとしていたので、ミーシャの言っていた事を聞きそびれた。  
曖昧に返事をする、「いつてくるね」と嬉しそうに彼女は群衆  
の中へ消えて行く。

それを手を振り見送る……これが、友達同士の……

「君、とってもかわいいねえ。……どれくらいの価値がつくのかな」

耳元でそれが聞こえた時には、既に誰かの手がヤエの口を塞いでいた。

17 友達（後書き）

今度はミーシャとヤエの友達回。

まあたまにはこんなの……と思いきや、ややシリアス突入です^^^；

「シン！シンの頭！良いモン仕入れて来たぜ！」

三日月の浮いた、暗い夜。

中央広場から遠く離れた国境近くの路地裏を、1人の男が駆けて行く。

図体は横に大きく、背は成長期の青年よりも小さい。

伸びつばなしの顎髭がつき、あちこち汚れのついた醜い顔が、醜い笑いを蓄えていた。

小脇に薄茶の大きな麻袋を抱え、路地裏の突き当たりのボロ倉庫へ飛び込む。

「起きてやすかい！頭あ！」

「……んだよ、うるせえなデブ」

薄暗い倉庫の奥から、気だるい男の声が返って来た。

ふわっと欠伸をしつつ、グレーの髪の若い男が小男の所へ歩み寄る。

少し遅れて、下着姿の女が身をくねらせる様に男の側につく。

「てめえのでけえ声で起きちまったじゃねえか、くだらなかつたらぶつ飛ばすぞ」

「す、すいやせん！だけど、良い『商品』が手に入ったんです」

そう言って、小男は麻袋を地面にゆっくりと置く。

縛った袋の口を開け、中の物体を放り出す。

「……ふーん。純血、か」

男は面白そうに口角を挙げる。

中からでてきたのは少女、黒髪黒目の若い少女。

……ヤエである。

手首と手足を縄で縛られているため、身動きは取れない状態であるが。

「いいじゃん、やるなデブ」

「へへっ、こつちもびつくりしやしたぜ。街ん中で、普通に純血の移民がいるとは思わなかったですし」

「だろうな、しかも妙に小綺麗な恰好してやがる」

男はにやにやと笑いながら、小男に数枚金貨を渡す。

青ざめ、震えるヤエを見落としながら。

「女あ、名前は何だ？」

「……あ……」

恐怖で声がでない。

何が起こっているのかさえ、全く分かってもらえなかった。

「名前だよ名前。……まあ、聞いても意味ねえか」

つまらなさそうに顔を歪め、男は隣にいた下着姿の女性の方へ顔を向ける。

そして何の脈絡も無く、彼女の唇に自分の唇を押し付けた。

「……んっ」

下着姿の女性は、濃厚な口づけに満足げに答える。

食む様に唇を吸われ、離れては口づけ、ただその繰り返し。

目の前でそれを見ていたヤエには、恥ずかしさよりも何故こんな

所を見なければいけ無いのかという疑問の方が強かった。

それでも長く繰り返される口づけに絶えきれなくなり、思わず目を逸らした。

気分が悪い……何なんだこの人達は。

嫌なのに、やっぱり恥ずかしくて顔が熱くなるのが、とてつもなく嫌である。

早く冷めて、早く、早く。

しかしその瞬間を、逃すまいと見ていたのが、目の前の男だった。

「……おいおい、マジか？」

幾度目の口づけを止め、男は面白そうにヤエの方を見た。

まだ物足りない下着姿の女を押しつけ、ヤエの前でしゃがみ込むいきなりの事でヤエは思わずびくつと反応すると、男はヤエの顎を掴み持ち上げる。

「お前、男を知らねえな」

「……っ！」

かあつと頬が赤くなり、頭が真っ白になる。

何をいうんだ、そう思った時だった。

男は、ヤエを力強く押し倒し、縛られた手首を彼女の頭上へ押し上げる。

勢い良く押し倒された所為で、地面に背中が強く打ち付けられる。

「きゃっ……っ！」

「おー、良い反応じゃねえの？乳臭くて、ヤリがいがありそうだ」  
楽しげに目を細めた男は、ヤエの首元に顔を埋める。

そしてざらつとする嫌な感覚が首元を伝った。

悪寒が走り、身体が仰け反る。

舐められた、その事実が更に頭を混乱させる。

「いいねえ、久々にお前みたいな女見たぜ。感じやすいのか？」  
今度は目の前に顔を寄せられた。

言葉を話すその口が、ヤエのそれに今にも付きそうになる。

「……や……っ、やめ……」

「ひよっとして、キスもまだか？」

男が舌なめずりをし、食べ物でも見るかのようにヤエの目を見つめる。

止めて。

それすら言葉にだせないなんて。

無意識に涙がにじみ、頬を伝う。

助けて、誰か、助けて。

ルカさん。

「おい、止めるシン」

唇が触れそうになった時、突如男の身体がヤエから引きはがされた。

何が起こったのか分からなかったが、開けた視界には厳めしい顔をした大男がシンという男を引っ張り上げていた。

忌ま忌ましそうにシンは舌打ちをしたが、大男は気にもせず倒れたヤエを持ち上げる。

「今からいい所だったんだろうが、ハイネ」

「あんたはそうやって歯止めが利かなくなる。上等な商品なんだろう、もう牢にいれとくぞ」

大男は無愛想にそう言い放ち、ヤエを担いだまま奥にある扉を開いた。

この人は、助けてくれたのだろうか……？

担がれたまま、ヤエは大男を仰ぎ見たが、やはり無愛想な顔のままだった。

18 助けて(後書き)

新キャラがどんどん増える^^;  
シンは、またいろんな意味でヤバい奴ですね

「これは……」

倉庫の奥には、薄汚れた部屋があった。

抱えられたまま部屋に入るや否や、部屋中からすすり泣く様な声が生まれる。

声の発生場所には……四角い大きな檻が数個程見られた。

大型動物用であるらしく、そこには何人もの小さい子供が押し込められていた。

違う檻にはやせ細った女性、倒れて動かない少年、泣きながら苦しそうに咳をする少女……

呆然としていたヤエを、ハインという男は空いている檻の中へ放り込んだ。

「さつきはすまなかつたな」

きちんと鍵を閉められた後、そう言われた。

言葉と行動が一致していない。

「あいつはからかっていただけだったが、お前には辛かっただろ  
う」

「は……」

「許せ、とは言わんが気にはするな。ここでは深く考える事は自殺行為だ」

隣から何かがもぞつと動く。

横目でそつと見ると、すすだらけになった4、5歳の少女が丸くなって眠っていた。

首には、今自分が付けているのと同じ首輪が付けられている。

「食事は一日二回だ、今日は数時間後に来るだろう」

「あ、あの……！さ、さっきは助けてくれて、ありがとうござい  
ました……！」

ハイネは檻から離れようと立ち上がった。

慌ててお礼を言つと、ハイネの動きがぴたりと止まる。

「礼を言つな」

「え……」

「お前は俺に礼をいう筋合いもないし、言った所でお前をここから逃がす事はない。俺は、まだ今の時点ではシンの仲間だからな」  
冷たく見下ろされ、淡々と言い放たれる。

表情が変わらない所為か、何を考えているかは分からない。

「だが、聞きたい事があるなら聞く」

「え……？」

「答えられる範囲だがな」

どついつ事だろうか。

心臓がどくどくと早く鳴り始める。

怖い。

でも、聞かなきゃ

「こ、ここは何処ですか……！それに、私、どうしてこんな所に……ここに居る人達は、一体どうして集められているんですか……！」

震える声は、相変わらず小さくか細い。

ハイネに届かない程の自分の声に、ただただ嫌気がさす。

「……ここは、国境近くにある倉庫だ。この国での、シン達の一時的な拠点だ」

「この国での……？」

「そして、ここにいる人間とお前は、シン達奴隷商が攫って来た奴隷になる前の人間達だ。『元人間』……が正しいだろうな」  
奴隷。

真つ白になった思考が、必死にその言葉を受け入れようとする。  
そんな、まさか。

必死に否定し続けてみたが、隣で眠る少女の首輪が頭からちらちらと離れてくれない。

「ど、れい……って……」

「西の移民は、普通だろう」

「普通って……っ！それに、私は移民じゃ……」

「ないのか」

ハイネの眉が少しだけ上がる。

驚いているのだろうか。

「……まあ移民だろうがなかるうが、もう関係ない。お前が、」

女『で『処女』で『健康』であるならば、な」

「………どういう事ですか」

「奴隷商は、孤児や娼婦、違法滞在者に移民、まれに花売りの娘を攫い売買する奴らの事だ。俺は、そいつらに雇われ警護している。お前の様な、売れる商品を監視する為にな」

商品。

ぞくつと身体が急速に冷える。

私やここに居る人達は、みんな『商品』。

「栄養の足りていない孤児は一般的な値段あるいはそれよりも低い値段で買える。次に高いのが二十代以後の娼婦、その次が違法滞在者や移民の若い男。そして、健康で処女であるお前が、一番高い」

頭から足の爪先まで、ハイネは流れ作業の様にヤエを眺める。自分の発言の異常さには、何の違和感も感じずに。

「顧客は、労働だけを目的にしている訳じゃない。娼婦よりも、ガキくさい男を知らない少女を……」

「やっ、止めてください！！」

思わず声を荒げてしまった。

けれど、これ以上は聞くに堪えない。

聞きたくななんてない。

「……もう、わかりました。もう、聞きません、から」

唇を噛み締め、俯く。

怖い、辛い、悲しい、悔しい。

吐き出したくても、吐き出せない塊が一気に押し寄せて来る。

けれど、それらよりも抜きん出て声に出さなければならぬ感情があった。

こんな、身寄りの無い幼い子供までも、こんな目にあわせるなんて。

この子達を、この人達を、私利私欲の為に、『買う』なんて。

「……あなたたちは、最低です」

恐怖よりもむしろ、彼女の身体は怒りで震えていた。

だが、ヤエの精一杯の罵倒は、「そうか」と無愛想に受け流された。

19 商品(後書き)

今回は少し暗めです。

甘め要素は……しばらくないかもなあ笑

20 だいじょうぶ(前書き)

今回は結構長め。

うだうだしてます

「ほおら奴隷共！お待ちかねのご飯よお」

檻に入れられた数時間後、誰かが部屋のドアを蹴り開けた。思わずうたた寝をしていた為、勢い良くドアを開けられた音に飛び起きる。

頭が混乱したまま、檻の外を見ると先程の下着姿の女性がいた。服はちゃんと着ていたが、服と言ってもベビードールの様な物で下着が透けて見えている。

「もあ……何でアタシがこんなゴミ共の食事運ばなきゃいけないのよ！ハイネもそう思うでしょ！」

「……知らん」  
大きな袋を抱えたハイネが、面倒くさそうに答える。  
女性の方は、小さな服を抱えながらハイネに抱きしめる様に寄りそう。

この人は……シンと言う人と居た……

「連れない男ねえハイネったら。いい男なのに、もったいない」

「アリーシャ、顔を近づけるな。お前の香水が鼻につく」

「んもう、冷たあい」

口を尖らせ、女アリーシャはハイネから離れる。

子供の入った檻の前まで歩み寄り、鍵を開け袋を投げ捨てる。

静かに寝込んでいた子供達は、待ってましたと言わんばかりに袋へ群がった。

「ちよつと！なに鍵閉める前に食おうとしてんのよ！屑！」  
顔を引き攣らせ、アリーシャが群がる子供達を蹴り飛ばした。  
一人はうつと唸りながら転がり、一人はそれに引きずられる様に  
倒れ込み、一人は悲鳴すらあげずに倒れる。  
舌打ちしながら倒れ込む子供をアリーシャは蹴り続ける。

「アンタ達屑の為に『わざわざ』食事を持って来てんのよ、逃げ  
ようとするんじゃないかって礼ぐらい言ったらどうなのよ！』ありがと  
うございます、アリーシャ様』でしょう！？這いつくばって頭擦り  
付けて、礼を言うのが屑の役目つつてんだろ！」

更に声を荒げるアリーシャに、蹴り続けられる子供は必死に頭を  
庇おうと丸くなった。

小さな声で抵抗する様な声が聞こえたが、しばらくしてその声も  
聞こえなくなる。

「ちよつとお、何気い失ってんのよ！売れなくなるでしょう！」  
そしてまた蹴る。

子供は、ぴくりとも動かない。

「あ………！」

思わず声が漏れた。

信じられない光景に、ヤエは必死に悲鳴を上げない様に口を塞ぐ  
事しかできない。

ひどい、気を失うまで蹴るなんて。

「………何よアンタ」

もう一発蹴ろうとしたアリーシャが、鋭い眼光をこちらへ向けた。  
彼女の問いに答えずに居ると、子供の居た檻を荒く閉め、ヤエの  
いる檻にまでやって来る。

鍵を開け、檻の中に入った途端にヤエの首輪に付いた鎖を勢い良

く引つ張る。

「……っ！」

「文句あんの？」

「そ、それは……」

「移民風情が、アタシに意見すんの？死にたい訳？」

鎖をまた引つ張られ、アリーシャの目の前へ思い切り転ぶ。

それを見て、アリーシャがぷつと吹き出す。

「無様あ、這いつくばってんのがお似合いよお？」

その声に、聞き覚えがあった。

その顔に、見覚えがあった。

自分を侮辱するその顔が、誰かに似ていた。

見覚えのある制服を来た、女の子。

一瞬だけ、その顔がアリーシャのそれと被る。

「……っ！」

頭痛が、再びヤエを襲う。

思わず呻き頭を抑えると、「……何？」とアリーシャの不機嫌そうな声が降って来た。

「何でアタシの顔みて、嫌な顔してんの」

「……っ！」

「……答えなさいよー！！」

激昂したアリーシャが、ヤエの頬を思い切り引つ叩く。

じん、とした痛みは頭の痛みも忘れてしまう程、熱を帯びていた。

見上げようとすると、アリーシャの手がヤエの髪を引つ掴み勢い良く引つ張り上げる。

「シンはアンタの事、大切に扱えなんて言ってたけど……そんな事したこつちやないわよ？アタシね、アンタみたいな奴嫌いなものよ。気に食わないの、被害者面しちやってさあ」

化粧を施したアリーシヤの顔が、醜く歪む。

心底楽しそうな、醜い微笑みがヤエへ向けられる。

「アタシが何をしようと、シンは許してくれるわ。アンタが『突然』『怪我をして』『死んだ』って、アタシの所為にはならないんだから」

ヤエの髪を離し、投げ捨てる。

勢いよく檻にぶつかり、呻き声をあげるヤエを一瞥もせず、アリーシヤは檻から出た。

「まあいいわ、これくらいにしといてあげる。とりあえず、アンタ食事抜きね」

つまらなさそうに欠伸をすると、アリーシヤはそのまま部屋から出て行った。

ハイネが黙っていたが、ヤエの方へと一瞥を送り「……すまん」とだけ言ってアリーシヤに続く。

再び戻った沈黙は、ヤエに絶望を与えるのに十分すぎるくらいだった。

「……痛い」

引つ張られた髪に触れ、檻にぶつかった背中を擦る。

ここの人達は、こんな仕打ちをいつも受けているのだろうか。

先程の様に、怒りをぶつけたかった。

けれど、ダメだった。

あの女性に対して、恐怖しか生まれなかった。

無意識に涙がこぼれ、我慢できずに嗚咽が漏れる。

怖かった、本当に。

「……おねえちゃん、だいじょうぶ？」

「……君は」

隣で眠っていた少女が、心配そうにヤエの元へ寄ってきた。

アリーシャが檻にいた時は、ちゃんとは確認できなかったが檻の隅に座り込んでいた気がする。

「ごめんね、あたしこわくて……おねえちゃん、いたかったですよっ？」

「わ、私は別に……！」

慌てて涙を拭い、少女の方へ向き直す。

自分よりも傷だらけのこの子に、心配させてはいけない。

「私は平気……それよりも君は大丈夫？私の所為で、ご飯が……」

「へいき、ごはんがないひだつてあるから……だから、だいじょうぶだよ？」

少女はそう言って、へへっと笑った。

何が楽しくて笑っているのか。

いや、楽しい訳ではない。

私を安心させようと、しているんだ。

「ありがとう……ありがとね」

ぎゅっと、微笑む少女を抱きしめる。

声は震え涙が目に溜まった。

少女に悟られない様に、ヤエは一層強く少女を抱きしめた。

20 だいじょうぶ(後書き)

アリーシャ再び登場。

書いてるこつちも、嫌なキャラです^^^;

21 逃げよう(前書き)

またまたちょっと長めです^^;  
そろそろ分岐点ですねー

## 21 逃げよう

一緒に檻にいた少女は、ユツカという名前らしい。

檻に入れられてから、恐らく一日経った。

時計がないので時間の感覚はわからなかったが、二回目の食事が来たのもう夕方ぐらいにはなっているだろう。

閉じ込められているだけの時間は、かなり長く感じられた。

孤独、恐怖、怒り。

この空間は、それらをじわじわと増幅させていく。

けれど、ヤエは隣にいるユツカと話す事でそれらの気持ちを落ち着かせていた。

「ユツカは、どこから来たの？この生まれじゃないっていつてたよね」

「うん、ここよりももつととなくて……もうないんだよ」

「無い？」

この世界には四つの国がある。

ここを除く他国の内の一つが、無くなってしまったのだろうか。

「大きい国なんでしょう？どうして？」

「おおきくないよ、だいさんぞくこくのぞつこくなんだって。ママがいったの、だからちいさくてもしょうがないんだって」

第三族国の属国。

……この子は多分、言葉の意味を分かってはいない。

「おつきいけんをもったひとたちがね、たくさんきたの。いろん

なところから、ひがいつぱいで……ママとパパといっしょにげ  
たんだ」

「それは……戦争？」

「だからもうくにはよつつしかないんだって。だいさんぞくこく  
がまもつてくれなかつたから」

何故だか、胸がずきりと痛んだ。

幼く無垢な、戦火に巻き込まれたユツカ。

ようやく逃げ出せたのに、奴隷として捕まってしまった。

何故、第三族国は何もしてあげなかつたのだろうか。

いや、第三族国だけではない。ここもそうだ。

この国だって、奴隷商をこんな風に野放しにしているじゃないか。

「……ユツカ、やっぱここにいちゃいけないよ」

「……うん」

「だから、一緒にここから逃げる方法考えよう？」

そう言うと、ユツカの顔がさつと青ざめる。

ぶんぶんと頭を横にふり、怯えながら答えた。

「む、むりだよおねえちゃん！にげられないよ」

「やってみなきゃ、わからないよ」

「だ、だつてにげたら……あのおねえちゃんが」

アリーシャか。

あの女のしそうな事は、大体予想がつく。

きっと、ユツカはそれを幾度も見て来たのだろう。

しかも、たった一人で。

「でも、このままじゃ本当にどこかへ売り飛ばされちゃう。私は、  
そんなの嫌だよ」

「で、でも……」

「ユツカは嫌じゃない？怖い人に、怖い事されたり殴られたりす

るかも知れないんだよ」

「い、いや！」

不安げな顔で、ユツカはまた頭を振った。

想像してしまったのか、少しだけ涙が滲んでいる。

せめて、ユツカだけでも逃がしてあげたい。

「じゃあ一緒に逃げよう？チャンスは絶対あるよ」

「おねえちゃん……」

「大丈夫、私がユツカを絶対に守るから」

ね？と頑張つて笑顔を見せる。

自分の発言の無謀さには、ほとほと自分でも呆れている。

一回しか無いチャンス、それを実現するのは限りなく不可能に近い。

それでも、帰らなければいけ無い。

あの人の所に、早く、戻りたい。

あの人達と、また一緒に居たい。

会いに行かなきゃ。

「何の話い？」

楽しげな声が、檻のすぐ近くで聞こえた。

慌てて振り向くと、シンが檻の外で「やあ」と手を振り笑っている。

聞かれた？

いつの間に、そこに居た？

冷や汗が一気に流れ、無意識にユツカを守る様に後ろへ誘導する。しかしシンは、にやにやと笑うだけで何も言って来ようとはしな

かった。

「な、何ですか……?」

「いやあ、お前をもう一回見とこうかなあと思ってよお」

「私を?」

「そ、お前が忘れられなくて。お前、結構かわいいからさあ  
ふざけた言動が彼の口から次々と出て来る。  
からかわれている、気にしちゃダメだ。」

「ちょっと、お前こっち来いよ」

「……どうしてですか」

「いいだろ、来いって。あ、そのガキはいいよ何もしないから  
しっしっ手で払われ、「お前はおいで」とわざと甘い声で呼ば  
れる。」

何をされるのだろう、アリーシャの様に殴られるのだろうか。  
身構えつつ、ゆっくりとシンの元に近づくと、シンはにやにやし  
ながらヤエの顔を眺めた。

顔を見た後に、視線を下げ「まあまあかな」と胸を凝視する。

「お前、俺に飼われてみるか?」

「は……?」

「お前なら、可愛がってやってもいいんだけどなあ。毎晩楽しい  
ぞ?」

身体が熱くなったが、必死に顔に出さない様に我慢する。

「あ、あなたにはアリーシャさんがいるじゃないですか……」

「アリーシャ? あああいつそんな名前だったっけ?」

「え……?」

「元奴隷の名前なんて、いちいち覚えてられっか。しかもあれ、

俺より年増だしな」

酷い言われようだ。

アリーシャは、シンの事をかなり信頼していた（と思う）のに。

「お前が俺の側にいるんだったら、あいつは捨ててもいいぞ？」

「なっ……」

「あいつにも飽きたしなあ、年増で処女じゃないがまあ金にはなるだろ」

あまりにも酷すぎて、言葉が言えない。

アリーシャも決して良い人ではなかった。

だが、この男は、それを遥かに超している。

彼を悪人と呼ばずに、誰を呼べばいいのだろうか。

「……嫌です」

「そうするとお前は一生奴隷だけど、いいのか？」

「それも、嫌です」

「わがままだねえ、自分の立場をよく考えてものを言えよ？」

笑ってそう言われたが、彼の目は笑っていない。

彼の言葉も、脅しが少なからず籠っているのは間違いない。

「まあ、また聞かさ。お前が売られるのは二日後の予定だ、それまでに……」

「な、なりませんから！」

「ああそうかい、それじゃあ……」

首輪の鎖を、ぐいっと引っ張られる。

顔が檻に押し付けられ、シンの唇がヤエの耳元に触れる。

耳を食む様に噛まれ、囁かれる。

「一生逃げられないなあ、そのガキも。残念だねえ」

ヤエの顔が、一瞬で蒼白になったのは、言うまでもなかった。

21 逃げよう(後書き)

ヤエ脱出を決意する

そしてタイミングの良すぎるシン、お前最初からいただろ！(笑)

22 兆し（前書き）

今回も長め。

そしてちょっとアレ（死亡描写）があるので、一応ご注意を^^^；

それが起きたのは、恐らく二日後の事だった。

食事を持って来たアリーシャの機嫌が、二日前よりも明らかに悪かった。

常に苛ついた表情で、一緒にいた仲間と思しき男達に八つ当たりしている。

興味はなかったが、彼女の機嫌が損なわれる事でこの人達に飛び火するのは避けたい所だった。

「もう最悪！何でアタシがこんな目にあわないといけないのよ！」

「ど、どうしたんですか姐さん」

「さつきさあ、奴隷市場いつてきたんだけどお……こつちが売る予定だった男の奴隷が勝手に逃げ出して自殺したのよ」

さすがに仲間の男も、驚いた様子である

しかしアリーシャは「最悪でしょ？」と舌打ちをした。

「高値で売るつもりだったのに、勝手に死んだから相手側もカンカンなのよお。弁償しろ、とかタダで違うのよこせ、とか。こつちが大損してるのに……アタシなんて売った金で新作の指輪買う予定だったのよお？」

「そ、そうですね……で、どうするんですか？相手側には」

「知らないあい、シンが何とかするんじゃない？あんなの、すぐに殺しちゃえばいいんだわ。」

何をいつているんだろう、この女は。

もはや、彼女の放つ言語が異星人のそれと思える程になって来てしまっている。

自ら命を絶った奴隷、売られてしまいうくらいならいっそ死んでしまおう。

かつては人間だった『元人間』、その人をこんな結果に陥れたのはこの人達だというのに。

どうして、その人を蔑ろにできるのだ。

悔しくて、たまらない。

「やっぱり、奴隷って本当に役立つはずね。勝手に自分で死んだくせに、迷惑をかけることしかできないのよ」

ヤエは自らの怒りを抑えるのに必死だった。

ダメだ、今逆らえば逃げるチャンスを失ってしまう。

食事を与える時に檻を開ける、その瞬間を狙うんだ。

苛つきながら食事を運び、アリーシャが檻に入ってくる。

ユツカと顔を見合わせ、走ろうと足に力を込めた。

その時だ。

「……ちょうどいいわ、今日たしかあんた売る日よねえ」

持っていた食事を、アリーシャは床に無造作に捨てる。

それを勢い良く踏みつぶした瞬間、ヤエの注意がそれへそれへまわった。

それが不味かった。

「このガキも、今日売っちゃおうか」

その発言に反応したユツカを、アリーシャは決して逃さなかった。首輪の鎖を引っ張り、自分の目の前まで引きずり出す。

ユツカがげほげほと咽せると、「立ちなさい」と低い声で命令する。

「あんたも結構良い値らしいけど、逃げられたら元も子もないか

ら……一応保険って事で」

「や……！」

「ちよつと！逃げるな！」

突然の事で混乱したユツカは、慌ててそこから離れようと立ち上がる。

しかしそれが、更にアリーシャの機嫌を損なわせる。

「あんたたちは言う事聞いてりやいいのよ！飼い主様に逆らおうとか、考えてんじゃないわよ！」

アリーシャの蹴りが、ユツカを背中に命中した。

転がったユツカを更にアリーシャが追い打ちをかける。

「あ……っ！ユ……ツカ……！」

「あんた、売れなかつたら承知しないわよ！ここで一生労働してもらうから！」

痛そうに顔を歪めるユツカに、ヤエはただ見る事しか出来ない。

辛いのはユツカなのに、自分が怖くて震えてしまう。

やめて、やめて、やめて。

お願いだから、その子に乱暴しないで。

「本当、あんた達って目障りなんだから！いいかげんにしなさいよこの……」

「……っ止めてください！」

怖かった、彼女の前にまた出る事は。

でも、もうこれ以上は我慢できなかった。

「……ああ？」

ユツカの前に立ちふさがるヤエを、訝しげにアリーシャは見下ろす。

「お、お願いです……この子を、ユツカを売らないで……！」

「何いってんの？頭おかしいのあんた」

青筋をたて、アリーシャはヤエの頬を殴る。  
今度は拳だった為に、唇が切れ血が滲む。

「商品を、売らない商人っている訳？いないでしょ？あんたが何  
とおうとこのガキは売るわ」

「……お願いします、止めてください……」

滲む血を拭う事すらせず、ヤエは頭を下げる。  
屈辱だった、でもユツカは私が守らなければ。

「うるさいな！黙れよ！」

完全に激情したアリーシャは頭を下げたヤエの頭を持ち上げ再び  
拳で殴る。

「あたしに指図するな！あんたは、ただ言う事を聞いてればいい  
んだよ！」

その怒り狂った彼女の表情が、ヤエの中の何かと一致する。

この状況、この顔、この声。

また、思い出してしまふ。

思い出したくない、思い出したく……

『……あんななんて、消えちゃえ』

「おい、何してる」

アリーシャの動きが止まる。

背後にいたシンの冷たい声が、冷たい視線がこちらへ注がれる。

「あ、聞いてよおシン！」

ヤエから離れ、素早く彼の元へ寄りそう。

嫌な状況だ。

「こいつ、私に歯向かったのよ！商品の癖に……ねえもうさっさと  
と売っちゃいましょうよ！」

「歯向かう……」

シンがじつとヤエを見つめる。

そしてしばらく黙った後、アリーシャに向かい合わせになる様に振り向いた。

「てめえ、何してんだ」

銃声。

一瞬の事だった。

何かが破裂するような音が響いたと思ったら、アリーシャの身体が大きく揺らいた。

額に赤黒い穴が空き、目を見開いたまま彼女は勢い良く倒れる。

シンの手には、銃が握られていた。

「ね、姐さん！」

「あれだけ商品に手え出すなっていったら……頭ねえのかこいつは」

完全に息絶えたアリーシャを、シンは汚い物を見る目で睨みつけ、蹴り飛ばす。

先程まであれだけ叫んでいた彼女の身体が、人形のように転がって行く。

「……今、何を……！」

「いらねえから撃った、それだけだ」

何か悪い事でもしたか？彼はその後続けた。

死んだ、人が死んだ。

どうして、こんなにも簡単に、殺せるのか。

どうして、こんなにも簡単に、死んでしまうんだ。

どうして、何もできないんだ。

「今の音は、何でしょう」

部屋の外から、静かに誰かがそう言った。

静寂に満ちた部屋の中で、シンは一人身構える。

今の声は。

警戒するシン達とは違って、ヤエだけはその声に聞き覚えがあった。

綺麗な澄んだ声、聞いた事がある、この声。  
すると、勢い良く扉が蹴破られる。

アリーシャの時より数倍も、轟音を立てて。

「ご機嫌麗しゅう、奴隷商の殿方達」

そこにいたのは女。

美しい容貌とは裏腹に、嫌いな相手にはとことん毒舌をかました女。

自分の事を心底心配してくれた、メイド服を着た女。

「皆様、挽き肉とぶつ切り……どちらになさいますか？」

彼女はそう言って、妖しく微笑んだ。

22 兆し（後書き）

次話で一区切りです。

最近出番なかったこの人の登場でした^^豪快……

次はルカも久々にでます〜多分・

「ア、アンナさん……！」

突如現れたアンナの姿に、他の誰よりも驚いたのはヤエだった。やはりメイド服を着た彼女が、どうしてここにいるのだろうか。

「何だてめえは……そんな恰好で、俺達にご奉仕でもしてくれるのか？」

卑しい笑みを浮かべ、シンはアンナの元へゆっくりと近づく。

後ろではシンの仲間が彼女の姿を舐める様に見つめている。気持ち悪い、吐き気がしてしまいそうだ。

「生憎、私はあなた方の様な下衆で愚昧で卑小な殿方に御仕えする程困ってはおりません。私は、そこにいらっしゃるヤエ様を取り戻しに来ただけです」

「……口が悪いねえ美人のねーちゃんは」

手に持った銃をアンナの顔もとに近づけ、するするとそれを胸元へ降ろして行く。

動じないアンナを見つめ、シンが舌なめずりをする。

「強いねえ、銃は怖くないってか？」

「いえ、貴方が怖くないだけですわ」

「何それ、挑発でもしてるの？」

銃を突きつけたまま、シンはアンナの髪に触れる。

髪から頬へ、肩へ腰へと手は滑らかに下がっていく。

そしてスカート裾をつまみ、たくし上げようとする。

「触るな溝鼠が」

刹那、アンナの姿がシンの前から消える。

しゃがみ込んだ彼女は、脚払いをし、同時に銃を持つ手を掴み上げた。

か弱そうな彼女の手が、ぎりぎりとしんの手首を圧迫し銃を落とさせる。

バランスを崩し後ろへ倒れたシンに多い被さる様に、アンナはのしかかった。

「ルカ様。私に、この者を殺す許可を」

「止めな、アンナ」

殺気立ったアンナの後ろに、見覚えのある青年が立っていた。

ああ、あの人は。

一番会いたかった、人。

「けれど……奴隷商の様な所行もさることながら、ヤエ様を誘拐した挙げ句に売ろうとまで……！」

「ダメだ、陛下にご報告しなきゃいけないよ。それに、今許可を出せば君は全員を殺しかねない」

穏やかにやんわりと断るルカに、アンナはただ無言で承知する。

それを見てルカは頷き「エドガー！」と叫んだ。

その後は、段取りの良い劇を見ている様だった。

部屋の中に次々と入って来た黒い鎧を来た人々が、剣を構えシンの仲間を包囲した。

抵抗しようとした者もいたが、鎧の人物の威圧感に気圧されがっくりと膝をつく。

見る見る内に、奴隷商人達は鎧の人々に拘束され、シンも今だ殺気立つアンナにつれられて行った。

その状況に、ヤエはただ呆然としてしまう。

「ヤエ！」

開いた檻に、ルカが飛び込んで来る。

走って来た訳でも無いのに、何故か彼の息は荒い。

「ルカ……さん？」

「……ヤエ……っ！」

彼の泣きそうな顔が近づく。

答えようとするとするよりも早く、ルカに強く抱きしめられた。

暖かい彼の身体が、少しだけ震えている。

まるで小さい子供の様に。

「……よかった、ヤエ……！」

「ルカさん……」

「……ごめんね……今は、伯爵として他にもやらなきゃいけない事とか、言わなくちゃいけない事とか、あるのに」

途切れ途切れに、震えた彼の声が耳元で囁かれる。

今にも泣き出してしまいそうな、そんな声で。

「……ヤエの事、しか、頭がないんだ……本当に、無事でよかった……！」

更に強く抱きしめられる。

自分の為に、わざわざ鎧の人々を呼んでくれた。

自分の為に、無駄にはいけない時間を割いてくれた。

全部、私の為に。

「……ごめんなさい……！」

ぼろぼろと、涙が零れ落ちる。

止まらない、もはやもう止める気も起きない。

思い切り泣きたかった、我慢していたものがふつと切れていく。

申し訳なさと嬉しさで、頭がごちゃごちゃと混濁する。

「ごめんなさい、もう一度言っと「ダメだよ」と嗜められる。

「謝るのは僕の方だよ、君が謝っちゃダメだ」

「でも」

「いいから」

頭をぽんぽんと撫でられ、「ね？」と念押しされる。

こつなってしまうと、逆らう事もできない。

「お帰り、ヤエ」

彼女の存在を確かめる様に、何度も何度もル力は強く抱きしめていた。

23 おかえり（後書き）

一区切りールカも出せました。

奴隷商編（？）終了です、疲れた・・

次の次くらいから新章なるものを始めようかと^^

## 24 心配したんだぞ

シン達奴隷商に誘拐された日から、一週間が経った。

ルカ達に助けられたヤエは、屋敷に帰るなり高熱を出して倒れてしまった。

元々身体が頑丈な方でもなく、安心したからなのか完全に緊張の糸が切れ、寝込んだ。

アンリに診てもらおう、と慌てるルカが何とも新鮮な気がしてしまふ。

ただの熱だから大丈夫、と断ってみたがルカに断固としてそれを拒否された。

それでもまだ迷っていたら、アンリの方から勝手にやって来てしまったのだ。

「後は熱が下がるのを待つただけだな」

聴診を終え、後片付けをしながらアンリが呟いた。

いつもよりも温厚な声音なので、少しむず痒い気もする。

「はい……」

「しっかし軟弱だなお前は、八度ちょっと越えただけで」

「ふ、普通です！」

「そうかあ？」

本気で不思議そうに首を傾げるアンリ。

ず、ずれてるなあこの人は。

呆れていると、扉からノックをする音が聞こえた。

「アンリ、もう入って大丈夫かな」

「おう、入れ入れ」

開けたドアからひよっこり顔を出し、心配そうにルカがこちらを見つめる。

いつもより、少しだけ顔色が悪い気がする。

「具合はどう？ヤエ」

「は、はい……大丈夫です。少し熱っぽいだけで」

「そっか……よかった」

ほっと安堵の溜息を漏らし、ルカはベッドの方へ歩み寄って来た。ゆっくりベッドに腰掛け、申し訳なさそうに苦笑する。

「今回は、大変だったね」

「あ、はい……」

「奴隷商達は、あそこに居た全員王宮騎士団に渡したよ。と、言ってもたまたまいない人間もいるだろうから……完全に、とは言えないんだけどね」

あの鎧の人々は、王宮騎士団の人達だったのか。

ほっとしたのもつかの間、脳裏に苦しんだ表情のユツカが再生された。

そうだ、あの後、ユツカはどうなったのだろうか。

「ルカさん……！ユ、ユツカは……他の人達は怎么样了んですか……！」

「ユツカ？……ああ、一緒の檻にいた子だね。大丈夫だよ、あの子も捕らえられた人達もみんな保護した。怪我や病気にかかっている人は、アンリの知り合いの病院に搬送したよ」

「俺もかり出されて、大変だったんだぞ」

茶々をいれてくるアンリの言葉さえも、安心を覚える。

いつ誘拐されたかも分からない捕われた人々は、きつと栄養失調

になっっているに違いない。

それだけじゃない、風邪を引いてしまったり、怪我だって酷くなっているかもしれない。

でも、ルカさん達に任せればもう安心だ。

「よかった……皆無事なんですね……よかった……」

「うん」

「……ふむ」

突然、アンリがこほんと咳払いをした。

そして頭を掻き、「先に謝っておくぞ」と素っ気なく……

ヤエの頭にげんこつを落とした。

「痛っ！」

「ア、アンリ！！何やってるんだ！」

一気にルカの顔が青ざめ、殴ったアンリをはたこうとする。

しかし容易くそれを躲し、痛がるヤエの身体を自分の方へ向けさせた。

「ヤエ」

「……っ」

「ヤエ、何で殴られたかわかるか」

「……え、っと……」

「お前がな、心配かけすぎたからだ。特にルカに」

頭の痛みを抑えながら、その言葉をゆっくりと飲み込む。

そっだ、私はルカさん達に迷惑をかけてしまった。

「お前のこの国での立ち位置、誘拐されてわかっただろ？お前は、誘拐されなきゃ『わからなかった』んだ」

「わ、わかってました……！」

「じゃあ、どうして一人になった。誘拐される直前に、何でお前だけ残った」

はつと息を飲む。

ジュースを買って来るねといったミーシャ、それを手を振って残った自分。

別れてからすぐ、奴隷商に攫われた。

つまり、1人の時を狙われていたという事になる。

「髪と目を隠してたのに、移民と勘違いされて誘拐されたんだ。

つまりは、お前、前からマークされてたかもしれないんだぞ」

「……でも……」

「情報屋に迷惑かけてしまうかも、つてか？」

読まれた。

黙って俯いていると、アンリの非常な視線が真っ直ぐヤエを貫いた。

「それはお前の自己満足だ。お前が勝手に巻き込まなかったからよかった、なんて阿呆な事考えているだけで、御偉い事なんかじゃない。実際、あの情報屋は泣いて俺の所までやってきたんだぞ。俺の事、心底嫌いらしい癖に」

ずきつと胸が痛んだ。

元気で明るいミーシャを泣かせてしまった罪悪感が、今になって襲って来る。

「家から出るな、とは言わん。だがな、心配かけさせたくなかったら一人で勝手な行動と考えるな。使える奴はとことん使え。周りに使える奴は、沢山いるんだ」

声音が急に優しくなり、叩いた頭をアンリはそつと撫でた。

小さい声で謝ると、「心配したんだぞ」と呟かれる。

ごめんなさい、申し訳ないと思っているのに。

こんなに怒られる事が、嬉しいと思ってしまう。

「……アンリも、心配性って事だね」

呆れていたが、どことなく安心したルカの顔が横からひよこつと現れる。

微笑みながらアンリの頭にお返しの如くげんこつを喰らわせ、

「早く治して、元気になったら一緒に買い物でも行こうね」

頬が熱くなって、慌てて下を向いてしまった。

24 心配したんだぞ（後書き）

ほぼ今回はアンリメイン。

ルカはいるのに、空気な感じが否めません^^

「ヤ・エ・様！今日は、おめかし日和ですわ」  
朝目覚めると、アンナの嬉しそうな笑顔がヤエを迎えた。

風邪が完治してから早三日。

ヤエは、朝からアンナの着せ替え人形の様になっていた。  
パステル色のワンピース、ピンクのミユール、ネックレスはいか  
がなさいましょう……

こんなに生き生きしたアンナを、ヤエは初めて見る。  
と、いうのもこれらの原因は寝込んでいた時に言われた『一緒に  
買い物にいこう』発言にあった。

「楽しみですわね、ヤエ様！今日はとてもいいお天気ですし」  
「アンナさん、ほ、本当にいいんでしょうか」  
いつもより少し派手目なワンピースを着せられたまま、ヤエがも  
じもじと問う。

「恥ずかしそうなのは服の派手さの所為だけでは、決して無い。  
「何故です？悪い訳がありませんわ」  
「で、でも……ルカさんと買い物なんて……しかもふ、二人で」  
「嫌でしたか？」

声のトーンを落としてしょんぼりしているが、アンナの顔はにや  
にやとにやけている。

「そ、そんな事は！」

「でしたら、何も心配ないですわ。我ら護衛も付きたかったのですが、やはり邪魔者でございます故」

少しも残念そうな様子ではなかったが、アンナのペースに巻き込まれてしまって何も言えない。

楽しそうに服を見比べながら、自分の事ではないのに鼻歌まで口ずさんでいる。

それはそれで……何だか申し訳なってきたらう。

「何で私なんかと……ルカさんは、恋人とかいるんじゃない？」

「ルカ様に恋人？おりませんよ」

「えっ！」

心底驚いた顔を見ると、アンナも不思議そうに目をぱちぱちを瞬かせる。

そしてふつと吹き出す。

「そこまで驚かれなくても」

「だ、だって……ルカさん、素敵な人なのに」

自分で言っただけで恥ずかしくなってきた。

あんな素敵な人、見た事が無い。

そんなルカさんに恋人がいない筈が無い。

「確かに、ルカ様は眉目秀麗、頭脳明晰、おまけに伯爵という地位までございますから、それはそれは世の貴婦人方は目を光らせていますわ。ルカ様へ勝手によつてくるのですから、よりとりみどりでございますよう」

「よ、よりとり……」

「我が主人への愛故、多少の過剰表現は流してくださいまし」

スカートの両端をつとつまみ、舞台の女優の様にお辞儀をするアンナ。

「けれど、博愛精神と申しますか……平等に人を愛するのです。

ルカ様は、身分、国籍、性別、貧富その他諸々……その様な物には

興味はありませんの」

漫画や小説みたいな、それでいて思った通りの人。すごいと思う反面、少し気分が沈む。

それって、つまりは誰にでも優しい、という事でしょう？

「けれど！ヤエ様にだけは特別ですわ！」

「え？」

数十枚目の服をヤエに着させ、今度は髪を梳かしにかかる。

それもあつてか、アンナは満足そうに話を続けた。

「ヤエ様が屋敷に来てから、ルカ様はとても楽しそうなんです  
から」

「そんな事……、私よりもアンナさんやミーシャさんみたいに綺麗な人が沢山いるじゃないですか……特別ななんて」

そんな期待してしまいそうな事、ある訳が無い。

ルカが、自分に『そういう感情』を持っていてるなんて、おこがましいにも程が有る。

そう、あつてはいけないんだ。

私なんか。

「アンナ！アンナ！もう着替えは終わりましたか！」

「……邪魔虫が来ましたわ」

突然荒くガイルが扉を叩いた。

いつもの様に急かしているのだろうか……何だか様子が違う気がする。

「何ですか、ガイル様。婦女子の着替えを待つなんて……」

「今はお前と遊ぶ暇などない、終わったかどうかを聞いている」

アンナが答える前に、ガイルの無機質な声が返って来る。

いつもと違うのにアンナも気付いたのか、悔しそうに「終わります」

したわ」と答えた。

「では、入りますよ。……御待たせ致して申し訳ございません、殿下」

扉がゆっくりと開かれる。

ヤエはただ不思議がっていただけだったが、アンナは『殿下』と言言葉に敏感に反応する。

まさか、と声は出さずに表情が訴える。

開かれた扉から、最初に出て来たのはガイルではなかった。

黒いローブを頭から被り、顔を隠している恐らく大きな男。

少し顔を動かし、部屋の中を何かを探すかの様に眺めている。

そして目の前にいるヤエを、じっと見た。

「やっと見つけたぞ、女」

「……あ、あなたは……！あの時の……！」  
身体が強張る。

全て言う前に、男は被っていたローブを荒く脱ぎ捨てた。

一番最初に見えたのは……そう、あの紅い双眸。

そして、その上に見えるのは……ヤエと同じ黒い髪。

移民の証である、黒い髪。

「ヤエ、殿下の前で失礼です。頭を下げなさい」

「でん、か……？」

訳が分からず、男の方をまじまじと見つめる。

肌が白くて鼻が高い。

目鼻立ちは整っているが、がっしりとした骨格がルカとの最大の  
違いだろう。

射殺す事もできそうな、彼の眼力は相も変わらずヤエを見下ろしている。

「余は第一族国、クラレンス・グレヴィレア国王が第二子、ウォーレス・グレヴィレアだ。移民の娘よ、お前を我が命により王宮へ連行する」

声を出す間も無く、男の後ろから出て来た鎧の騎士達がヤエの周りを取り囲んだ。

25 特別（後書き）

少し（結構？）間があいてしまいました！すみません！<  
そして、やっと出せた！メインその2！笑  
ヤエの巻き込まれ率が、半端じゃないです・・

「お、御待ちください殿下！」

最後に部屋に入って来たのはルカだった。

焦りの表情が見えたが、この状態を予想していたのだろうか、苦い表情に変わる。

怯えるヤエを視界から外さず、ウォーレスの元へ歩み寄った。

「貴様は、この家の当主か」

「はい、ルカ・アルケミラと申します。彼女の事で、お話が」

「余は貴様と話す事は無い、早急に王宮へ帰らねばなら無いからな」

ウォーレスはルカに一瞥だけ向け、無愛想に横を通り過ぎる。

鎧の騎士達は何も言わず後に続き、黙り込むヤエを連れて行こうと腕を引っ張った。

「殿下！その娘は私の……！！」

「アルケミラ、これは純血の移民ではないのか」

背を向けたまま、低く冷たいウォーレスの声が部屋に響き渡る。

顔は見えないが、刺す様な威圧感を感じる。

数秒黙ったが「……違います」とルカは頭を振った。

「ではこの髪と目が黒い理由を、貴様には説明できるのか」

「それは……彼女は遠い異国からやって来て……！」

「それが本当だと言う根拠は？」

思わず声が詰まる。

もし、彼女が嘘をついていたとしたら。  
ニホンという国にいた事すら、嘘であつたら。  
記憶が無いという事自体、全て嘘であつたら。  
そんな事、ある訳無い。  
けれどそれを決定づけるには、証拠も何もなかった。  
ヤエを信じている、たったそれだけしか無い。

「純血の移民の不法侵入……我々第一族国が移民と相對している事を忘れたのか」

「い、いえ……」

「それを匿い、疑いもせず我が国の情報を与えるなど……それ相応の罰を受けると思え」  
罰。

そんな事、構わない。

彼女を家に置いた事、彼女を助けた事、彼女にこの国の事を教えた事。

それを後悔した事なんて、一度も無い。

彼女がいつもこんな扱いを受ける事の方が、それを守れない事の方が、悔やんでも悔やみきれない。

「……私はどんな罰も受ける覚悟はできています。殿下や国王陛下に対する反逆行為と見なされても、仕方が無いかもしれません。けれど、どうか彼女だけは……」

唇を噛み、頭を下げる。

純血の移民。

頭の固い王宮の人間は、呪われた物の様に忌み嫌う。

彼女がどんなに不当な扱いを受けたとしても、それを当然で有る

かのように傍観するだろう。

僕はそれを分かって、彼女を送り出す事なんて……  
絶対にできない。

「……後に、使者が報告しに参るだろう。それまでこの家から出る事を禁じる」

ウォーレスはそう呟き、部屋から姿を消した。

頭を下げたままのルカを他所に、鎧の騎士達も部屋から出て行く。最後に出て行った騎士の隣に、ヤエを引き連れながら。顔を上げなくても、彼女の表情がわかる様な気がした。

泣きそうに顔を歪め、不安そうに眉を潜め、きつと軽蔑の眼差しでこちらを見ているだろう。

「……ルカさん」

か細い彼女の声に、ルカは歯を強く噛み締めた。

26 無力（後書き）

今回は短め。

ルカの心情をいれてみましたが……ウォーレス悪役みたいになってきた

グレヴィレア城のとある一室。

窓から降り注ぐ暖かい陽光を背中に受け、大量の書物を睨みつける男がいた。

金色の柔らかいくせ毛が陽光できらきらと光り、女性に見間違っ程美しい顔立ちをしている。

しかし、陽光のお陰で彼の瞼はうとうとと重くなっている。

眠そうなその顔も、一層美しい。

「殿下、アナベル殿下！起きなさい！」

後もう少しで眠りの世界へ行く所だった男、アナベルを呼び起こしたのは、白い鎧を纏った女だった。

赤茶のこざつぱりとしたショートヘアと頑強な鎧の所為で、お世辞にも女性らしいとはいえないけれど。

「ああ……ゲルダですか、どうしたんです今日は訓練では？」

「終わったわよとつくにね、ちゃんと仕事してるかと思ってみて来てみれば……ちゃんと仕事しろ！」

「そうですか、おつかれさまです」

柔らかく微笑み、アナベルは眠気眼で鎧の女、ゲルダを見上げる。潤んだ瞳のその顔に、普通の女性ならばときめいてしまうだろうが、ゲルダだけは違った。

机を勢い良く叩き、アナベルをきつと睨みつける。

「いいから仕事！ほら、今日は忙しいんですよ！」

「わかってますよお」

口を尖らせ、可愛く頬を膨らませてみたが、ゲルダにまたキツク

睨まれた。

大人しく書類に目を通して、「よろしい」と誉められる。しかし、ものの数分で彼の集中力は見事に切れてしまった。

「……ゲルダ、貴女、やっぱり髪を切ってしまったんですね」

「……またその話い？もう昨日からずっとじゃない」

呆れた様にゲルダは髪をがしがしと掻く。

「もったいない、どうして事前に私に言ってくれなかったんです」「事前に言っただってアタシは切ってたわよ、実施訓練の時邪魔だしね」

「でもそんなに短く……」

しよぼくれた様子でいじいじと、書類にのの字を書くアナベル。

まったく、一国の王子ともあるう人が、アタシの髪如きでこんなイジイジしてるなんてね。

思わず苦笑し、ゲルダはふつと溜息を漏らした。

「いいのアタシは。王宮のお姫様達みたいな綺麗な髪が似合う訳でもないし、髪洗う時楽だし。ほら、長いと引っかかっちゃったりしたら仕事に障害でるし……」

「それでも！」

アナベルが声を荒げて立ち上がる。

温厚な彼には珍しく、少し興奮気味だ。

「な、なによアナベル」

「乳母子の貴女は私達の家族当然で、地位など気にする必要なんてないんです。なのに騎士団に入ったり、綺麗な髪を切ったり……貴女はいつもそうです。自分は女性らしくないとばかり言って無茶をする」

「地位なんて関係ないよ、アタシは純粹に騎士団に入りたかっただけだし……無茶なんて」

「第二族国との合同訓練の時！私がアレを心配してないと思っ  
ていたんですか！」

顔を真っ赤にしたアナベルの迫力に圧されてしまう。  
いつも温厚なのに、変な所で心配性よね。

「……………ん、わかったごめんねアナベル」

「ゲルダ」

「あの時みたいに無理しない、まあ力もあんまり無いしね……………」

「そ、そんな事を言いたいのではなくて」

「ああ、でもこの髪は勘弁ね。貴方が気に入らなくても、このま  
までいるつもりなんだから」

にこつと柔らかく微笑まれ、アナベルはほつとした様に肩を竦め  
る。

そして静かな動作で、彼女の頭に顔を寄せた。

「ゲルダが良いなら、私ももう何も言いませんよ」

髪に口付けを落とし、嬉しそうに微笑した。

「……………アナベルは、本当にタラシよね」

「えっ、どうしてです」

「それ、いろんな娘にやってるんでしょ。まったく無自覚なのか  
しら……………」

呆れながら、アナベルから離れていくゲルダ。

それを何の事だか分からないと言った様子で見つめるアナベル。

な、何か不味かったんでしょうか……………」

「あら？あれ、貴方の大事なウオーレスじゃない？」

「えっ！ウオーレスですか！？」

窓を見つめるゲルダの隣に急いで向い、アナベルは窓に張り付いて下を眺める。

見えるのはローブを来て、後ろに数名の騎士達を従えているウォーレスだ。

その隣には……小さい子供？

「ここまでで良い、お前達は持ち場へ戻れ。部屋の外の護衛は一人だけで良い」

城へと連行されたヤエは、長い廊下を抜け、ある部屋の前にいた。何も喋るな、と脅されている為にヤエはただただ俯いている。

一人の鎧の騎士を残して、他の騎士がいなくなると、ウォーレスはヤエの腕を強く引つ張った。

「入れ」

部屋に投げ込まれる様に入れられ、ヤエはバランスを崩しベッドに倒れ込んだ。

思わず呻くと、ウォーレスは扉の鍵をかちりと閉める。

……不味い様な気がする。

唇を噛み締め、ヤエは青ざめた顔で様子を伺う。

俯き黙ったままのウォーレスは、こちらへ大股で歩み寄った。

そして目つきの悪い表情でこちらを睨み付け……

「……もう敬語をやめてもいいか？というか、もう限界だ」

.....  
え？

27 城（後書き）

今回は新しいキャラから始まります^^  
そしてウォーレスのキャラが微妙に安定しません

「いいか、なんつつつても、まあ勝手にこの口調はやめるからな。お前に許可を貰う気はねえし」

……この碎けた感じ。街中で会った、あの不気味な雰囲気を放った人間とは到底思えない。

この人、さつきまではすごく『王子』みたいだったのに。

「あー、疲れた。何で俺が、城下の人間にこんなに神経つかわねえといけねえんだよ」

眉を潜め、ベッドの側のソファにどかっと座り込むウォーレス。ふわつと欠伸をし、「大体よお」と怠そうに続ける。

「お前あの時名前言わねえからよ、こっちは面倒くさい体面つけて探したんだぞ？まさか貴族の家に居たとは思わなかったがな」

「え……あの……」

「お前のお陰でしばらく城下へ抜け出せなくなった、どうしてくれんだよまったく」

それは、勝手に抜け出したあなたが悪いのでは。

そう言いたい気持ちを抑え、ベッドから下り退屈そうなウォーレスの元へ一歩歩み寄る。

「あの……で、殿下は……いつもそういう話方なんですか……？」

「あ？そうだけど」

「さつきまでのはどうして……」

「頭のかてえジジイ共がうるせえんだよ、国民への体面がどうたらうてな」

長い脚を組み、忌ま忌ましそうに舌打ちをする。

本当に王子なのだろうか、自分のイメージしている王子とはまるで違う。

今の口調の方が親近感を持てるかもしれないが、正直ガラが悪くて仲良くなれそうにもない。

「お前を呼ぶのもかなり大変だったんだぞ、あのジジイ共、俺を罵るチャンスとか思ってたんだろうよ」

「……それ程、私の罪は重いつて事ですか……」

「だから、それは体面だつつつてんだろ」

わかんねえ女だな、とまた舌打ちされる。

この人の癖なのだろうか。

眉間の皺も、一向に取れていない。

「じゃあどうして……?」

「……何でもいいだろ」

ウォーレスの声が少しだけ小さくなる。

聞こえた様な気がしたただけかもしれないが、どこか言いたくない様な声色だ。

しばらく口を閉ざし、思いついたかの様に溜息をする。

大切な事なのに、聞くに聞けなくてまごついていると、先にウォーレスの方が口を開いた。

「というか、お前に聞きたい事がある」

「聞きたい事?」

「ハイネ、って男を知ってるか」

ハイネ。

ヤエの頭の中で、浮かび上がるウォーレス以上に無愛想な男。

奴隷商に捕まった時、唯一自分に敵意を向けなかった男。

何故今、その人の名前がでてくるのだろうか。  
そもそも、彼は騎士団に捕まった筈だ。  
あの忌ま忌ましい、シンと言う男と一緒に。

「知ってます…… 奴隷商に捕まった時、会いました……」

「そうか、じゃあそいつは今どこにいる？」

「……？ 捕まえたんじゃないんですか？」

そう言うのと、ウォーレスの表情が曇り始め、言いたくなさそうにもごもごと口を動かした

「いや、そいつだけは捕まえていない。騎士団が突入した時、ハインはいなかった」

いなかった。

と、いうと彼は逃げ出したというのか。

そういえば、あの日は殺されたアリーシャと一緒にいなかった。  
護衛という仕事に誇りを持っている訳でもなさそうだったが、  
すぐに辞めそうな軟弱な精神を持っている人物とはあまり思えない。  
い。

という事は、奴隷商の善し悪しに関わらず、騎士団が来る前に逃げ出した事になる。

彼は、騎士団が来る事を『わかっていた』。

「…… まあいい、お前の仲間って訳でもなさそうだし」

「あの…… ハイネ、さんを…… どうして殿下は知っているんですか？」

「それは、あいつが……」

何かを言おうとした時、ウォーレスの動きがぴたりと止まる。  
見る見るうちに青ざめ、ソファから勢い良く立ち上がる。

「ど、どうしたんですか……？」

「可愛いウォレス、どうして私に何も言ってくれないんだい？  
こんな愛らしい恋人なんてつれて来て」

いつの間にかヤエの背後にいた金髪の男が、彼女の肩に手を置いた。

28 ウォーレス（後書き）

ウォーレスの本性回です^^

少し短めですが、ラストの人物含めちゃうとぐだぐだになるんで・

29 兄弟(前書き)

少し長めです。

「こんにちは、お嬢さん。ウォーレスの話相手になってくれてありがとうございますね」

いきなり誰かに話しかけられるのは、この国に来てから結構慣れていたつもりだった。

だが、自分に突然触れて来た人物がするりと慣れた手付きで肩から手の先まで触れていくのには、さすがに悲鳴を上げずにはいられない。

「ひゃ……！」

「とても綺麗な肌をしていますね、まるで陶器の様です」

くせ毛の金の髪に、人形の様に美しく整った顔立ち、宝石に似た碧眼。

王子様、という名前が具現化した様な、少なくともウォーレスよりは遥かに王子らしい男。

こんな綺麗な人に誉められると、逆にいたたまれなくなってしま

う。

貴方の方が、何十倍も綺麗ですよ。

「初めましてお嬢さん、クラレンス・グレヴィレアが第一子、アナベル・グレヴィレアです。以後よろしくお願いします」

そう言って、ヤエの手をそっと持ち、唇を落とす。

「えっ、あっ、こ、こちらこそ……！」

思わぬ挨拶に、一瞬で顔が真っ赤になる。

くすぐったい感触が指から消え、代わりに熱を帯びる。

きつとこういうのは王族の人達にとっては普通……普通なんだよね。

そう言い聞かせないと、きつと何も喋れなくなってしまつう。

「……第一子？」

「はい、そこに居る可愛い弟ウォーレスの兄です」

「こ、んのクソ兄貴！その可愛いって言うのやめろ！気色がわりい！」

にこやかに微笑むアナベルを、ウォーレスが荒々しく押しつける。おやおや何ですか、と言いつつもアナベルは何処か嬉しそうである。

それに再び怒るウォーレス、それを見てにこにことするアナベル。同じやり取りが繰り返す中、ヤエはウォーレスとアナベルが兄弟という事実にも、ただただ啞然としていた。

何て似てない兄弟、顔だけじゃなく性格も。

アナベルの方がずっと王子らしい。

「おい、お前。名前は」

「ヤ、ヤエ……です」

「じゃあヤエ。お前、今俺が王子らしくないとか思ってたんだろ」

「え、そ、そんな事は……ないですよ」

「嘘付け！俺の目を見て言え！」

苛つきの矛先がこちらに向う。

兄を無視し、ヤエの目の前までずんずんと大股で歩み寄り、ウォーレスは彼女の顔をぐいっと掴んだ。

まあつまりは、ウォーレスの顔にかなり近づいてしまった訳で。嫌でも彼の目が、見えてしまう距離まで、近づいている訳で。

「もう一回言ってみろ、言えねえだろ」

「や……あの、で、殿下……か、顔が……」

精一杯の抵抗として、彼の厚い胸板を必死に押しつけようとする。けれどもウォーレスはわかっていないのか、眉根を一層深める。

「あ？何だよ」

「ウォーレス、君が恋人に甘い口付けをしたい気もわかります。けれど、少し乱暴すぎますよ」

子供を叱る様に、アナベルがウォーレスの頭を叩く。

叩かれた当人は、一瞬ぼかんとした顔をしたかと思うと、見る見るうちにかーっと顔が赤くなっていく。

そんなウォーレスを見るとこちらも赤みが伝染してしまいそうである。

「く、口付けなんかするか！第一、恋人でも何でもねえのに！」  
真っ赤になった顔で、ウォーレスは声を張り上げた。

今頃やってきた恥ずかしさを、誤摩化そうと必死である。

「まったく、変な所で照れ屋なんですからウォーレスは。このままではウォーレスは茹で蛸になってしまいますので、本題に戻すとうしまししょう」

苦笑しつつ、ぱんと手を打つアナベル。

ヤエの方を見つめ、「ウォーレスがわざわざ呼んだ子は、貴女で間違いなさそうですね」と言う。

少し落ち着いてから、ヤエもゆっくりと頷くと、満足そうにアナベルは微笑んだ。

「では、恋人とまではいかなくても、どうかウォーレスの友人になつてあげてください。癖がありますが、良い子なんですよ」

「え、あの……アナベル殿下……！殿下は、私を呼んだ理由をご存知なんですか……？」

教えてくれない理由。

知りたくて仕方なかったが、ウォーレスはきつとまた黙り込んでしまっただろう。

アナベルが知っているならば、優しそうな彼に聞いた方が教えてもらっ可能性だって……

「残念ですが、私もわからないんです」

「……そう、ですか」

「ですが、貴女を返せない事態だと言うのはわかっていますよ」

「返せない？」

「ええ、問題が二つも」

二本指を立てて、苦い顔をするアナベルは、ウォーレスを一瞥する。

「一つは、今城下で殺人鬼が横行している事。しかも、貴族だけを狙っています」

「殺人鬼……？」

「今、城下へ帰れば貴女は真つ先に狙われるかもしれません、被害者は今の所婦女子ばかりなんです。それに……」

指を立てた手をヤエの頭の上にそつと乗せ、あやす様にぽんぽんと撫でる。

「貴女は、城下で大変な思いをしたでしょう。いわれの無い疑いをかけられた所為で」

「……殿下も、ご存知だったのですね」

黒髪黒目、それらが移民の証であると言うだけで、人以下の扱いを受ける。

移民なんて、快樂殺人者から見れば、恰好の餌になってしまっ事ぐらいわかっていた。

殺したつて、誰からも悲しまれることの無い、殺される為の存在。そう思われても仕方がない存在なのだ。

そんな現実が、嫌で嫌で仕方が無いのに、何も出来ない。

「そしてもう一つ」  
俯いたヤエに、優しい言葉をかけ、アナベルは薄く微笑む。  
もう一つ……ごくりと喉を鳴らし、アナベルを見返した。  
何か重要な事でもあるのだろうか。

しかし、待っていたのは可愛らしく首を傾げたアナベルの笑顔。

「やっぱり秘密です」

29 兄弟（後書き）

兄弟そろって変な回です

ああまた登場人物が増えそつな予感が・

30 わがままです(前書き)

ちよつと遅めです

王宮へ連行され、早い物でもう十日が経ってしまった。

王宮でのヤエは、ウォーレスの侍従を命じられた。

メイドや執事の様に身の回りの世話はしないが、常に彼と行動を共にする。

ウォーレスが来いといったら、行く。ただそれだけだった。

いつでもウォーレスの所へ行ける様に、ヤエの部屋は彼の部屋のすぐ近くにされた。

本来なら王族の居る東館には専属の侍従といえど、入ってはいけ無いらしい。

なのに如何して自分がこんな居れるのか、不思議で仕様が無かった。

「ヤエ、茶」

「は、はい……」

ウォーレスの部屋で、ヤエはさっそくウォーレスにこき使われていた。

今はどうと、新聞を睨む様に読んでいるウォーレスの隣で、白いティーポットを不慣れな手付きで触っている。

お、お茶って普通にいれればいいのかな。

でも、王子様に飲ませられる程のお茶ってどうすればいいの？

大体、お茶っぱは沢山ありすぎてどれを入れたらいいのか……

「おい、おせえよ」

イライラした声で、新聞をぐしゃりと潰すウォーレス。

どこの父親ですか、とは言わないのが身の為である。

「す、すみません……でも、どの私お茶っばがいいのかもわからなくて……」

「そんなの適当でいいんだよ、適当で」

「殿下に適当なお茶なんていれられませんよ……」

はあっと溜息を吐き、もう一度茶葉の入った様々な缶を睨みつける。

ダージリン、アッサム、ニルギリ、アールグレイ、カラメル、フランボワーズ……その他沢山。

……ぶ、無難にアールグレイとか……？

美味しい入れ方とかあるのかな……

「茶あいたら、その片しとけ」

「は……？そのつて……」

ウォーレスが顎でどこかを指す。

つられてその場所を見ると、大量の書物が積み重ねられていた。紅い革の表紙が、いかにも高級そうである。

「で、殿下？この本の山は……」

「ジェラム・ネメシアの航海記だ、全百六十冊ある。読むか」

「ひやくつ……！？え、遠慮しておきます」

冊数を聞いて、更に本の山が高く見えて来てしまう。

これを一巻からそろえなきゃいけないのか……。

どれくらい時間がかかるだろうかと、小さく溜息を漏らした。

「全部そろえたら、新しい新聞を取ってこい。それから、庭に居る騎士を適当に一人見繕ってこい。昼までにな」

「……え、あの……まだ紅茶入れてもないんですけど……」

部屋にあるアンティークの時計をちらりと横目で見る。

只今、十一時。どうやっても間に合わない。

「だから急げっての。あ、後クソ兄貴に会ってもサボってる事は言うなよ」

「はあ……」

生返事を返し、紅茶を入れ終える。

そそくさと本の山へ向い、早速一巻を探してみる。

が、都合良く見つかる筈もない。

それどころか。

「うわっ、不味いぞこの茶」

……内心、いらつときてしまった。

「何だこれ、嘗て無く不味い。苦えし、泥みたいだ」

「ど、どろ！？そこまで言う事ないじゃないですか！」

苦そうな顔をし、べえつとウォーレスが舌を出す。

適当で良いって言ったのは貴方じゃない……！

「へったくそ、いくらやった事ねえからって言ったって限度があるぞ」

「殿下は、上手なメイドさん達に作ってもらったから……！素人の私が殿下の好むお茶を作れる筈ありません……！」

「別に上手くても好きな茶なんてねえよ、ただお前のが不味いっただけで」

ぷいっとなつぽを向き、空になったカップをやエに手渡す。

そんなに不味かったら飲み干さなくても良かったのに。

「……次からはもつと美味しくいれる様にします」

しぶしぶ呟き、本の整理に再び取りかかる。

一巻から十巻までは見つかった、次は二十巻まで……

十二巻を探そうと辺りを見渡すと、いつの間にか隣にウォーレス

がしやがみ込んでいた。

「遅い」

「殿下……」

「早くしろよな、新聞読んでえんだからよ。身体も鈍ってきてるし、稽古してえんだ」

イライラしたウォーレスの顔。

……本当にこの人は。

「……殿下、わがまま言わないでください。私、まだ十二巻までしかそろえてません」

「ちゃっちゃとやれよ、文句言つな馬鹿」

「ばっ……！」

さすがに苛立ちが頂点に達する。

もの凄い勢いでウォーレスの方へ顔を向け、声を荒げた。

「殿下！我慢って物を覚えてください！私は、器用じゃないんですから、すぐになんてできません！」

「あ？何だよヤエ、言う様になつたじゃねえか」

「大体殿下幾つですか、私よりも大人なのに……！」  
「十九だ」

熱気の籠った雰囲気、一気に冷める。

目をぱちぱちと瞬かせ、「え」とだけ言葉を発した。

「何驚いてんだよ」

「だ、だつて……私と一個違いなんて……」

「老け顔って言いたいのか？ああ？」

怖い顔ですごむその姿は、まさしくガラの悪いヤンキーである。でも本当に二十代だと思っていたから、仕様が無い。

「……というか、お前十八なのか」

「は、はい」

「……二ホンは、食い物が足りてねえんだな」  
そう言ったウォーレスの視線は、自然にヤエの胸へと向っていた。  
本気で同情する彼の顔が、心底憎たらしい。

「……ああ、疲れた」

夜中の何時頃になっただろうか、一日の責務を終えて、ヤエは部屋のベッドへダイブした。

かなり疲れた、特別重労働はしていないのに、疲れた。

九割、ウォーレスの扱いに困っていたからだというのは、きっと嘘ではない。

「……ルカさん、元気、かな」

ぼつりと暗闇で呟いてみる。

声に出した名前の人物は、今どうしているだろうか。

何も話す事も無く、アルケミラの家を出て行ってしまった。

抗えない事だとしても、何も話せなかった。

ルカは、面倒な女だと、思っているだろうか。

「……やだな、ルカさんの事ばかり」

目を閉じて、じっと考える。

ルカの表情、声……思い出そうとすると沢山思い出せる。

そして、思い出す度に、彼の事を恋しいと思ってしまう。

会いたいと、思ってしまう。

「……本当、嫌だな」

会いたい、けれど今会う事はできない。

会いたいのにな、会いたくない。

会えば、思い知らされてしまう。  
罪悪感を。

30 わがままです(後書き)

ウォーレス、我が儘キャラになりました  
やばいこのままだとまたぐだぐだになりそうだ・・・！

31 書庫にて(前書き)

ちよつと長めです^^^

ヤエ

「……………かさん」

自分の掠れた声で、目を覚ます。

明るい陽光に染まる天井が、目の中へ飛び込んで来る。

ぼーっと天井を見つめた後、ゆっくりとベッドから起きた。

目をこすり、まだ夢から覚めない思考を、何とか現実に取り戻そうとする。

「……………泣いてる」

目尻と頬の辺りが冷たくなっている事に気づき、重い動作でそれを拭う。

涙は今さっきまで流れていたのか、まだ乾いていない。

眠りながら泣いていたのか、どんな夢を見ていたのかも覚えていないのに。

ただルカの声が聞こえた、それだけなのに。

「……………って……………あれ、今、なん……………じ？」

枕元にあるアンティーク時計を引き寄せた。

針が指すのは……………十二時？

「おっせえぞー！！まだ寝てんのかヤエ！」

朝からさっそく不機嫌なウォーレスが、部屋の扉を蹴破った。

ヤエが悲鳴を上げたのは、言うまでもない。

殿下……」

「……確かに、寝坊した私が悪いんですけど……強引すぎますよ

「あ？俺がわざわざ起こしに来てやってんのに、何だその言い草」

「す、すみません……」

ここは王宮東館の第一書庫。

相変わらず苛つきながらソファに座る、ウォーレス。

その隣で色々な本を抱えている、ヤエ。

膨大な量の本を、何度抱えただろうか。

「今日は何でここに来たんですか？」

「本読む為に決まってるんだろ、で、お前は整理と本探し」

「はあ……」

それだったら手慣れている人達がやった方が早いのかなあ。

そう内心愚痴りながらも、指定された本を探したり移動させたりし続ける。

案外狭い部屋の中に、これだけ沢山の本があるのにも驚いたが、第一書庫というのだからきつと第二書庫もある訳で。

更に多くの本が有ると思うと、気が遠くなりそうである。

「……殿下、何をお読みになつていらっしゃるんですか？」

かれこれ一時間は経つただろうが、一段落しようとウォーレスの近くまで戻ると、彼は真剣な表情で本を眺めていた。

何時も苛つきで眉根を潜め、嫌そうな顔をする彼とは違い、本にかなり集中している様子である。

現に、話しかけても表情一つ変えず「ジェラム・ネメシアの悲劇小説だ」と答える。

「殿下は……本がお好きなんですね。昨日だってあんなに沢山……」

「あれか。あれは、もう二代目だ」

「え？二代目？」

「初版はとつくの昔にぼろぼろになったからな、新しく買ったのがあれだ」

しれつと涼しい顔で吐かれたが、ヤエは何の表情をすればいいのかまったくわからなかった。

百六十冊……あるって言わなかったっけ？

あれを全部ボロボロに？

「す、すごいです……！何度も読んだんですね……！」

「まあな、それしかやる事がなかったから」  
少し興奮した頬の高揚が、ゆるゆると引いていく。

本当にすごいと思った、自分だってあんなに沢山読んだ事は無い。でもそれは、彼が『それしかできなかった』から。

思わずちらりとウォーレスの髪を見つめる。

容易に想像できる、王族である男児の髪が忌むべき移民の証をしていれば、どうなるかだなんて。

「友人もいなかったからな、ガキの頃はここですつと籠ってたんだ。兄貴は王位継承者、俺は移民の証の出た第二子。誰も相手にする筈はねえからな」

もくもくと本を読み続け、さも平気な顔で言葉を続けるウォーレス。

まるで、他人事みたいに。

「まあ王族の嗜みって奴？はある程度は習わせられたさ、俺はか

なり嫌だったけどな。でも兄貴よりは時間はたっぷりあったから、  
ずっと本を読んでたんだ」

「……そんな」

部屋が静寂に包まれる。

ページを捲る音が、か細く響く。

「本は読んでいて楽しいぞ、俺はいろんな事を本から学んだ。小説、戯曲、航海記、まあたまには政治経済の本とかもな。飽きた事なんて、一度もない」

「……でも、寂しくは……なかつたんですか……？ご両親は……殿下の事を……」

「父……陛下は俺の事なんざ見向きもしねえよ。兄貴より使えねえからな。それに、母はもう死んだ。どこにもいねえよ」

一息ついたのか、満足げに本を閉じ、ウォーレスはソファに置いた。

ぐっと大きく伸びをし、「まあ慣れたしな」とヤエの方を向く。  
泣きそうになった彼女を目の当たりにし、慌ててウォーレスは立ち上がった。

「なっ、何泣きそうになってんだよ！」

「……すみません……」

「謝罪はいいから、り、理由を言えよ……！」

慌てふためくウォーレス、泣きそうになるヤエ。

はたから見れば、ウォーレスにいじめられている様にも見えるだろっ。

「殿下は……お強いですね……」

「っ、強い……？」

「……はい……、私は……この世界に来て……この髪と目で……」

いろんな事に、巻き込まれて……」  
ぐっと唇を噛み締める。

彼の前では、泣いてはいけ無い。

「私一人だったら、……絶対に、た、耐えきれなかったから……」  
そうだ。

私は、『そういう事』に対して強くはなかった。

誰かに嫌われ、誰かに虐げられる事。

一人で耐える事なんて、絶対にできやしなかった。

だけど、ルカさんがいた。

側にいると、約束してくれた。

けれど、この人には、誰もいなかった。

「……だからって……何でお前が泣きそうになるんだよ」

ぶっきらぼうに呟き、ウォーレスがヤエの頭を優しく叩く。

ぼんぼん、と赤子をあやす様に、優しく。

「……いいんだ、俺が悪いんだから。……お前がそんな顔する必要はねえんだ」

ウォーレスの声が、少しだけ震えていた。

31 書庫にて（後書き）

お久しぶりです……  
更新停滞の上、進展も然程してないとか・

32 まじいこ(前書き)

ちよっしめいす

「やあ、ヤエちゃんじゃないか。久しぶりだねえ」

おっとりとした聞き覚えのある声が、荷台を押すヤエを引き止めた。

振り返ると、王宮騎士団の鎧を着たエドガーがにこやかに手を振っている。

「あ、エドガーさん……！お久しぶりです……！！」

「うん、お見舞いの時は君は寝てたからねえ。買い物に行った時ぶりになるねえ」

厳めしい鎧を着ている彼は、それとは対照的に温和な声色で話す。久しぶりに会ったエドガーに、ヤエの表情は自然に綻んだ。

「でも、良かったよ。君は罰せられるとばかり思っていたから……今はどうしてるの？」

「あ、殿下の……ウォーレス殿下の侍従をしています」

「へえ、大変そうだねえ。殿下の事だから、無理難題でも言われてない？」

「……昨日の事は日常茶飯事だつて事だろうか。思わず苦笑すると、「大変だねえ」と笑われた。

「……あの、エドガーさん。ミーシャさん達は……お元気ですか？」

気になっていた事だった。

王宮に来て約十日、皆はどうしているのだろうか。

「最近殺人鬼関連で俺もあっちへ帰ってないからねえ、ルカさん

達とはあまり会ってないんだ。でも、ミーシャは元気だったよ」

「そうですね……！」

「うん、最近はずごく忙しいらしくてね、最初はかなりへこんでたけどもうへこんでる暇ないってさ」

ミーシャらしい、元気な彼女でいてくれて本当によかった。

「それなら、よかったです……」

「ミーシャ、ヤエちゃんに会いたい会いたって言ってたよ。会いにいかないの？」

ぎくりと身体が強張る。

ああ、聞かれると思った。

「会いに……いきたいです。ミーシャさんにも、ルカさんにも、……会いたいです。でも……」

「……ああ、殿下が許可しないんだね」

「それもあるんですけど……私、もう少しここに残ってもいいかなって……」

荷台に乗せた紅茶のカップを、何の気無しに眺める。

先程のウォーレスの言葉が、耳から離れない。

理由もわからないけれど、何故だかウォーレスを一人にしたくないと思った。

単なる同情と言われてしまえば、それまでかもしれないけれど。

「殿下……は、私なんか居ても邪魔かもしれないですけど……」

殿下の所為でもない事で、殿下を一人にするのは……嫌なんです」

「……そうだねえ、ウォーレス殿下は敵を作るタイプだからねえ、髪以外でも、自然と孤立するから」

「だから……ごめんなさい、まだ、帰れないです……」

小さく頭を下げ、呟く様な声で謝る。

帰りたい、本当は帰りたい。

だけどウォーレスの事だけじゃない、『あの事』も、まだ残っているから。

しばらくエドガーは黙っていたが、ふっと微笑する。

「わかったよ、ミーシャやルカさん達には俺が言っておくよ。ヤエちゃんは、元気ですって。だから、顔あげて？」

「ありがとうございます……」

顔を上げ、感謝の意を混めた微笑を向ける。

目の合ったエドガーは、一瞬だけ固まったが、「やっぱり似てるなあ」と頷く。

「？誰に、ですか？」

「僕の姉さんだよ、ヤエちゃんは本当に僕の姉さんと似てるんだ」

「お姉さんに……だから最初に会った時、少しびっくりなされていたんですね。でも、そうだったら言ってくれてもよかったのに」

「うん、でもそんな事いたら口説いてるってミーシャに怒られそうだからねえ」

ふふつとあどけない笑顔を見せられ、しーつと指を立てた。

「これ、ミーシャには秘密にしておいてね」

「ふふ、わかりました」

エドガーさんはミーシャさんが本当に好きなんだなあ。

穏やかな雰囲気を楽しんでいると、目的地の第一書庫から、主の何とも言えない悲鳴が聞こえて来た。

「やあ、愛しのウォーレス。こんな所でサボっていたんですね、不真面目さんですね君は」

「相変わらず気持ち悪い事いつてんじゃねえよ！俺が何しようとして勝手だろ！」

「本当に君は……子供の様な事をいうんじゃありませんよ」

一人読書を楽しんでいたウォーレスの隣に、ちよこんと座っているアナベル。

いつのまにこの部屋に入ったのか、ウォーレスの心臓は早鐘を打っている。

「おや、ヤエさんは何処へ行つたんです？」

「茶を取りにいった、もうすぐ来るから兄貴は帰れよ」

「おやおや、ヤエさんと二人きりがいいですね。ウォーレスは本当にむつつりです、ヤエさんが逆らえないのを良い事にあんな事やこんな事を……」

「う、うるさい！誰があんな奴にそんな事するか！」

思わず本を投げかけそうになったウォーレスに、音も無くアナベルの手が静止を示す。

「当たり前です、貴方は王族なのですから、然るべき行動をしてもらうつもりですよ」

「……何だよ、何考えてんだよ」

「七日後、貴方の成人の儀を祝う式典とパーティを開きます」  
突如、ウォーレスの目がかっと見開かれる。

投げそうになった本をテーブルに置き、立ち上がってアナベルから離れた。

「俺はでない。この歳になつて、祝ってもらうなんて正気かよ」

「君が正気ですか、ウォーレス。王族の成人の儀式は何よりも大切ですよ、王位継承者として完全に認められる儀なのですから」

「ますます必要ねえなあそんなの」

鼻で笑い、アナベルの方を振り向く。

第二子に王位継承者？あんたが王位継承者だろ？

「あんたは、俺を頭の古いジジイ共や噂好きの貴族共のさらし者にしたい訳か」

「何をいつてるんです！そんな事では……！」

「俺がそんなのに出て、誰が喜ぶって訳でもねえ。むしろ、何で式典なんてやるんだってばやかれるだろ？」

「……そんな事ありませんよ……」

苦い顔をし、アナベルは頭を振る。

この子は、愚かな人々の所為で、こんなにも捻くれてしまった。拳を握り、邪念を払うかの様に頭を横に振る。

「……では、ヤエさんも一緒にいれば満足しますか？」

「は？」

「ああ、そうです。これは名案です、ヤエさんも式典……は無理かもしれませんが、パーティと一緒にいれば貴方も嬉しいでしょう」

「な、なんでヤエがここででるんだよ」

自分の兄の言動に、ウォーレスは付いていけない。

何を考えているのか、この男は。

「嫌ですか？ヤエさんと一緒にいるのは」

「……いい、嫌って……俺は別に……」

「ごによごによと言葉が聞こえなくなるまで小さくなる。

それを見たアナベルの顔が、少しだけ緩む。

ああ、この子は自分の顔が少し赤くなっているのにも気付いていない。

こんな表情、私は今まで見た事がなかった。

「そう言う事で、よろしいですか？ヤエさん」

突然アナベルが部屋の扉まで移動し、扉を開けた。

すると今まさに扉を叩こうとしていたヤエが、目を丸くし「殿下？」と首を傾げている。

「先程のは聞いてましたか？パーティの話」

「は、はい……扉越しでも、聞こえてました」

「だったら良いのです、ウォーレスのお守りとしてパーティにでももらえませんか？貴女が頼りなんですよ」

頼り。

その言葉に、ヤエの中で何とも言えない使命感が生まれる。

今まで頼られた事がなかった、言うなれば他人に頼りつきりである。

お守り（一緒にいるだけだが）でも十分嬉しい。

「……わかりました！アナベル殿下！」

部屋の奥で、驚いた顔のまま静止しているウォーレスが見える。もはやヤエの言葉も届いていない気もする。

「任せてください、ウォーレス殿下。私、殿下の為にお守りがありません」

言葉になっていない、ヤエの宣言にウォーレスは何故かあつと赤くなった。

32 もう少し(後書き)

エドガー、本当に久しぶり笑  
相変わらず書きにくい奴です。

33 ゲルダ(前書き)

ちよつと長め。

### 33 ゲルダ

「ウォーレス、入るわよ」

成人の儀の二日前、時間は夜中の二十二時。

淡いランプの下で本を読みあさっていたウォーレスの耳に、聞き慣れた女の声が滑り込んだ。

黙っていると、扉が開き短髪の女が荷物を持って勝手に入ってくる。

鎧を着込み騎士団の証の入った長剣を携えた女、ゲルダである。

「ゲルダか、何だよこんな時間に」

「ちよつとねー、つてあれ？ねえウォーレス、ヤエちゃんって娘は？いないの？」

「部屋に戻らせた。……つてか何でお前、ヤ、ヤエの事知ってるだよ」

本を閉じ、少し顔を赤らめながらウォーレスは呟いた。

そわそわしながら相手の返答を待つ彼の姿は、何だか子供みたいで可愛らしい。

「アナベルが言ってたのよ、可愛い女の子がウォーレスの友達になったーって。良い子だ良い子だっけかなり嬉しそうだったんだから」

「っ……！あ、兄貴はヤエの事気に入ってるのか……？」

少しでも不安そうな表情を見せ、きよとんとしたゲルダを見つめる。

それを見て、ゲルダは嬉しそうに目を細めた。

移民の証を持つ少女、何故城の人間が騒がないと不思議に思っていた。

ウォーレスの侍従でもあり、『純血』でもある彼女は、きっとウォーレスのお気に入りなのだろう。

あなたのこんな顔、初めて見るよ。

「何あなた、ヤキモチ？可愛いじゃない」

「ち、ちげえよ！ただ、兄貴みたいな天然タラシに引っかかったらやばいって事を……」

「はいはい照れないの。……まあそれに、アナベルにはベルンハルト様がいるから、引っ掛けるなんて事はないわよ。安心しなさい」  
声のトーンが少しだけ下がる。

表情は微笑みをたくわえたままのゲルダを、照れていたウォーレスも不思議そうに眉を潜めた。

「ベルンハルト……って、兄貴の婚約者、だっただけ？」

「もう、あなたの姉になる御方よ？そんな態度だと、アナベルに怒られちゃうわよ」

ベルンハルト……か、確かあの幸薄そうな女の名前だったな。

ただでさえ、ウォーレスは王宮の事に関しては何でも興味が無かった。

まして兄の婚約者なんて、興味の対象でも何でも無い。

ベルンハルトという女性も、アナベルの成人の儀の度に一度だけ見たっきりである。

第二族国の第三王女であった為に、こちらへ嫁いで来た。

色白の美しい容貌をしているが身体が弱く、大人しい性格の婚約者。

確か、ゲルダの家がベルンハルトや彼女の王族に世話になっていたら聞いた。

「……ゲルダ、お前は本当にそんな事思ってるのか？」

「何よそんな事って」

「兄貴にベルンハルトが必要だって事だよ」

「ベルンハルト様、ね。……当たり前でしょ？婚約者だもの」

どこか寂しそうな顔を見せるものの、ゲルダは歯を見せて笑いかけた。

荷物を抱えたまま、「ほら、考えても見なさいよ」と明るく言う。

「ベルンハルト様は、理想の妻になれるじゃない。すこし病弱だけど、すごく御優しいし美人で頭も良くて……」

「……まあ、いいけど、さ。ゲルダがそれでいいならこいつも素直じゃないよな。」

ゲルダに聞こえないように、本当に小さい声で囁いた。

「……そんなことよりも！ほら、ウォーレスこれ」

抱えていた荷物をウォーレスの目の前にどさつと置いた。

正方形のよくあるプレゼントの形をしているが……何だこれは？

「何だこれ」

「誕生日プレゼント。ちょっと早いけど、式典以降はアタシも忙しいから今あげとくわね」

怪訝な顔をしながら、プレゼントを開けると、数十冊の分厚い本が顔を出す。

一瞬でウォーレスの機嫌が悪くなったのは、言うまでもない。

「これ、全部ゲルダが買ったのか！？絶版の奴ばっかじゃないか」

「そうよー？苦労したんだから、アンタの為に本探しまわってさ

あ……気に入ってくれたなら良かったわ」

嬉しそくに本を手に取り、まるで子供の様に頬を高揚させるウォーレス。

ウォーレス、あなたは本当に何も変わってないのね。

「……ウォーレス。二十歳、おめでとう」

「何だよ急に、気色悪い」

「うん……そうね、少し変かもね」

ウォーレスが生まれてから二十年、本当の弟の様に接して来た。移民の容姿の為に忌み嫌われ、孤独で、嘲笑され続けて来た私の弟。

正当後継者のアナベルと比べられ続け、それでも彼はここまで大きく育ってくれた。

優しい、不器用な、私の弟。

あなたは、私が絶対守ってあげるからね。

「……がんばってね」

泣きそうな顔で微笑み、ゲルダはウォーレスをぎゅっと抱きしめた。

33 ゲルダ（後書き）

ゲルダ回です^^  
新キャラもできました、出番はまだ先かもしれませんが……

34 再会(前書き)

長めです^^

## 34 再会

「これより、クラレンス・グレヴィリア国王陛下が第二子、ウォーレス・グレヴィリアの成人の儀を執り行う」

厳格な表情をした神官が、静かな神殿の中で声を張り上げた。

美しい大理石で敷かれた床に、大理石の柱、天井、壁。

傷や誇り一つない磨き抜かれたそれらは、第一族国が誇るこの神殿の特徴の一つである。

王族の行事のみ行われる為に、一般庶民からは神聖化されているのだが、ウォーレスにとってはただの無機質で詰まらない牢獄でしかなかった。

白い空間、多くの大衆。

こつちを見るな、腹の底では嘲り笑っている癖に。

今、儀式の途中でなかったならば、即刻出て行く所である。

「我らが王の治める第一族国は、今から百年前に……」  
神官の長つたらしい話が始まる。

ウォーレスは、聞いているフリをしつつ内心苛ついていた。

またこの話かよ、兄貴の時にも一回聞いたって言うのに、また聞かなきゃならないとはな。

神官に分からない様に小さな溜息を吐く。

成人の儀の際には、決まって第一族国が建国された時の話がされる。

第一族国の素晴らしさ、歴代国王の聡明さ、現国王の偉大さ、そ

してやっと成人を迎える当人の義務と証について話されるのだ。

数年前に一度遠目で聞いていたのだが、よく兄が疲れ果てないのかと尊敬したくらいの長さであった。

二度と聞きたくないものだと思ったが……今聞く事になるうとは予想もつかなかった。

「我らが住まう第一族国は、古来より第三族国と平和共存協定を結び、互いの親睦を深める為に、王子・王女の『親交』、長年に渉る両国の共同政治を……」

つまりは、政略結婚って事だろ馬鹿野郎が。

そう内心毒づき、ウォーレスは神官から少し離れた所にいるある少女をちらりと一瞥する。

美しい金髪を緩めに巻いて、肩が見える流行色のドレスを纏い、大きい宝石を鑲めた装飾品を付けた少女。

にこやかに微笑む姿は、いかにも王女らしい。  
……なんかキラキラしてる女だな、いかにも出しゃばりそうな下品な奴だ。

これが俺の婚約者、なんだと。

本気でいらぬが、拒否できる物でもない。

……あいつは、会った時から大人しかったよなあ。

無意識に眼で辺りを見渡し、彼女がいない事に少しだけがっかりする。

まあ、あの髪と眼じゃあ、出られないよな。

『私がお守りします』

一週間前の事なのに、まだ鮮明に残る彼女の声。

思い出してみても、少しだけウォーレスは口の端をあげた。

変な奴だよなあ、何だよお守りって。

神官の話が終わると、ウォーレスは大きく深呼吸をし、神官の元へ歩み寄っていった。

「……おい聞いたか、国境付近のアレ」

成人の儀が終わり、所変わって城にある大広間に、ヤエは一人佇んでいた。

ウォーレスのお守りとしてパーティにできる事を許されたのだが、まさかドレスを着るとは思っても見なかった。

少し胸元が広いが、あまり派手すぎない物を懇願したので、まあ仕様がないう事として受け止めるしか無い。

黒髪・黒目の件もあって貴族の人々と同じ様に楽しむ事はできないが、それでもこのような豪勢な場所にいれて興奮しない筈がなかった。

だが、思わずはしゃいでうろちよろしてしまった所為で、ウォーレスとはぐれ、今に至る。

あまりにも人が多いので二階に来たのだが……上から見て目立つ筈の彼の黒髪はまったく見えない。

そんな折だ、背後で声を潜めた男の声が聞こえたのは。

「……ああ、移民の奴らが最近暴れてるってアレか？」

「そうだ、何でも他国へ行く貴族が狙われてるらしい。まったく野蛮人の考えてる事は本当に低レベルっつうか何と言うか」

話していたのは二人の王宮騎士団の連中だった。  
思わず眉を潜め、眼が合わない様に顔を背ける。

「今月で十回以上、そろそろ陛下もご決断なされるんじゃないか？」

「移民の根絶やし作戦？だっけ。陛下も早くやつちまえばいいの  
によお、あんな屑共を放置だなんて……なあ？」

なんだろう、この感じは。

奴隷商の時と、同じ感じがする。

身体が熱くなり、ふつふつと湧いてくる怒り。

こんな人達が、エドガーさんと同じ騎士団なんて、想像もできない。  
い。

「ウォーレスの成人の儀なんてやらなくてそつちをすればいいの  
になあ……あんな移民かぶれの奴なんか、王位継承者として失格  
だろ」

「……や、やめてください！」

ああ、私は何て馬鹿なのだろう。

わざわざこの人達の前まで来て、嘲笑されに行くような事を、た  
った今しているなんて。

「お、お前は……殿下の……」

「ウォーレス殿下、の、悪口……言わないでください。失格なん  
かじゃ……」

思わず俯いて、唇を噛み締める。

この人達に何をされるかわからない、何を言われるかわからない。  
でも、我慢できなかった。

あの人は、悪くないのに。

「う、うるせえな！純血の移民の癖して……てめえには関係ねえだろ！」

「あ、あります……！だ、だから……訂正してください！」

「黙れ！！指図するんじゃない！」

激昂した一人の騎士に、強く胸を押される。

思わず呻いてよろけると、何かがすぐさまヤエの身体を支えた。

そのひんやりとした感触が、何故だか懐かしいと思ってしまうたのは、嘘じゃない。

「僕の友人に、何をするんですか？」

支えてくれた『何か』が、低い声でそう呟いた。

柔らかい物腰だが、少し怒りも含む、懐かしい声。

会いたかった、会いたくなかった、あの人の声。

「は、伯爵殿……！？わ、我々は何の事やら……」

「わからないならもう一度いつてあげましょうか？」

見上げた先に、彼はいた。

女の子みみたいな綺麗な顔が、少し歪んで、二人の騎士を睨みつける。

「僕の大切な友人に、一体何をしてるんですか」

ルカさん、と聞こえるぐらいの声で言えなかった自分が、とても情けなかった。

34 再会（後書き）

久々のルカ登場。

うん、本当に久しぶりだ笑

「……大丈夫だった？ヤエ」

二人の騎士達が慌てて逃げていった後、いつもの様にルカが微笑みかける。

ヤエは、すこし頬を赤らめて、小さく頷いた。

何を話せばいいのかわからず黙っていたが、ルカも何も言わずヤエの手を引いてテラスへと歩き出した。

少し夜風が肌寒く感じるドレスを着た自分を、お姫様の様に扱いながら。

何だか照れくさくなってきてしまう。

「驚いたよ、ヤエがパーティにいるなんて」

「あ、……私も、ルカさんが来ているとは思いませんでした」

ブラックスーツを着た彼の姿は、いつもと違ってどこか大人びて見える。

下の階で酔いつぶれている貴族の人々より、よっぽど落ち着いていた。

胸の奥が、じんと熱くなる。

「エドガーから……聞いたよ。今、殿下の侍従をしてるんだってね」

「あ、はい……ご心配かけてしまってます……」

「いいんだ、別に。ヤエが無事なら、いいんだ」

そつと細い指でヤエの頬に触れた。

すつと愛おしい様に撫で、ほつとした様に眼を細める。

彼の一つ一つの行動に、意識せずとも顔が熱くなってしまふ。

「そのドレス、似合ってるね。すごく綺麗だよ」

「そ、そんな事ない……です」

「ヤエのドレス姿初めて見るから……なんだかこっちが照れちゃうな」

この人にそんな事を言われると、何も言えなくなる。

何でだろうか、何でこの人は、私にこんな優しくしてくれるんだろうか。

私はこの人に何もできてないのに。

「ルカくん、そんな所で何してんのお？」

背後から甘ったるい声が響く。

振り向くと肩が大きく見えた派手なドレスを纏う一人の女性が、こちらへ手を振っていた。

かなり飲んでいるのか、頬が高揚し一層妖艶に見える。

「あ……侯爵夫人殿……」

「ねえ、私いま旦那どっかいつちゃってさあ、寂しいのよお。一緒に飲みましょう？」

侯爵夫人、となるとルカの位よりも高い身分である。

ルカの性格もあって、彼女の誘いには断れないだろう。

ど、どうしようまだ話足りないのに、話したい事だって沢山あるのに。

迷惑だと、わかっているけど。

「ル、ルカさん」

「え……？」

思わず彼の服の端を掴む。

出しゃばり過ぎだとわかっているが、それでもまだルカと話していたかった。

「い、いかないください……」

「……」

きよとんとしたルカの顔が、こちらをじっと見つめる。恥ずかしくて俯いていると、ルカは夫人の方を振り返り「すみません」といつもの様に微笑んだ。

「気分が悪くなってしまつて……後から行きますので先に行つていただけますか？」

「ええ、そうなのお？御大事にねえ……」

妖しくウインクをし、夫人はよろけながらその場から離れていった。

夜風の音が少し強くなるが、それを沈黙が飲み込んでいく。

沈黙が生まれて、自分がやった事の重大さに気付き始めて来た。

「あつ、す、すいません……！私、で、でしゃばつてしまつて……」

「や……あの……」

慌てて彼の服を離し、赤くなる頬を隠そうと彼に背を向ける。

邪魔してしまつてルカは怒っているだろうか、それとも面倒くさい奴だと思つているだろうか。

頭が混乱して、ごちゃごちゃとかき乱れる。

ルカの頬が赤く染まっているのもわからずに。

「そ、それにしても、今日は沢山人がきてますね……！」

何とか話題を逸らせようと必死に言葉を繋ぐ。

自分でも慌てすぎて何を言っているかわかつていない。

「そうだね、殿下の誕生日を祝うパーティーだから当たり前だけど」

「わ、私すごく安心しました……！殿下、最近元気なくて心配してたんです……！」

「……最近……？」

「今日、殿下が楽しんでくれないと私も少し寂しいと言うか……」

殿下、本以外には点で興味ないから……」

「……仲が、いいんだね」

え、と答える前にルカが背後に静かに寄って来た。

振り返る間もなく、彼の手がヤエの肩を優しく掴む。

「……ヤエ、一つ忠告してあげる」

彼の息が耳に熱くかかる。

耳元で響く彼の声が、妙に色っぽいのは、気のせいなのだろうか。

「殿下の命だから仕方ないけど……あんまり近くにしていると襲われちゃうかもしれないよ？」

「えっ……あ、その……そんな事は絶対じゃないと……！」

「わからないよ……？殿下は男だし……僕だって……」

全て言う前に、耳元からルカが離れる。

そして流れる様な動作で、ヤエの首元にそつと唇を落とした。

それが何を意味するのかわからずに、身体がじわじわと熱くなつていく。

は、恥ずかしい……！！

「ヤエ」

突然誰かに腕をぐいつと掴まれる。

赤くなつた顔で見上げると、不機嫌そうな顔をしたウォーレスがこちらを睨んでいた。

「で、殿下……！！」

「いくぞ」

一層怒りの籠つた声で、ウォーレスはヤエを引っ張っていく。

反抗する意志もなければする事もできない為、彼の早い歩調に一生懸命付いていこうとする。

残されたル力を一瞥して。

「……ヤエ」

「は、はい！」

「お前は俺のお守りなんだろ」

「？は、はい……？」

「だったら勝手に逸れるな、馬鹿が」

ウォーレスがいつにも増して不機嫌そうな理由が、ヤエにはさっぱりわからなかった。

### 35 忠告（後書き）

ルカ、ことごとくこんな役所になるなあ  
もうすこし出番増やしたいなあ・・・

お知らせですが今回からしばらく更新をストップしたいと思います。  
詳しくは活動報告で・・・

36 ペル(前書き)

ちょっと長めです。一時復活しました

「おいおい、ルカさんよお。随分面白いモンみせてくれるじゃねえの」

夜風が吹き付けるテラスで、不本意ながらウォーレスとヤエを見送ったまま、ルカは立ちすくんでいた。

素面なのか酔っているのか分からないアンリの砕けた笑いが無ければ、このままずっと立ちすくんでいる所である。

頭にこびり付く、ウォーレスの嫌そうな顔、ヤエの腕を無理矢理引つ張っていく、子供みたいな顔。

ああ何だかムカムカしてきた。

「ウォーレス王子、明らかにお前を睨んでたぞ。なんかやったのか？」

含み笑いをしながら、あちいあちいとワイシャツからネクタイを乱暴に引き抜くアンリ。

仮にも貴族であるアンリだが、今の彼に気品の二文字は全く合わない。

「何も……ヤエと話していただけだし」

「ああ、そっぴやヤエもいたな。ちよつと見ない内に色っぽくなりやがってあのチビは」

アンリの言葉が彼の意志とは裏腹に、痛くルカに突き刺さる。

そっぴや、ヤエはちよつと見ない内に綺麗になった。

確かに奴隷商の時と比べれば綺麗になったとは言える、環境上それは仕方が無いだろう。

そっぴやではない。

か弱そうな彼女が、ウォーレスに連れて行かれた時辛そうな顔をしていたヤエが、  
ウォーレスの侍従であったのにあんなにも生き生きとして楽しそうだった。

彼女が連れて行かれた間に、ウォーレスと彼女の間は何があったのかは知らない。

自分だけが、知らないのだ。

それが悔しくて溜まらない。

自分も、そしてウォーレスにも。

だから思わず……思わず？

「……おいおいおい、ルカあ？何勝手に赤くなってんだよ」

「え、いや……その」

数秒前の出来事をゆっくりと思い出してみる。

思い出せば思い出す程身体が熱くなっていく。

僕は何て事を……

「どうしたルカ。……さてはお前、ヤエにやらしーことでもしたんじゃないだろうな？今あいつドレスだもんな、色っぽくて……」

「……」

「……ルカ？」

「……なんだよ」

嫌な笑顔でからかっていたアンリの表情がひくつと強張る。

依然赤くなつたままのルカを凝視し、「おいおいおい」と何とも言えない表情のままアンリは眼を瞬かせた。

「押し倒したのか……遂に」

「ちつ、違うよ！そこまでは……！た、ただその首に……」

茹で蛸の様に真っ赤になった友人は、最後まで言う事なく恥ずかしそうに黙り込んだ。

こんな反応されると、実にからかいがいない。  
実にこそばゆい、幾つだお前は。

「……お前のそんな顔、初めてだよな」

「……そう?」

「ああ、俺としては嬉しい所だぞ?どんな美人でも胸がでかくてもスタイルが良くても皆『好き』だもんなあルカちゃんは」

薄く微笑み、アンリはルカの頭にそつと手を置いた。

そつだ、こいつは皆同じ様に好きなんだ。

なのに今は違つ、変わったのだ。

『違つてはいけ無いのに』

「……どうなるんだろうな、お前」

「え?」

「……何でもねえよ。俺、ちょっと用事あるから」

ぼんぼんと頭を二三度叩き、アンリは満足そうにルカから離れていく。

先程言った言葉は小さすぎて聞こえなかったが、問う前にアンリはいそいそと何処かへ行ってしまった。

何だろうかと考えていると、泥酔した侯爵夫人が再びルカを呼びに来た。

「……さーと、お仕事しますか」

大広間を抜け、薄暗い廊下を通り、アンリはとある部屋の前に来ていた。

扉の前にいる二人の騎士は、アンリの顔を一瞥し、「どうぞ御入りください」と扉を開く。

扉を開くと同時に甘い花の香りが飛び込んで来る。  
これは、彼女のお気に入りのお香だ。

「……まあ、アンリ……！来てくれたの……！」  
月明かりしかない薄暗い部屋の奥にベッドに、栗色の長い髪の方が座っている。

次期国王となるアナベル王子の許嫁、ベルンハルトである。  
彼女の肌は中身が透けてしまいそうな程白く、か細い腕は前会った時よりも更に細くなった気がした。

金色の瞳がゆらりと揺れ、最初彼女が泣きそうになっているかとすこし心配してしまう。

「来てくれるなんて思わなかった……今日はパーティなのでしよう？」

「そりゃあお前が具合悪いなんて聞いたら飛んで来なきゃなあ、すぐぶっ倒れるんだし」

「まあ、私そんな弱くないわよ？」

柔らかに微笑む彼女は、少し咳き込みながらアンリを見つめる。  
アンリも苦笑し、ベルンハルトの頬を撫でた。

「また痩せたか？……無理して、ないか？」

「無理してないわ、ただちょっと……パーティに出かけようとはりきつちゃっただけで」

彼女の表情が、少しだけ曇る。

パーティ、義理の弟であるウォレスの成人の儀。

彼女が公の儀式に出られる事は殆どない。

アナベルの時でさえ、途中で退出してしまった程だ。

「……ウォレスさんの晴れ姿、見たかったわ」

「いつもと変わらないだろ」

「私は彼と全然会ってないから……ちゃんと見たかったのよ」  
寂しげに俯く彼女は、義理の弟からどう思われているのか知っているのだろうか。  
少なくともベルンハルトは、ウォーレスを大切に思っているだろうが。

「アナベル様の妻になるっていうのに……いつまでもこんなんじや、ウォーレス君にも呆れられちゃうわね」

「お前は自分の身体の心配をしろ、ウォーレス王子の目の前でぶっ倒れたらシャレにならねえだろ」

ブツブツと文句を言いながら、アンリはベルンハルトをベッドへゆっくりと寝かせる。

壊れ物でも扱う様に、いや実際に彼女は壊れ物であろう。

「大体お前は昔っからそうなんだよ、すぐ寝込むくせに無茶して走ったり……何度面倒見てると思ってんだ」

「ふふ、ごめんなさいね」

謝っているのに嬉しそうな顔。

なんて顔をしゃがる。

「ほら、もう寝ちまえ。身体に障るぞ」

「……アンリこそ、昔から変わらないわ」

眠たげに眼を開き、か細い声で囁く。

彼女の声は聞こえるのに、彼女の口許はあまり動いていない。

声音も、段々と穏やかになっていく。

「……お節介で心配性で……とても優しいんだから」

「……かなわねえなあ、ベルのそういう所」

段々と意識が遠のいているものの、一語一語しっかりと言葉を繋ぐ。

彼女を見ると、アンリも自然に表情が穏やかになってしまふ。

この時が、幸せでたまらないのだ。

「……昔からあなただけよ、ベルって呼んでくれるのは」

そうして彼女は静かに眠りに落ちていった。

瞼を閉じて数秒後には、もう寝息が聞こえる。

本当に子供みたいな奴だ。

「……どうにか、しねえとな……」

骨董品の様な白い肌、淡い桃色の唇、滑らかな栗色の髪。

愛おしいと思うのは、何故なのだろうか。

「ごめんな、ベル」

そう呟き、眠る彼女に覆い被さる様に、自分の唇を彼女のそれに寄せた。

36 ベル（後書き）

お久しぶりです！一時復活致しました！  
しかしまた忙しくなるので・・・また亀になります（、・・・）す  
いません

「……ふ、ざけんな貴様!!」

パーティも終盤に差し掛かり、貴族達の中にも酔いつぶれる者達が出て来た時である。

賑やかな雰囲気壊したのは、パーティの主演である男の怒号であつた。

一瞬にして静まった空気の中で、ウォーレスはもの凄い剣幕で1人の神官を睨みつける。

頭に血が上りすぎて、腰元の剣を今にも引き抜きそうである。

「で、殿下!ど、どうか御静かに……皆が見ております……」

「静かにだと?貴様、俺に指図できる立場だったのか?あ!?!」  
表向きの王子らしい言動は、もうすっかり無くなつていた。

青ざめ慌てる神官に、切り掛かるうとするウォーレス。

周りの貴族は驚きつつもひそひそと悪態を吐いている中、ヤエはおろおろとその光景を見つめていた。

どうしよう、と、止めなきや……!!

「その剣をお、御収めくださいませ……!それは王家の宝刀といつても過言は……」

「その王家を貴様が侮辱したのだから!」

雷の様な叱責が、神官の身体を震わせた。

冷や汗を大量に流し、もはやこれまでという言葉が顔に浮かんで来ている。

ウォーレスも怒りで震え剣を収めると、乱暴に神官の胸ぐらを掴み上げた。

「もう一度言え、俺の耳が腐っていないなら貴様が言った事は…

…」

「で、殿下！そ、それはなりませぬ！」

「何だと!？」

「や、やめてください、ウォーレス殿下……!」

ヤエは思わずウォーレスの腕を掴んだ。

こんな怒った殿下を初めて見た。

頭の中で怖いという感情が埋め尽くされている。

けれど本能的に掴んでしまった、このままではダメなのだ。

「殴つては……ダメです……お願いです殿下、手を……!」

「黙れ」

びくつと身体が強張る。

冷たく見下ろす彼の眼は、最初会った時のそれによく似ていた。

恐怖で掴む手が震え腕を掴んだ力が緩むと、ウォーレスは神官の

顔を再び睨みつける。

「……ハイネ……、ハイネじゃ、なかったのかよ……!」

怒りで歪んだ彼の顔が、一瞬だけ泣きそうなる表情になる。

悔しそつに歯を食いしばり、動揺を隠しきれない様子である。

ハイネ？

どうして今、その人の名前がでるの？

「……い、いえませぬ……殿下が何を言おうと……」

「……ふざけるな!」

激昂したウォーレスの拳が振り上げられそうになる。

考えるよりも早く、ヤエは彼の腕に抱きついた。

止められるとは思っていなかった、自分の力なんてたかが知れている。

それでも止めたかった、せめて誰かが介入するまでで良い。

その考えが、甘かったのだ。

「……痛っ！」

振り払おうとしたウォーレスの拳が、しがみついたヤエの顔を殴りつけた。

吹き飛ばされたヤエが地面に転げ落ち、思わぬ痛みで悲鳴を上げる。

奴隷商の時よりも何倍もの痛みで、反射的に涙が眼に滲んだ。

「……っ、ヤ、ヤエ……！」

殴りつけた相手にやっと気付いたウォーレスは、我に返った様に驚いた顔を見せる。

頬を抑えたヤエを泣きそうな眼で見つめ、しばらく黙り込む。

神官を放り投げる様に手放し、ウォーレスは逃げる様に走り去っていった。

ざわつく周囲の貴族達は、王子が頭が可笑しくなったとばかり嘲笑する。

「で、殿下……！」

痛みを必死に耐え、ヤエをウォーレスの後を追う。

大広間を出る際に見た、アナベルの表情が悲しそうに歪んでいた。

37 憤り(後書き)

今回は二話連続で。

あまり進展は……ないかな？

「殿下……、ここ……ですか……？」

ウォーレスを追いかけてみたものの、彼が行きそうな所はたかが知れていた。

自室は見た、庭も見た、残るのは……第一書庫室。  
電気の付かない暗闇の部屋に、彼は一人佇んでいた。

「殿下……！」

「来るな、ヤエ」

冷たい声。

しかし、先程よりも掠れて、震えている。

「でも……放っておけません……！」

「来る……な」

弱々しくなる彼の声に、ヤエは違和感を感じていた。  
何故彼が悲しくなるのだろう。

静かにゆっくりと近づくと、ウォーレスは拳を握りしめ、唸る様に呟いた。

「……ヤエ」

「は、はい」

「この前、母さんがもう死んでるって……いったよな」  
母さん。

そういえば以前、彼は死んだ母親の事を話していた。  
他人の事のように。

「母さんは……俺が生まれた時に……部下に殺されたんだ」

「え……？」

「それが、ハイネという男だった……移民嫌い……俺は、そう聞いていた」

ハイネ。

奴隷商に居た時に、唯一優しかったあの男。

王家に仕えていという驚きよりも、彼が殺人を犯していた事に驚きを隠せない。

あの人は、シンと同じだった。

「でも……違った……そうじゃ、なかった」

震える声が、段々と大きく響いていく。

吐き出す様に出された自分の言葉が、彼にとっては苦痛であるかの様だった。

「違ったって……一体……」

「自殺したんだ……！俺を産んで、すぐに」

自殺、という言葉があまりにも突然すぎて上手く理解ができなかった。

彼の母親は殺されたのではない、自分で死んだのだ。どうして？

理由は明白だった。

「俺なんかを産んだから……母さんは死んだ。こんな、か……み、だから」

「で、殿下……それは……」

「俺が殺した……俺の、俺の所為で」

手で顔を覆い、ウォーレスの呼吸が荒くなる。

覆った手はぶるぶると震え、握る力はもはや無い。

ヤエも呆然としていたが、ウォーレスの異変に気付き正気を取り戻す。

何とかしなければ、だがどんな言葉をかけてあげれば良い？

「母さんは、陛下を愛してた……陛下を崇拜していた……。そう、だよな……愛してる男の子供を産んだのに……それが、こんな……！」

彼の言葉はもはや弱々しくでしか発せられない様に思えた。

幾度も「俺の所為だ」と呟き、書庫室の机を強く殴る。

母親が死んでから二十年間、ずっと引け目を感じていた。

自分を産んだ所為で、移民嫌いの部下に裏切られ、殺された事を。産まれたばかりの自分を、守る為に殺されてしまった事を。

それでも心のどこかで期待していたのだ。

母は最後まで自分を愛してくれていたのだと。

「俺が死ねば良かったのに……！」

涙声になるウォーレスが、確かにそう呟いた。

胸の奥が、ずきつと痛みだした。

「そ……そんなの違います！」

聞き覚えのある声が、部屋の中で大きく響いた。

知っている声、だが、いつもと違うヤエの声だ。

「殿下は、殿下の……お母さんをとても尊敬していたんだと思います……！でも、私は『そんな人』を尊敬なんて、できない……！」

「……お前、母さんを、侮辱するのか……！」

振り返ったウォーレスは悲しみと怒りで歪んだ表情を見せた。

彼の眼には、涙が薄く滲んでいる。

「……だったら、自分勝手な理由でなら自分の子供を見捨てても良いって言っんですか……？陛下に申し訳ないから、『いらねえ』んですか……？」

彼女は震えていた。

既に涙をポロポロと流し、止めようと必死に涙を拭う。

ウォレスの元へゆっくりと歩み寄り、彼の手にそっと触れる。机を殴りすぎて、拳が赤く腫れていた。

「自分が非難されたくなくて……陛下に嫌われたくなくて……そんな事で殿下を一人にさせたんだったら、私は絶対にそんな人を尊敬なんてできない……」

「そ……それは……」

ウォレスの動揺が声や表情にありありと分かる。

何も言い返せない、言い返したいのに。

尊敬していた母を、美化していたかったのに。

どうして勝手に死んだのだと、どこかで考えてしまう。生きていて欲しかった。

嫌われても良いから、会いたくなくても良いから。

それすらも、もう言う事はできない。

二度と、言えないのだ。

寂しい、と。

ウォレスの眦から涙が零れ、頬を静かに滑った。

母さん、と掠れた声で囁き、ヤエの手をぎゅっと握りしめる。

涙がひいた後も、ずっと彼は縋る様に握り続けていた。

38 真実（後書き）

二話連続でウォーレスのお話を・・

一話でまとめる筈だったのにこんなに長くなってしまいました；；；

そして、王宮編は次回で折り返し地点といった所ですね。

奴隷商編よりは長め・・・です

39 殴れ(前書き)

少し長めです

長い間黙り込んだウォーレスの手は、今だヤエの手を握りしめていた。

ヤエもやっとの事で泣き止み、手を掴まれた事に動揺を隠せなかったが、

その手を拒否しようとは決して思わなかった。

ルカの手よりも大きくごつごつとした男らしい手。

けれど、今は小さい子供が親に助けを求める様な、不安げな手に見える。

「……お前の手、小さいな」

ぼそつと頭上から声が聞こえる。

すんつと鼻をすすり、ウォーレスは小さく笑う。

「体温も高えし、お前……幼児かよ」

「幼児って……泣いたんだから仕方ないじゃないですか。……そういう殿下こそ、あつたかいですよ」

「うるせ」

茶化してはいけないかと少し戸惑ったが、ウォーレスは笑いながらヤエの頭に頭突きをしてきた。

勢いはないが、少し元気そうな彼の様子に、思わずほつと溜息をつく。

「……ヤエ」

「はい」

「悪かった……その、殴って。お前を殴るなんて、最低だよな」  
握っていた彼の手が、ゆっくりとヤエの頬へと伸びる。

殴られた為に赤く腫れた頬を、優しく撫でた。

「大丈夫です、腫れてるだけであまり痛くは……」

「嘘つけ、そんな訳ないだろ」

辛そうにウォーレスの顔が歪む。

彼を悲しませたくはなかったのに、これじゃあ逆効果だ。

「だから……俺を殴れ、ヤエ」

「……は？」

「お前を殴ったんだから、俺も殴られるべきだろ。だから、殴れ」  
思わぬ言葉に耳を疑ってしまう。

喧嘩両成敗、目には目を歯には歯を。

そんな言葉が頭をよぎった、なんて無茶を言うんだこの人は。

「で、できませんよそんな事！私が大丈夫っていつてるんだから、大丈夫なんです！」

「お前が良くても俺は嫌だ、殴らないとずっとこのまま離さない」  
今だ握られていた手を、再びぎゅっと握りしめられる。

真剣な眼差しで見つめられ、完全に逃げられない状態である。

「で、でもそんな……無理ですよ」

「お願いだ、ヤエ」

「う……そんな目で見ないでください」

捨てられた子犬の様な目……といっても目つきの悪いウォーレスでは可愛らしくは決して見えないのだが、

普段の彼の行動や言動からすると少ししょんぼりとしたウォーレスの姿は幾分良心を痛めるものがある。

「殴れ」「嫌です」のやり取りが数分続き、お願いされている筈のヤエの方が根負けしてしまった。

こんな状況を誰かに見られたら、いろんな意味で誤解されそうだ。

「わかりました……やりたくないですけど、殿下がそこまで言うなら……」

「おう、思いつきり殴れ」  
やっと手を離し、ヤエの手が届く様にウォーレスは少し屈んだ。  
先程よりも元気になったのが、よりやりにくくさせる。  
はあと深いため息をつき、自分の手をじっと見つめてみる。  
殴れないよ普通……。

「じゃあ、やりますよ……」  
大きく手を振りあげる。

ウォーレスが目を瞑り、いつでも準備ができていると言いたげに  
じっと動かない。

ああ、私こんな所でなにやってんだろうか。  
手を振り下ろし、勢いに任せて彼の頬を……

殴れる訳が無い。

「……おい」

ぺちつと力ない音がした。

精一杯殴ろうと頑張った結果、やっぱり殴れる筈も無く蚊を叩く  
様にはたく事しかできなかった。

もちろん殴られた本人に痛みは無く、即座に不満げな表情が浮か  
び上がる。

「何だ今のは。思いつきり殴れていっただろ」

「で、殿下が殴った時もこんな感じでしたから！痛くなかったん  
で、私もそれをお返しただけです！」

我ながら苦しい言い訳だ。

本当は泣く程痛かったけれど、でもそれを彼に言う必要は無い。  
尚かつその仕返しに殴るなんて……ああもうこの件はいい。

「……何だそれ。……変な奴」

不満げだったウォーレスが突然吹き出した。

あまりにも必死に言い訳をするヤエの顔が面白かったらしく、吹き出してからというもの彼はずっと笑い続けていた。そこまで笑われると、恥ずかしいというより呆れてしまう。そこまで笑う事ないのに。

「悪い、なんか、お前……必死すぎだろ……本当に変な奴」  
ついには咽せている。  
し、失礼な！

「……でも良い奴だな、お前は。ありがとうな」  
だけどまあ、殿下が嬉しそうならそれで良いかな。

一方、城下は静かな暗闇に包まれていた。  
パーティは貴族のみが出席できるのであり、庶民にとっては今は当然眠る時間である。

だが、ひっそりとした街中で、今だ灯りのつく店があった。  
酒場「タリトン」である。

しかし、店内には客は居らず店主のミーシャと長身の男がカウンターの前で向かい合っていた。

「……久しぶり、元気してた？」

「……ああ」

長身の男はフード付きのローブを羽織っていた。  
何かから逃れる様に、そしてその顔を隠す様に。

「会えたんでしょう？あの子に」

「ああ、一度だけだな」

「よかったじゃない、会えると思っていなかったんでしょ？」  
静かに微笑むミーシャの表情は、いつもと違い憂いを帯びていた。

「覚えては……いなかったかな」

男はぽつりと囁く。

表情は変わらないが、どこか寂しげだった。

「今の段階じゃ、まだ思い出せないわ。……今後も思い出せるかは、わからないけれど」

「……やはり、無理矢理にでも連れて逃げれば良かったかもしれない」

あの時出会った彼女の目は、恐怖と怒りで潤んでいた。  
何も覚えていない、だからこそあんな風に見えた。

他人の様に、無関係の様に。

「無理よ、そうしたらすぐに分かっってしまうわ。……せめて思い出していれば、何とかなるかもしれないけれどね」

「俺は……何でもした。あいつが『やりたくない』と言えば……連れて行ったのに」

悔しそうに拳を握り、男は俯いた。

今でも思い出せる、彼女の表情一つ一つ。

全てが始まる前の、辛そうな笑顔も。

「……詳しい事はまだ何もわからないけど、進展はあったと聞いたわ。あの子の影響が、少しずつだけど周りに出始めているらしいの。……だから、もう少し待ってくれないかしら」

「……だが、死なない保証はないのだろう」

ミーシャは黙り込んだ。

はつきりと否定できない故に、何も言えない。

ごめんなさい、と呟く事しか彼女にはできない。

「……ヤエ、早く、思い出してくれ。必ず……必ず迎えに行くか  
ら」

歯を食いしばり、ローブの男、ハイネは悔しそうに呟いた。

39 殴れ（後書き）

久々な人達がでてきましたね笑

今後こんな不穏な感じで出て来るでしょう・・

次っ・・次こそは新章につ

40 教会(前書き)

長めです

「おい、ヤエ。どこいくんだよ」

「あ……ばれました？」

パーティの騒動から数日後。

場内はいつもの活気を取り戻しつつある中、こっそりと隠れる様に部屋から出た人物が見える。

髪と目を隠す為のスカーフをきっちり被り、お菓子の缶の入った籠をしっかりと握りしめた少女。

その後ろで彼女の頭をむんずと掴んだ黒髪の男。  
はたから見れば、恐喝している様な構図である。

「ばれました？じゃねえよ、逃げようとしてもしてんのか？」

「ち、違います！ちよつと、数時間だけ街に……いこうかなと」  
苦笑いを見せ、ウォーレスの手を離そうとしてみるが、なかなかとれない。

馬鹿力、と危うくいそいそになる。

「街い？やつぱり逃げるんじゃないかよ！」

「ちゃんとゲルダさんにはいいました！……殿下には秘密でつて」  
「秘密つて、お前なあ……俺が何でもかんでもダメって言うつても思ってたのか？」

思わぬ言葉に過剰に反応してしまった。

スカーフを掴んだその手が離れ、ボールを弾ませる様に頭を叩く。  
あのウォーレスが、自分の我が儘を許してくれるなんて思いもよ  
らなかつた。

「え！？いいんですか？」

「ただーし俺もついていくけどな、暇だし」

「つ、ついてくるんですか……」

「何だよ、俺がついてちやいけねえ所にでもいくのか？」

「違います……教会です」

「教会？」

「あ、おねえちゃん！」

「ユツカ！元気にしてた？」

街の広場の少し南、あまり人気の無い所に、その教会はあった。

籠を抱えたヤエが少し小走りに教会へ入ると、さっそく1人の子供が迎え入れる。

嬉しそうに微笑んだ子供ユツカは、ヤエに勢いよく抱きついた。ユツカが来たすぐ後に、どこから湧いたのか沢山の子供がわらわらと寄って来る。

ウォーレスだけがその光景にただ戸惑う。

「こいつら……」

「あ……、奴隷商に捕まっていた子供です……。ほとんどは家族の元へ帰ったんですけど……身寄りの無い子供達や身寄りの無い大人の方達はこの教会で住んでいるんです」

奴隷商、という言葉を使うヤエは酷く辛そうに見えた。

苦笑しているものの、目は笑っては居ない。

辛い思い出しかない、嫌な場所。

楽しそうに笑っている子供達がどんな辛い目にあっただのか、想像もしたくない。

ウォーレスは苦い顔で子供達を見ると、ヤエに抱きつくユツカが

こちらをじつと見つめている事に気がついた。

「……何だ？俺に何か……」

「……おじちゃんだれー？おつきいねー」

「おじつ……！？俺はまだ二十だぞ！ガキ！」

予想もしない言葉に、ウォーレスは思わず声を荒げた。

歳を聞いて不思議そうに驚くユツカの頬をつねると、周囲がわつと騒ぎだす。

「ちょ、ちょっと殿下ユツカに変な事しないでくださいよー！」

「ユツカをいじめんな！デカ物め！」

どこかかと子供達に脚を蹴られる。

個人個人は痛くないのだが、的確に脛を蹴られている為、すぐに我慢の限界に達してしまった。

「ああ？なんだとクソガキ共……？」

「殿下！ナキムも殿下の事蹴っちゃいけません！」

ナキムという人一倍強く脛を蹴って来る少年は、特にウォーレスに敵意をむき出しにして来る。

あまりにも蹴られるのでウォーレスが拳骨を落とすと、涙目になりながらも罵倒を吐き続けた。

「いつてえなオヤジ！殴るなよ！」

「オヤジじゃねえ！てめえクソガキ、殴るなって言っならお前の行動見直せ！」

「俺はいいんだよ子供だから！」

一体、どちらが子供なんだか。

呆れながらその光景を見てみると、顔を引き攣らせたナキムがこちらを向く。

「ヤエ姉ちゃん、こんなオヤジと別れるよ！すっげえ嫌な奴だ！」

大人げないし！」

え？

思わず二人とも黙ってしまった。

言った当人は、まだ言い足りない様子である。

「え……別れるって、……は？」

「お前、ヤエ姉ちゃんと付き合ってたんだろ！お前みたいな奴は、きつとヤエ姉ちゃんを泣かせるんだ！だから別れる！」

もう一発脛を蹴られた。

しかしウォーレスはただ口をぽかんと開け、呆気にとられている。ゆっくりとその顔が赤くなった事には、誰も気付いていない。

「も、もうナキムったら！付き合ってたわいよ、第一そんな事いっただら殿下に迷惑じゃない」

慌ててナキムの口を塞ぐヤエに、腑に落ちないといった顔のナキム。

二人が暴れているのを見つつ、ウォーレスはごくりと喉を鳴らす。

「いや……その、別に」

「え？今何か言いましたか殿下」

「だから……っ！俺は、別に……迷惑なんかじゃ、ない……から」最後の方はごによごによとして聞き取れない。

顔一面真っ赤になったウォーレスを、ヤエは不思議そうに見つめる。

どうしたのだろうか、何でそんなに顔を真っ赤にするんだろう。

「じゃあオヤジが彼氏じゃないなら、姉ちゃん好きな人とかいないのー！？あ、そうだあの人？時々話してくれる……」

好きな人。

顔に残る熱が引いていくのがわかる。

聞きたくなかった、でも気になっていた言葉。  
ふとヤ工を見ると、今度は彼女の顔がほんのりと赤みを帯びて  
いた。

誰かを思い出しているのか。

その誰かは、『好きな人』なのか。

知っている。

それは、俺じゃない。

「……殿下？どうかしましたか？」

何でも無い、とすら言えない自分が心底情けなかった。

40 教会（後書き）

新キャラその1登場です。  
いくら何でも王子を蹴っては不味いだろうと

## 41 ダレット

教会の中に入ると、談笑している二人のシスターが見えた。

一人は物腰の柔らかそうな老婆、もう一人はその娘であろうか、老婆に面影が似た女性である。

ヤエ達の姿を見つけると、嬉しそうにこちらへ近づいて来た。

籠にあるお菓子の缶を渡すと、後ろにいた子供達はわっと群がり始める。

さつきまでウォーレスの脚を蹴っていた子供達でさえも、無邪気にシスターの元へ駆け寄ってきた。

「まあ、ウォーレス殿下ではありませんか。こんな所へよくぞいらっしやいました」

「あ、えっと……」

「殿下、こちらはこの教会のシスターでケリンさんとその娘さんのトワさんです。捕まっていた子供達の面倒を見てくれているんです」

ケリンは柔らかく微笑み頭を下げると、すぐに子供達を引き連れて教会の奥へ去ってゆく。

さつきまでの騒々しさが嘘の様に、教会は静まり返る。

ヤエはトワと世間話をし、のんきに笑っている。

まあ、ずっと城に閉じ込められっぱなしだったからこれもいいか……。

する事も無く、教会を眺めていると、背後でがたつと扉の開く音がした。

「……………あなたは」  
少女だった。

見た目はヤエと同じくらい、けれどヤエより遙かに背が高い少女である。

栗色の短い髪の毛が長身によく映え、男性的な顔つきの所為で最初は男だと思ってしまった。

しかし敵意むき出しのその声の高さで、女だと確信する。  
ウォーレスを見た瞬間から、少女はずっと睨み続けている。

「……………何睨んでるんだよ」

「……………貴方には関係ないです」

少女は無愛想に答え、すたすたと教会へ入って来た。

ウォーレスを無視し通り過ぎようとしたので、咄嗟に彼女の腕を掴む。

「お、おいちょっと待て。関係ないって何だよ、お前が睨んで来たんだろ」

「……………そうでしたか？」

表情は一切変わらない、声音もずっと一定である。  
何だこいつ、舐めてるのか。

「おい！お前いい加減に……………！」

「触らないでください」

少女は掴んだウォーレスの手をいとも簡単に振りほどいた。

怒るよりも呆気にとられたウォーレスの横を通り過ぎ、少女は教会の奥へ消えていく。

あからさまな拒絶、言わなくても分かる嫌悪。  
思ったよりもショックを受けてしまった様だ。

「す、すみません殿下！あの子が無礼な事を申し上げた様で……」  
トワが慌ててウォーレスに駆け寄る。

すみませんと頭を下げ、困った様に溜息を吐く。

「あの子……ダレットは、少し人見知りが激しくて……本当は優しいんですけど……」

「ダレット……と言つのかあいつ……」

「で、殿下！分かつてると思えますけど、ダレットに三倍とか十倍返しはやめてくださいね！」

「わかつてるよ！んな事しねえよ！」

ヤエの頭を軽く小突き、ユツカのように頬をつねる。

からかいながら笑ってはいるものの、その顔には動揺の色が見えた。

自分が城内で嫌われているのは痛い程分かっている。

それでも一国の王子であり、立場が上である自分を人々は体裁的に敬わなければならない。

嫌っていても、貴族として付き合い合わなければならない。

けれどダレットという少女は、あからさまに自分を嫌っていた。

恐らく自分が王子だという事を知っている、だから嫌った。

またこの髪の為か。

「……案外、キツイもんだな。嫌われんのは」

「殿下……？」

頬から手を離し、ヤエの頭をぽんぽんと叩く。

ヤエの不安げな表情に、思わず苦笑してしまう。

「へへ、ブツサイク」

「な……、酷いですよ殿下！」

顔を真っ赤にして憤慨するヤエ。  
ヤエといると、いつも安心する。  
だからまだ一緒にいたいと思った。  
ヤエにとつてそれが迷惑だとしても。  
ヤエに、帰りたい所があったとしても。  
ずっと一生、このまま城に閉じ込めてでも。  
だけど、ヤエには嫌われたくない。

「でも、そんなのは……違うよな」  
彼の声は、ヤエには届かなかつた。

#### 41 ダレット（後書き）

お久しぶりです。とんがりです

この度は、地震により亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

そしては被災された方々に御見舞い申し上げます。

少しでもこの小説が読者様の不安を取り除ける様善処したいと思えます。

42 思わぬ再会(前書き)

少し長め

## 42 思わぬ再会

「エステイム家……ですか？」

昼近くになり、ヤエはケリン達と共にキッチンで食事の支度をしていた。

本当は子供達の面倒を見る所であったが、彼らは彼らでウォーレスを絶好の遊び相手に決めたらしい。

庭で楽しそうな笑い声や、ウォーレスが半切れで叫ぶ声が聞こえて来る。

それを聞きながら昼のシチューを煮込んでいると、ケリンにその名を聞かれたという訳だ。

エステイム家、おそらく有名なのだろうかもちろん知る訳が無い。

「有名な貴族のお家でねえ、先代様は建国に携わった貴族の内の一人なのよ」

「えっ!?!……って事は、ルカさんと同じ……」

第一族国の建国に携わった貴族。

よくよく考えてみれば、それってかなりすごい事なのではないだろうか。

「それで、今の当主様のカフ様がこの教会に援助なさってくれていたの。あの子達を引き取るには貴族様の援助が無くては……」

ケリンは苦笑しつつ、デザート用の林檎を手にとる。

すらすらと皮を剥いてゆき、あっという間に一つ剥き終えた。

「でもねえ……もう、あの子達の面倒を見れなくなってしまっ

よ……」

「……どういう事ですか……？」

シチューを混ぜる手を止め、ケリンの方を視線を移す。

少し言いにくそうなケリンを見つめていると、突然背後から冷たい何かが首筋にすつと触れ……

「よつ。久しぶり」

「ひっ！！」

思わず飛び上がり、誤ってシチューの鍋にぶつかりそうになる。ケリンやトワの悲鳴が聞こえ、後ろからむんずと襟を掴まれた。耳元で聞こえた声、この荒っぽい掴み方……まさか。

「何してんだお前、ギャグか？」

「ア、アンリさん！？ど、どうしてここにいますか！」

「検診、ここも俺の担当だし。あ、ばあちゃんとトワちゃん。お邪魔するな」

不思議そうに眉を潜め、ぐりぐりとヤエの頭を撫でるアンリ。撫でるといふよりは揺すっているという方が正しいだろう。でもその荒っぽさが懐かしい。

「しかしお前、城の侍従だろ？逃げて来たのかよ」

「ち、違います！殿下も一緒です！」

「は？殿下も？護衛も無しに？」

ぐつと答えにつまる。

ここに出かける時、お忍びという事で護衛は付けなかったウォレス。

確かに今考えるとマトモな判断ではなかった。

「ま、いいけどさあ……お前いるんだったら、ルカ、喜ぶだろうな」

どきつと心臓が鳴る。

顔がかあつと火照り、体中は熱い。

どう反応すれば良いか分からないでいると、アンリがにやにやした顔で覗き込む。

「かわいいねー、そんな顔しちゃって。何か聞きたい事でもある？ヤエちゃん」

「……ルカさん、ここにいますか？」

「ん？秘密」

意地悪そうに笑い、またぺんぺんと撫でられる。

今度ははたく様に。

「アンリさん！」

「はは、嘘だって。いねえよ、今日は仕事。残念だったな」

しゅるしゅると何かが抜けていく感覚がした。

ルカさんは来てない、来てない……。

頭の中でアンリの声がエコーする。

期待した分、少しシヨックでもある。

「ま、お前から会いにいけよ。その方が、あいつは喜ぶから」

そう言っつてアンリは、剥いた林檎をつまみ食いした。

「あ、お前……ダレット！」

「……何で名前知っているんですか」

子供達の遊び相手になり、早一時間。

子供の腕力とは思えない程遠く飛んだボールを取りにいった先に、

ダレットはいた。

先程の最悪な出会いの所為で、ウォーレスの方が気まづくなってしまう。

「な、何でって……あのシスターがいつてたから」  
「そうですか、忘れてくださっても結構ですよ」  
何だこいつ。

ウォーレスの中に、ふつふつと煮えたぎるものが生まれる。  
さつきから下手に出てればいい気になりやがって……。

俺、何かしたか？してないよな？

何でこんなに嫌われなきゃいけない？

俺は悪い事なんて何もしていないのに。

「そ、そうそう人の名前なんか忘れねえよ！」

「そうなんですか？庶民の名前なんてどうでもいいんじゃないんですか」

ダレットは目も合わせず、後ずさりする。

右手をさつと後ろに回し、何かを隠している様なそぶりを見せたけれど、それはウォーレスにはよく見えていない。

「おっ前なあ……そんな言い方はねえだろ！言いたい放題いつてるけどな、俺だって言いたい事が……！」

「……！これだから、貴方達は……！」

一瞬、ダレットの表情が曇る。

先程よりも強く睨み、無愛想な顔が怒りで歪む。

そして背後に隠した右手が動く。

「それは駄目。わかるよなダレット」

「……アンリ先生」

ダレットの右手が、力強く抑えられた。

ウォーレスには見えなかったが、何かを隠し持っているらしい。

いつの間にかダレットの隣に居たアンリは、ウォーレスをちらり

と見る。

微笑んだまま、アンリはダレットの右手を離す。

「そんなのやったらお前の首が切られるぞ、しまいな」

「……やりすぎだとは、思っていました」

「ん、なら良い。だが、そんな物騒なもんどこで拾ったんだよ  
黙るダレット。答えたくない様に見える。

アンリは、答えるまでじっと黙り続ける。

ウォーレスは……入り込めない。

「……おじやまするねえ、シスター・ケリンはどこですか？」  
その雰囲気、誰かが打ち壊した。

## 42 思わぬ再会（後書き）

またまたアンリ登場です。

でもこいつが出ると、アンリメインになりそうで大変です……

### 43 エステイム家

でっぷりと脂肪を蓄えた大きな身体。

きちんと整え、綺麗なカールを描く口ひげ。

白くこぎれいなその服は、太った腹の所為でばつんぱつんである。加え、五本の指に煌めく大きな宝石の指輪は、彼が富裕層である象徴であろう。

横に二人の従者を引き連れ、男はソファにしんどそうに腰を下ろした。

「久しぶりだねえ、シスター・ケリン。どうだね？子供達は元気かい？」

「え、ええカフ様。カフ様のお陰で子供達も元気にすくすくと育っていますわ」

「そうかね？いやあ、そうだろうなあ。私は子供の元気な姿が大好きだねえ」

はっはっはっ、と満足そうに笑いながら、カフは自分の腹を叩く。それに対してケリンは少し困り気味に苦笑した。

機嫌を損なわなければ良いのだけど。

特に、今ウオーレスがいる時に揉め事を起こしたくはない。

「……それで、カフ様。今日は何の御用でいらしたのですか？」

「ふむ、そうだそうだ。今日ここに来たのはだね、まあ前にも言った事でもあるんだ」

お気に入りだという大粒のルビーの指輪を眺めながら、カフは笑みをこぼす。

彼が上機嫌な時に見せる行動だ。

最も、今の彼の上機嫌の元は、自分たちにとっては良くない事なのだが。

「いやね、貴女も知っている通り我がエスティム家は金融を生業としている。最近は鉾山も発見して、中々羽振りも良くてねえ……」

「はあ……」

「それでだね、教会の子供達を……鉾山で働かせるというのはどうかなと私は思うんだよ。シスター・ケリン？」

「鉾山で……！？」

思わずケリンは立ち上がりそうになる。

しかしカフの目の前だったので、平静を装い服をぎゅっと掴んだ。

「鉾山だなんて……まだ五つにも成っていない子もいるのですよ」

「何せ人手も足りなくてねえ……、それに鉾山では歳はあまり関係ないだろう」

「けれど……」

「シスター・ケリン？私もね、あの子達の為には良くないとは思っているんだよ。だが、私の家がいくら金を持っていても限度がある。いつまでも援助できないかもしれないんだよ、それにこの土地だって……」

カフの目がざらりと光る。

獲物を狙う様な目、望んでいる答えを今か今かと待っている目。

地位もある、借りもある、おまけに人の頼みを断れる筈もない人間だ。

いくら博愛を持っていようと、金を稼がない子供を何人も養うには援助だけでは無理がある。

ケリンはそれを誰よりも分かっている筈だ。

そう、断れる筈はない。

「おい」

いきなりシスターの背後から、ドスの利いた声が響いた。

見上げると、予想通りというか、詰まらなさそうに顔を歪めたウォーレスが仁王立ちしている。

「おお、ウォーレス殿下ではありませんか！何故貴方様がこんな所に？」

もみ手をしつつ、カフは立ち上がる。

そんな様子を、ウォーレスは嫌悪の眼差しで見下ろした。

「……貴様には関係ない」

「そ、そうでございますな……」

ははは、と乾いた笑いで返すと、ウォーレスは不満そうに二人を見る。

しばらく黙り込み、眉間に皺を一層寄せた。

「この教会は、金が足りないのか」

「い、いえそういう話では……」

「では貴様は、援助した教会に金をたかるのか」  
瞬時にカフの顔が蒼白に変わる。

慌てて立ち上がり、「そ、それでは失礼するよ！シスター・ケリン！」とだけ言い残し、逃げる様に去っていった。

重たい身体を一生懸命揺らし、遅れる従者を叱咤している。

「……ありがとうございます、殿下」

「いや……別に。それより、今は……」

「私共に援助してくださっている貴族様です、エスティム家なのですが……お知り合いましたか？」

「いや、あんなのは知らん」

あまりにも堂々というものだから、ケリンも思わず吹き出してし

まっ。

当人は何が可笑しいのか、不思議そうに首を傾げている。

「なら良いのです……殿下、子供達やヤエちゃんにはくれぐれも内密に……」

「ああ、わかって……」

最後まで言おうとした時、もの凄い勢いで教会の扉が開いた。

一瞬の事で呆然としていたが、扉を開いた人物は酷い形相でこちらへ向って来る。

騎士の鎧を来た女……まさか。

「ウォーレス！！あんた、なんで城から抜け出してんの！！」

数時間後、ゲルダとアナベルにより怒られるウォーレスとヤエが城内で見られたの言うまでもない。

### 43 エステイム家（後書き）

新キャラ、カフ。

まあ典型的なキャラです笑

44 プレゼンター(前書き)

少し長いですが

## 44 プレゼント

「まったく……、私はねウォーレス。君の勝手な外出を許可した覚えはないんですよ」

「……何で俺が」

「口答えは許しませんよ」

鋭い眼光で睨みつけ、アナベルはウォーレスの耳を引っ張る。嫌がるウォーレスを、ゲルダが睨みつつ力づくで抑えている。

いくら図体がでかいといっても、騎士であるゲルダには敵わないらしい。

それを見つつ、すみませんとヤエは頭を下げた。

「私が教会に行った所為です……すみません殿下」

「いや、君は良いんです。君の外出を許可したのは私ですからね。でもウォーレス、君は仕事もさぼり無断外出……やっぱり護衛を二人増やすべきですね」

はあつと溜息を漏らすアナベルに、もの凄い形相でウォーレスは首を横に振る。

「ふ、ふざけんな！護衛なんて増やしたら、余計外にいけなくなるだろうが！」

「君は王族としての自覚を持ちなさい、護衛無しで勝手に外出する王子が何処にいますか！」

アナベルがそれを拒否すると、ゲルダを含めた二倍返しの説教が帰って来た。

普段大人しそうなアナベルでさえも、ムキになってウォーレスを諫めている。

本当にこの三人は仲がいいんだなあ。

「大体、今は殺人鬼も横行してるんですから……君にもしもの事があつたらどうするんです」

「教会まではそんなに距離はねえだろ、子供じゃ無いんだから一人でもいける」

「教会……？……ああ、たしかエスティム家の領地でしたっけ？」

意外な返答に、ウォーレスは眉を潜める。

後ろでヤエが反応するので、どうやらその貴族の名前を彼女も知っているらしい。

「知ってるのか、兄貴」

「ええ、金融業で大成した貴族ですよ。なにより、あそこの家はこの国の創立者の一人ですしね。エスティム家がどうかしましたか？」

「いや……、教会で当主に会っただけ。本当に金持ってる奴だったんだな」

すると、アナベルがふと顎に手を置き何かを考え始める。

分かんずに待っていると、「確か、以前まででしたよ」と思い出した様に答えた。

「最近、事業に失敗したらしいです。外来品に投資したのに、株価が大暴落。おまけに鉱山を見つけたらしいのですが、落盤事故で多くの死者がでたりと……今は、切羽詰まっている状況だとか」

自分でもよくわからないのか、あやふやな表情のままアナベルは「まあいいでしょう」と結論づける。

「この件は終了です。さ、ウォーレスは部屋に帰りなさい。ヤエさんはここに残ってくださいね」

「え、何でだ！ヤエも連れて……」

「はいはい、いくよウォーレス。お仕事いっぱいあるからねー」  
ゲルダが無理矢理ウォーレスを追い出し、扉の外でぎゃーぎゃーと叫ぶ声が聞こえる。

自分だけ残すとは、何を言われるのだろうか。

自分は許可したとはいえ、王子を護衛無しで連れ出したのはやはり不味いだろう。

「さて、ヤエさん。君を残したのは、私からプレゼントがあるからです」

「え？プレゼントですか？」

「ええ、貴女はしばらくウォーレスの子守りをしてくれていましたからね。本来ならば、アルケミラ家へ返してあげたい所ですが、これはウォーレスの問題ですから……」

そう言ったのにも関わらず、アナベルはヤエを残して部屋から出ようとする。

分からずに戸惑っていたが、微笑みを蓄えたままアナベルは「ここで待っていてくださいね」と出て行ってしまった。

プレゼント。

まさかそんなものを貰うとは思っていなかったが、……少し期待してしまっ。

思えば、ウォーレスに連れて来られてどれだけの日にちが経っただろうか。

短い様な気もするし、長かった様な気もしてしまう。

出来事は沢山起きていないのに、少しだけウォーレスと仲良くなれたかもしれないと思ってしまう。

ウォーレスの我が儘には手を焼いているが、それも今となっては

嫌な気はしない。

「何だかんだ言って楽しかったのかなあ……」  
それでも帰りたい気持ちは、変わらないけれど。

「失礼します」

突然、部屋の扉ががちりと開けられる。

アナベルだろうか？

扉の方を振り向くと、声の主がほっとした様に微笑みを零す。

それは、ヤエの目にもはっきりと見える。

一番会いたかった人が、目の前で笑っている。

「……来ちゃった、久しぶり」

ルカの声に、目の奥がぐっと熱くなった。

「……本当に良かったの？アナベル」

ウォーレスを自室に強制的に押し込んだ後、ゲルダが不満そうにアナベルに文句を言う。

彼女の不満は、アナベルが一番良く分かっているだろう。

「あの貴族をヤエさんに会わせた事……ですよね」

「だって、貴方はウォーレスとヤエちゃんをくつつけたかったんじゃないの？」

「まあできるならば、そうあって欲しかったですがね」

そう言いつつも、楽しそうにアナベルは笑う。

ただの兄馬鹿、そう思っていたのに何を考えているのやら。

「どうみたってあれは、ヤエさんにメロメロです。ウォーレスに勝ち目はありません」

「そんなのやってみなきゃわからないじゃない！アタシの弟は世界一かつこいいわよ！」

頂けない発言に思わずムツとする。

権力や金はともかく、顔ではきつと負けていない。

まあ性格は……何とも言えないが。

「当たり前です、私だってウォーレスが一番だと思いますよ」  
でも。

そう呟いて、アナベルはゲルダの手をおもむろに触れた。

少し冷たいその手が、ぎゅっと不安そうに握ってくる。

「あの子は、ヤエさんを好きになっただけではない。アルケミラの当主がヤエさんを好きなのと、ウォーレスが考えている気持ちは違うんですよ。あれはただの嫉妬ですよ」

「……ヤキモチ焼いてたのに」

かあつと赤くなるウォーレスの顔。

やっと誰かを好きになったと思っただけなのに、あれもただの嫉妬？

あの子はやっぱり、一人ぼっちになっってしまうの？

「それに、ヤエさんだってもう分かっていますよ。誰が好きかだなんて。人の恋路を邪魔する奴はなんとやら、ですよ」

ね？と首を傾げられたが、やっぱりゲルダは不満で仕様が無い。

妙に余裕ぶつたアナベルの顔が、少し憎たらしく見えてしまった。

#### 44 プレゼント（後書き）

お久しぶりのルカ登場。

さっさと進展させたいものです（笑

45 覚悟（前書き）

相変わらず、長めです

パーティー以来会っていないかった彼は、少し背が伸びている気がした。

それ程日にちが経ったのかと言えばそうでも無い、けれど自分が見えていない間に彼は成長していた。

出来たなら、変化なんて気付かない程一緒にいたかったけれど。

「いきなり来て、びっくりした……よね」

「え、その……」

「顔、びっくりしてる」

相変わらずの温和なその微笑みに対し、自分は今どれだけ間抜けな顔をしていたのだろう。

恥ずかしくなって顔を覆い隠すと、ごめんごめんと笑いながら謝られた。

静かに扉を閉め、ルカはゆっくりとこちらへ歩み寄って来る。

「あの、ルカさん……どうしてここに？」

「エドガーに頼んだんだ、ヤエに会いたかった。無理矢理だったから、駄目だと思ったんだけど……よかった」

安堵した表情で、ルカはヤエの顔をじっと見つめる。  
穏やかではあるものの、微かに寂しげな色も見えた。

「……ここに来る途中で、殿下に会ったよ。相変わらず、不機嫌だった」

「そう、ですか」

「でも、少し変わったね。睨まれなくなったよ」

それって変わったというのだろうか。  
そう言おうと思っても、中々言葉が出て来なかった。  
会いたかった人が、今日の前に居る。

嬉しいのに、緊張からなのか、何を言えば良いのかも分からなくなってしまう。

パーティの時の方が、ずっと喋っていたのではないだろうか。  
お互い、長い沈黙の中、ただただ微笑みあう。

「……そうだ、ちょっとこっちに来て」  
沈黙を先に破ったのは、ルカの方だった。

何か分からず頷くと、そっと手を取られ部屋の隅にある鏡の前に連れて行かれた。

ルカはポケットに入れた小さな箱を取り出し、一回だけ深呼吸をする。

「ヤエに、プレゼントがあるんだ」

「え？」

「本当は、買い物に行く日に……渡そうと思っていたんだ。ごめんね、遅くなって……受け取ってもらえると、嬉しいんだけど」  
断る理由なんて、ある筈がない。

小さな声で返事をする、ルカは箱を開け中身を取り出した。

「綺麗……」

シルバーのネックレスが入っていた、細い鎖がキラキラと輝いている。

そして四葉のクローバーの形をした、小さな薄桃色の宝石がヤエの目を一番に惹かせた。

「あの、今付けてもいいですか……！」

「うん……でも……僕に、付けさせてくれる？」

思わず目を丸くしてしまう。

答える前に、ネックレスを手を取ったルカが、背後に回った。

「駄目……？」

耳元で、そつと呟かれる。

顔が赤くなるのを必死に堪え、こくこくと頷くと、ルカは嬉しそうにネックレスをやエの首につけた。

付ける際に、彼の指が微かに首筋に触れて、反射的に身じろいでしまう。

「うん、やっぱり似合う。かわいい」

「あ、ありがとう、ございます……！」

初めてルカに貰ったプレゼント。

こんなの、嬉しいに決まっている。

鏡越しに見てみると、その宝石は小ぶりながらも光を反射して、自分には勿体無いくらい美しい。

「嬉しいです……、本当にありがとうございます」

もう一度お礼を言い、ルカの方へ向き直すと、彼の表情は先程よりも暗い影が差していた。

「……ねえ、ヤエ。あのさ……」

「はい？」

「僕、もうすぐ……結婚するかもしれないんだ。侯爵夫人の……娘さんと」

結婚。

あまりの事で、その言葉の意味が理解できない。

頭が真っ白になりかけて、慌てて思考を呼び戻す。

「前々から、縁談が来てて……断ってきたんだけど……僕は当主だから、もう引き延ばせなくなりそうなんだ」

「縁談って……」

「まだ、正式に返事はしていないんだ。それに、あちらには悪いけど……好きな人でもない。だから……まだ、時間はあるんだ」

苦笑していたその顔は、真剣な表情に変わる。

喉を鳴らし、一呼吸置き、彼はヤエの手を握った。

「ヤエ。また、僕の家……戻って来てくれるなら……僕のお願いを、一つだけ聞いて欲しいんだ」

「おね……がい？」

「うん。……それでね、覚悟を……決めて来て欲しい。状況によつては、君はあの家に住めなくなってしまうかもしれないから」  
そつと、握られた手が離れていく。

ただ微笑んでいるル力は、何も言わず部屋から出て行った。  
残されたヤエは、力なくその場に座り込んでしまう。

結婚、縁談、覚悟、もう引き延ばせない。

頬に涙が一筋流れ、ヤエはネックレスに付いた宝石を、力なく握りしめた。

暗く汚れた、人気の無い廊下。

周りには空っぽの牢屋が奥まで続いている。

ローブを被った男、ハインは牢屋を横目で見つつ、奥へと足を運ぶ。

数年前に取り壊される筈だった牢屋、拷問用に作られた王家でも忌み嫌う場所。

そこに今収容されているのはただ一人。

看守は予め薬で眠らせ、他の牢屋に閉じ込めた。  
しばらくは起きないだろう。

「よお、ハイネ。久しぶりだねえ」

「……起きていたか」

一番奥の牢屋にいたのは、グレーの髪の毛の少しやせ細った男。  
嘗ての自分の雇用主であった、シンである。

「お前、なんでここに来てるんだ？わざわざ捕まりに来たってか  
？」

「違う、お前に話があつて来た」

「へえ……」

にやにやと嫌な笑みを浮かべ、シンは座り込む。

拷問を受けていたのに、相変わらずその性格は治っていないらしい。

「取引をしたい」

「何のさ。捕まって金も手下もいねえ俺に、何の取引するってんだ」

「いるだろう。お前には、外にもつと使える手下が居る筈だ」

シンの表情が微かに変わる。

と、言っても眉が動くぐらいであるが。

「兵士と武器を売って欲しい、金ならお前の言い値で良い」

「……なんでえ？そんな物騒な取引、お前が言つとは思わなかつたなあ」

「ふざけるな。金も出すしお前をここから出す、理由なんて聞か  
ずともお前にはデメリットはない」

人をも殺す様な鋭い睨みに、シンは「それもそうだ」とただにやついた。

「いいよ、別に。人でも武器でも売ってあげるさ、そつちには良

い後ろ盾があるみたいだしな」

「……そうか」

無表情で頷き、ハイネは牢屋の鍵を開ける。

少し錆び付いていたが、力づくで引つ張れば何とか開けられた。

「さんきゅー、これでまた一儲けできる」

「……じゃあ、六日後。国境の外で取引だ」

「おっけー」

軽い返事を受け流し、ハイネは牢屋から立ち去る。

こんな所、一秒たりともいたくないものだ。

「おい、ハイネ。お前、戦争でもする気い？」  
びたり、とハイネの動きが止まる。

けらけらと笑い、いつの間にかシンはびつたりとハイネの背中にくっ付いていた。

「お前って、案外ヤバいんだなあ。ただの傭兵かと思ってたけど

……どこの組織と戦争するんだ？」

「……国だ」

「は？国？」

さすがのシンも、何も言えなくなる。

国って、あの四つの国の何処に喧嘩を売る気なんだ？

四つ全てが軍事を怠っているとは思えない、兵士を集めても……  
勝ち目はない。

「……何処の国と？」

「……すぐに分かる」

ハイネの口角が、ほんの少しだけ上がった気がした。  
だがそれを、シンは見る事はなかった。

45 覚悟（後書き）

久々登場のキャラやら、新キャラ（？）やら・  
一度キャラをまとめた方がいいかもしれませんね^^

46 嫌いだから

『……本当に大丈夫か？ヤエ』

朦朧とする意識の中、誰かの声が聞こえた。

目を開いている筈なのに、声の主の顔がよく見えない。

声もくぐもって、一体誰なのかもわからなかった。

『……そうか？お前、今日も飯食ってないんだろう？顔色が悪いぞ』

心配そうに私の頬を撫でるその手は、ルカさんやアンリさんのそれでは無かった。

もっとごつごつとして大きな手。

誰なのだろう、日本に居た時の人だろうか。

『ヤエ……無理はするな。嫌だったら、やめてもいいんだぞ……実験の最中に倒れたらどうするんだ？』

自分の声が聞こえない所為で、本当に自分が『ヤエ』なのかも不安になってきてしまう。

実験？ますますわからない。

相手の声が、少し低くくぐもり始めた。

『……お前が言うなら、止めないが……辛くなったらいつでも言うんだぞ』

声の主を頭を撫でられる。

だんだんと相手の顔が、姿が明確になっていく。

背が高く、少し強面な顔。

そつだ、この顔を見た事がある。

『……俺はお前の近くにいつもいる。……もしも止めたくなったら、お前を必ず迎えに行くからな』

無愛想だったその顔が、少しだけ微笑みを蓄える。  
今までに見た事のない、ハイネの顔だった。

頭痛が終わる。

あまりの激痛に気を失っていたらしく、目覚めると床に倒れていた。

怖いものでも見ていたかの様に、動機が激しい。

「……何……？今の……ハイネさん……？」

優しいなハイネの顔など、一度も見た事がない。

それなのに、何故記憶にあるのだろうか。

何故ハイネを覚えていなかったんだろうか。

実験とは？日本とは？迎えに行く？

……私は、誰？

「……何でまたここに来るんですか」

「き、来ちゃ悪いかよ」

無視。

今回で五十回目の無視だ。

ウォーレスは、込み上げる怒りをぐつと飲み込み、ダレットに近づいて行く。

「俺は王子だ、わかるか？俺の国でもある、だから教会にだって行っても良い。間違ってるか？」

「間違つてはいませんが、王子なのに護衛も付けず殺人鬼が横行する城下に来るのもどうかと思いますけど」

「う、うるせえ!」

思わず詰め寄ると、分かっていたかのようにダレットは一步後退する。

しかも嫌そうに顔を歪めて。

「お前にそんな事いわれたかねえよ! 何でお前に言われなきゃいけないんだ!」

「さあ……、嫌いだからじゃないですか?」

頭に重い岩でも落ちて来た様な感覚。

ずきつと心臓が傷つく、レベルではない。

落ち込むを通り越して、清々しいくらいだ。

はつきりと拒絶され、くらつと目眩が起きる。

「おつまえなあ……そういうのは、内に閉まっとくもんだろ……」

「言わなければ分からない事だってあります、貴方はこう言わなければいつまでも話しかけて来るでしょう?」

冷たい睨みにはもう慣れてる。

だが、何故かダレットに睨まれるとたじろいでしまう。

「じゃあお前も教えるよ、何で俺の事そんなに嫌うんだよ!」

「……これだから、王族も貴族も嫌いなんです」

深いため息を吐き、今度はぐつと詰め寄られる。

いきなりの接近に、ウォーレスの心臓はどきりと鼓動する。

近くで見ると、女らしくはないが、綺麗な顔をしているな、こいつ。

「貴方達は、言われなきゃわからないんですよ。自分で知ろうともしない、わかるうとしないじゃないですか。私に限った事じゃない、権力も金も暇も持て余してるくせに、何もしない」

「な……そこまで言う事ねえだろ!？」

「あの時だつて、ヤエさんが捕まらなかつたら……私達はずっとあのままだった!人以下の扱いをされ、十分な食べ物も貰えず、暇人の玩具にされて……ゴミみたいに捨てられる。今まで、どれだけの子供や身寄りの無い人がそうされて来たか……貴方は知らないでしょう?」

ヤエが奴隷商に捕まり、知り合いの貴族が探し出し、やっと捕まえた奴隷商。

それまで公にされる事の無かつた非人道的な連中を、貴族達は見えて見ぬ振りをした。

自分たちも所有する為に、娯楽として、労働力として。

王子である自分は、何故知らなかつたのだらう。

知らなきゃいけない事なのに、興味すら無かつた。

何も反論できない。

自分も、同じ様な境遇になる筈なのに、なっていないのだから。

「帰ってください。……こんな言い合い、している暇はないんです」

歯を食いしばり、ダレットは拳を握りしめる。

強く握ったその拳は、怒りでなのか、少しだけ震えていた。

46 嫌いだから(後書き)

ダレットとウォーレスの件は常にこんな感じになりそうです^^  
ウォーレスもこれを機に成長していくでしょう

## 47 男の相談

「お！オヤジじゃんか！なあ遊べ遊べ！」

「……オヤジじゃねえよ、クソガキ」

ダレットにキツイ言葉を浴びせられてから、早一時間。

放心状態で庭にいたウォーレスに、上機嫌なナキムが駆け寄って来た。

また脛を蹴ってはこないが、ウォーレスの服の裾を執拗に引っ張ってくる。

引っ張られた本人は、力無い罵倒を返す。

「ん？今日は元気ねえな！オヤジ！余計に付けてるぞ！」

「おめーは一段と元気だな……」

弱々しい声を出し、元気なナキムに引っ張られた。

どこかへ連れて行くとうとしているのか「早く歩けよー」とか「のろまー」と急かされる。

いつものウォーレスならば、「のろまー」と言われた時点で拳骨を落としている所だが、

今はそんな元気もない。罵倒だけで精一杯だ。

「何処いくんだよ、俺だつて暇じゃねえんだぞー……」

「そーだんだよ、そー・だ・ん！人に聞かれちゃ、ま、まずいからよ」

少しだけ頬を染めるナキム。

うわ、なんだお前気持ちわりい。

「着いた着いた、ここ座れー！」  
強引に花壇の縁に座らせられ、その隣にナキムがちよこんと座った。

もじもじと身体をくねらせ、言おうか言うまいか、ナキムは目を泳がせている。

「で？何なんだよ」

「……お、オヤジは好きな奴とか、い、いるか！？」

「……はあ？」

何を言うかと思えば、好きな人の事。

この前の様なからかいかと思っただが、ナキムの顔は林檎の様に真っ赤になっている。

そしてもう一度きよるきよると、誰もいないかと確認した。

「なあ！いるのか！？」

「……わからん」

「分からんって、何だよ！」

「何でだって言われてもなあ……、好きなのか友人としてなのかわからん」

俺は初心者だからな、と付け足すとナキムは興味津々に目を光らせる。

「ていうか何。お前、好きな女でもいるのか？」

「せ、責任転嫁すんな！」

いきなり振られて顔を真っ赤にしながら慌てるナキム。

より顔を赤くするので、「言葉がちげーよ」とデコピンを喰らわせた。

「で？誰が好きなんだ？」

「……トワ姉ちゃん」

思わず、はあ？と叫びそうになった。

トワトワトワ……頭の中を巡らしても、その名前は一人しかいない。

あの老婆の娘のシスター、トワだ。

「おつまえ……ませてんなあ！年上かよ！」

「いいだろ別に！トワ姉ちゃん優しいじゃん、美人じゃん！」

「まあ確かに美人だが……。ん？お前、幾つだ？」

自信たっぷりなナキムは、びしっと両手で数を表す。

一、二、三……七つかよ。

「初心者な俺でも言える、まだ告白はやめとけ。爆死するぞ」

「なんでだよ！大丈夫かもしれないだろ！」

「なら後十年待て、そうしたらトワももつと美人になるしお前だつてかつこよくなる。そうすりゃ、いくらでも口説けるだろ。ま、結婚はわからんが」

慣れないながらも、ナキムの頭を叩きあやしてみる。

今の勢いだと突然泣き出しそうになるかもしれない。

だが、ナキムは不服そうに顔を膨らまして、ウォーレスの足を踏みつける。

でもあまり勢いはない。

「お前つて、ユツカの事が好きなんじゃないのか？何かとユツカにべつたりしてただろ」

「……ユツカは妹だから、守るのは当然だろ」

「妹？にしては似てねえし……。血繋がってないだろ？」

「血なんか繋がってなくても、ユツカは妹だ！ユツカはすぐ泣くしどっかいつちゃうから……。俺が兄ちゃんになるんだ」

先程とは違う、えらく凛々しいナキムの顔に、思わずウォーレスは目を丸くする。

まだこんなに小さいのに、そんな責任を背負ってるのかよ。彼のしつかりした言動に、自分の兄をふと思い出させられる。

「……あいつもそんな感じなのかね」

「え？」

「俺にも腹違いの兄貴がいてよ、そりゃー俺よりも出来が良い訳。頭も良いし顔も良い、おまけに人から好かれやすい」

「オヤジにも兄ちゃんがいるのか！」

「まあな。……でも腹違いだろ？血の繋がりはねえのにいつもべたべたしてくるのが……不思議で仕様がなかった」

自分みたいにな人間に、完璧な兄がどうして目をかけるのか。それが兄としての責任とでも言うのだろうか。

全くの他人なのに、物好きな奴だ。

「……でもオヤジは、その兄ちゃん嫌いじゃないだろ？俺、もしユツカに嫌われたら……辛いな」

仮定の話なのに、ナキムは悲しそうな顔で俯いた。

何か言おうと思ったが、すぐにもの凄い勢いで顔を上げ、花壇の縁から立ち上がる。

「そうだ！俺、トワ姉ちゃんの手伝いあるんだ……いかなきゃ！じゃあなオヤジ！」

先程の元気の無さはどこへやら、気合いを入れたナキムは手を振って走り出す。

まともな相談もできていなかったが……ナキムはこれでいいらしい。

「おい。ナキム」

突如呼び止められる。

あまりの驚きに、ナキムは口を開けてこちらを振り向いた。

ウォーレスが自分の名前を呼んだなんて、いや、覚えていたなんて思わなかった。

「おめーみたいなチビが俺の心配なんてしなくて良いんだよ。だから、お前は自分の事だけ考えてろ。……がんばれよ」

我ながら臭い台詞を吐いたとは思っている。

言った後に妙に恥ずかしくなったので、何も言わず帰ろうとする  
と、今度はナキムが返事をした。

「ありがとなオヤジ！」

につと齒を見せて笑うナキムにつられて、ウォーレスも思わず微笑んでしまった。

47 男の相談（後書き）

男同士の相談回。

そしてさらつと衝撃の事実^^笑

教会の為なら、何でもやった。

「……ダレット・ガーゲルン、今日も来るのが早いな」  
彼女がこの商人と取引をする時は、いつも真夜中だった。

月もあまり見えない暗い夜に、身を隠す様にダレットは路地裏へ向うのである。

仕事の為には我慢しなければならぬのだが、いつも酒と汗の匂いにまみれた商人を、ダレットは酷く嫌っていた。

だが今日はとくに急がなければならない、早く仕事をしなければならぬ。

そうでなければ昼間からこの商人に会うものか。

「いつも時間前に来るな、よほど仕事が好きなのかい」

「……仕事をください。話してる暇はないんです」

無愛想に返すと、商人は忌ま忌ましそうに舌打ちをする。

手に持った酒瓶に豪快にあり、横から垂れる酒を拭う。

そして空になった酒瓶をダレットに向って放り投げた。

「……ゴミなら自分で始末してください」

「まあ待ちな。ほれ、ラベルに書いてある名前を見てみる」

言われるがまま酒瓶のラベルを見ると、有名な酒のメーカーの名前が刻まれている。

これが一体何だというのか、不満そうに顔を上げると商人は二本目の酒瓶に口をつけていた。

「その酒を運んで欲しい、本数は二本。簡単だろう」

「……報酬は」

「300万だ」

思わぬ値段に、眉をひそめる。

しかしまあこれも予想していた事だ。

彼女のしている仕事は、少なくともマトモではない。

「場所はドルス男爵の屋敷だ。門番には、『ドルス男爵への酒』  
とっておけば大丈夫だ。夕方前には必ず届ける、最近は騎士団の  
見回りが多いからな」

商人は手書きの汚い地図を渡し、臭い息を彼女の吹きかけた。

しかしダレットは嫌な顔せず、酒瓶を睨みつけている。

「気になるか？ 珍しく危険じゃないとも思っているだろう？」

「……まあ」

「じゃあ、本物をみせてやろう」

にやにやと笑みをこぼしながら、商人は二つの酒瓶を目の前  
に取り出した。

先程と同じ様に有名なメーカーの名前の酒、しかし先程よりもず  
つしりと重い。

見た目は何も変わらない酒であるのに、何がそこまで価値がある  
のだろうか。

「これは一体……」

「ゲンジユ草の酒さ」

ゲンジユ草。

第一族国から遙か北にある、薬草の名前だ。

すり潰し服用すると熱冷ましに聞く、至って普通の薬草である。  
酒にするというのは聞いた事がない。

「知ってるか？ ゲンジユ草の花を燃やすと快感を感じる事ができ  
るのを」

「……それって……」

「燃やした花の匂いは、人間の脳に幻覚を見せ快楽を味わわせる。だが、この国ではゲンジユ草の服用は禁止されてね。めったに使えないのさ。だが、燃えかすを酒に混ぜ少し煮詰めればほれ簡単。匂いよりは効果は薄いけど、飲むだけで快楽を味わえるって訳さ」

麻薬。

成る程、貴族はそれが目当てでこんなに金を出したのか。腐っている。

この国は、どこまでも腐り続けていく。

「まあこいつは、快楽ばかり与える良いモンでもない。特に匂いは、無臭でね。気分が悪くなったって気付かない。毎日でも嗅いでりゃ、その内頭ん中が可笑しくなるのさ」

「……どんな風にな？」

「そうさね、脳味噌が役目を果たさなくなるといえばいいか。麻痺を起こすのさ、それが酷ければ酷い程取り返しのつかない事になる」

そう言っつて、顎髭をこすりながら、商人は笑う。  
まるで楽しんでる様に。

「まあでも、最近は何もつきりゲンジユ草が少なくなっちゃってな……この酒もその分値が張るのさ」

「お金が貰えるなら、事情がどうであれ別に良いです。……教会の足しになるなら」

困った様に肩をすくめる商人、それを冷ややかな目で見つめるダレット。

ねえ、ダレット。貴女何をやっているの。

物陰から見ていた若いシスターは、震えながらも急いでその場から立ち去った。

48 教会の為に（後書き）

ダレットの裏の顔。

今回はシリアス回でした笑

49 国民(前書き)

長めです

ウォーレスの方から呼び出しがあるのは、久々の事だった。

書類と格闘中の際に呼ばれた時だったので、一層機嫌も良くなる。ウォーレスが自分から話しかけてくれる何て、いつぶりでしょう。アナベルは鼻歌を口ずさみながらウォーレスの部屋に向う。

彼が教会にまた抜け出したと聞いた時は心配だったが、ウォーレスの表情が変わっているので良しとしよう。

もちろん、良い意味で。

「……そのシスターはどうしたのです？ウォーレス」

部屋に居たのはウォーレス、そして若いシスターだった。

不安げに眉を潜め、潤んだ瞳でこちらを見上げる。

ウォーレスが行っている教会のシスターだろうか。

「アナベル殿下、突然の訪問御許してください。城下にある教会のシスターで、トワと申します。今回は、私がウォーレス様に無理を言って連れて行ってもらったのです」

「……何か、用事でもあるのですか？」

黙ったままのウォーレスを横目で見つつ、トワに問う。

終始不安そうな表情を見せ、震える自分の手をぎゅっと握りしめている。

「殿下。どうか私めの願いを聞いてくださらないでしょうか」

「願い？」

「……教会に、資金の援助をして頂きたいのです」

か細く聞こえた彼女の声は、少しだけ震えていた。  
静まり返った部屋の中で、彼女の溜息混じりの呼吸が響く。

「何を、言っているんです？」

「愚かな提案だとはわかっております……！神に使える身としてしてはならない事だとも……！ですが……もうこれ以上、子供達を苦しめたくないのです……！あの子が……ダレットが麻薬の斡旋を  
行い続けたら……もう元には戻れなくなります」

「そういう事を聞いているではありません、シスター・トワ」

ぴしゃりと言い放たれる。

アナベルの声音が一層低くなる。

ウォーレスに見せるいつものふやけた表情ではなく、成人の儀の  
際の公用の表情だ。

一国の王子として、彼は言葉を連ねる。

「私が一庶民の為に資金援助するとも思っていたのでしょうか  
？」

「だ、だったら俺が金を出す！俺があ教会を買う！」

「馬鹿な事を言わないでください、ウォーレス。シスター・トワ  
……教会の持ち主はあの貴族なのでしょう、ならば資金を援助でき  
ず土地を返したとしても何も問題はありません」

「そうしたら、ガキ達は炭坑に連れて行かれるんだぞ！？」

隣でウォーレスが血気盛んに叫ぶ。

彼が噛み付いて来るだろう事は、嫌でも予想できた。

「この国で、金の為に仕事をする子供がいなくても思っていま  
したか？親の借金、病気、孤児……生きる為には子供だろうが赤ん  
坊だろうが働かなくてはいけ無い。たとえそれが炭坑だとしても」

「それじゃあ、あんたは国民の貧困を見逃すって言うのかよ！」

ああいえばこう言う。

何を言えば、ウォーレスはわかってくれるのだろうか。

「見逃す訳ではありません、ただ奴隷商に捕まった子供達は働く以外の道は厳しくなる。学が無ければ、尚更……」

「国民を見殺しにするのかよ！国民を守るのが、王族なんじゃないのか!？」

最早、柔らかく諭す事は不可能だ。

溜息を吐き、今にも殴り掛かってきそうなウォーレスを睨みつけた。

トワは後ろで不安そうに祈っているのが見える。

「では、私からも言わせてもらいましょう。ウォーレス、答えてください」

「は……?」

「仮に、あなたの目の前に一人の農民がいるとしましょう。農民は近年起こった飢饉で、今日食べる食べ物も金もありません」

「それが、何だよ」

「農民は、あまりにも空腹な為に人から食べ物盗み結果的にその人間を殺しました。しかし腹は今日の分しか膨れず、目の前の貴方の言うのです。『このままでは貧困で死んでしまいます、どうかお金を御恵みください』。……貴方は、その人間にも国庫の金を与えるのですよね？大事な国民なのですから」

言葉が詰まる。

数秒黙っていただけなのに、アナベルは我慢できずに矢継ぎ早に質問を重ねて行く。

「生きる為に人を殺し、尚かつ金を要求する人間も国民です。この国にどれだけいるでしょうね、余裕ができると努力が疎かになる

人間という者は。その人間達の為に貴方は国の金を半永久的に与え、農民は腹が膨れて幸せ、貴方も幸せにできて幸せ。……そうして国は滅びるのです」

「な……そんな言い方……！」

「貴方が言っている事はそういう事です。国民全てを守るという事は、国民が何をしようとも目を瞑り『生きる為』だと理由付けをする事。国を犠牲にし、滅んだとしても『生きていれば何とかなる』……それで人間は腹が膨れますか？」

負の循環なのです、そうして腹を空かせた国民は奪い合い殺しあいを始め、最後には後悔する。

ああ、あの時頑張っていれば。ああ、あの時王子が金を与えなければ。

俺達は、もっと幸せになれたかもしれないのに。

そんな状況を想像したくもなかった。

だが、兄の考え方にも納得はできない。いや、したくはない。

しかし、それに反論できる程ウォーレスは考えをもっている訳ではなかった。

今あの子供達を何とかできればそれでいい、その何が悪いんだ。

「考えを改めなさい。これは、教会だけの問題ではないのです」

これからもずっと、そうやって生きて行くつもりですか。

大人になりなさい、一国の王子として。

アナベルは何も言わず、部屋を出て行く。

愚かな弟を、一瞥もせず。



49 国民(後書き)

ウォーレスまた叱られています。  
叱られてばかりな気が・・・笑

50 ありがとう(前書き)

ちよつと遅めです

「……どうしたんですか、殿下。そんなに難しい顔をして」

自室に帰って来たウォーレスは、子供の様に口を尖らせていた。納得いかない、気に喰わない、そんな事を言ってる様に彼は眉を潜めながら、溜息を漏らす。

教会に行っていたウォーレスを気にしていなかったのか、ヤエはいつも通りの態度で読んでいた本へ視線を戻した。

「アナベル殿下に、叱られたんですね？殿下、今度は一人でいつてしまふんですもの」

「まあ……うん」

元気の無い彼の返答に、さすがにヤエも読書を止める。すぐにこちらへ近寄って不安げに顔を覗き込んで来た。

「具合でも……悪いんですか？」

「……違う。……なあヤエ」

「はい」

「……アルケミラ家に……戻りたいか？」  
ぼそつと一言。

目を丸くしたヤエは、少し複雑そうな表情を見せる。  
素直に嬉しいとは思えないのだ。  
いきなりすぎて、わからない。

「俺、さ。知らなかったんだ、全然」  
一呼吸置く。

頭の中はひどくすっきりしていて、自然と言いたい事が浮かび上

がる。

「これから知らずにずつとこのまま生きて行くかと思っただら、ぞつとした。金持ちの人間もいれば、貧しい人間だっている。当たり前前の事なのに、俺、何も知らなかった。本当に……ガキだ」

「……殿下は、ちゃんとわかっていますよ」

それは、同情でも嘘でもない。

「お前を城に連れて来たときもそうだ。母さんを殺したあいつが、どうして純血のお前を殺さなかったのか……すごく気になった。ヤエが繋がっているなんてある訳ない事ぐらい分かってたのに……何も知らない癖にムキになってお前を城に軟禁した」

『あいつ』とはハイネの事だろう。

悪い、と頭を下げられて、慌ててヤエは首を横に振る。

それでも頭を上げないウォーレスに、思わずこちらも謝りたくなってしまう。

「か、顔を上げてください殿下！ 気にして何ていませんから！」

「……でも」

「本当です、私殿下といて楽しかったですよ！ そりゃあ、最初は殿下わがままで俺様でしたけど……」

精一杯笑いかけると、のろのろとウォーレスは顔を上げる。

最初は不服そうだったが、目が合うなりくすつと笑った。

「そうか。……俺も同じだ」

流れる様な動作で、彼の腕がこちらへ伸びる。

腕を引っ張られ、自分の身体がウォーレスの腕の中にすっぽりと収まった。

抱きしめられたと気付くまで、そう時間はかからなかった。

いきなりの事で驚いたが、最初に強引に引き寄せられたときよりも、遥かに丁寧で優しく抱きしめられる。

「殿下……？」

「お前といて楽しかった。俺の我が儘に、ずっと付き合ってくれてありがとう」

素直な感謝の言葉に、少しだけ目の奥が熱くなる。

何だかウォーレスじゃないみたいで、少しこそばゆいけれど。

「王子なんて死にたくなる程嫌だった、望んで王子なんてやっていた訳じゃないのにも誰かに嫌われるからな。でも……俺は、責任がある。王子として、あのガキ達や国の人間を……守らなきゃいけないんだ」

抱きしめる力が少しだけ強くなる。

抱きしめられたヤエは、落ち着いた様子で返事を返す。

何だ、俺が抱きしめても、照れてくれやしなないじゃないか。

「お前がそのきっかけをくれたんだ、ヤエ。感謝してもしきれない」

「そ、そんな……私、そんな大層な事なんてしていません」

いいんだ、そう呟きウォーレスはヤエをそっと離す。

彼女の肩を掴み、視線を合わせ、ただ見つめる。

「わからなくていい。でも俺はそんなお前がす……」  
ぴたりと言葉が止まる。

言うつもりなんて無かった、でも今は言える気がした。

けれどそれは、自信から来るものではない。

言おうとした言葉を打ち消す様に、頭を振り、そして笑う。

「……そんなお前と、友達になれて良かった」

「……殿下」

ああ、こいつは本当に泣き虫だ。

もう今にもぼろぼろ泣くに違いない。

目が潤んで、頬を赤くして、本当に幼い子供みたいだ。

「お前は帰りたいたい所に帰れ、もう縛ったりはしない」

「……はい」

涙を必死に堪え、ヤエは頷く。

唇を噛み締めて、火照る頬を荒っぽく叩く。

嬉しい事なんだ、泣いてちゃいけない。

「ああ、でも今日の夜ぐらいは付き合えよ？」

「夜……ですか？」

「そうだ。夜、こっそり教会に行く。昼間は兄貴の見張りが酷いからな」

子供みたいに歯を見せて笑い、ヤエの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。主人の命令を、もちろん無視する訳にはいかない。

頑張って元気よく返事をする、ウォーレスも勢い良く背中を叩いて来た。

会えない訳じゃない、彼が良ければまた一緒に教会で会える。寂しいけれど、でもこれでいいんだ。

けれどその夜、教会は赤い炎に包まれた。

50 ありがとう(後書き)

王宮編もクライマックスに近づいてきました。  
後もう少しお付き合いください

51 私達の家(前書き)

今回、かなり長めです。

それに加え、R15ではないですが、もしかしたら不快に思われる方もいるかもしれませんので、ご注意ください。

51 私達の家

白い壁の教会は、赤い炎によって煌煌と照らされて、酷く美しく見えた。

「ごうごうと鳴る風の音、じわじわと周りに広がる炎の熱。赤く見えたり橙色に見えたりと、常に揺らぎ動き続ける炎が、教会を覆っていた。

月の見えない夜なのに、炎の所為でとても明るく見える。教会の半分は既に燃え落ち、教会の形すら見えない。燃え盛る炎の中、子供達は未だ教会の中で出口を探していた。

「ダレット！ユツカ！ナキム！他のみんなも、ちゃんといるわね！？私から絶対に離れないで、ハンカチを持っている子は鼻と口に覆いなさい！」

青ざめた顔のトワが、苦しそうに咳き込みながら叫ぶ。外よりもまだ内部は炎が少ないとはいえ、煙がある以上あまり大声は出せない。

それでも怖がる子供を一人抱え、もう一人と手を繋ぎ、できるだけ炎の無い所へと逃げてゆく。

絶対に死なせたくない、絶対に。

「ダレット姉ちゃん、お、俺達どうなるんだよお！」

泣きそうな声をしたナキムが、ハンカチを当てながら叫ぶ。

就寝中の出来事だった、子供達が熱いと叫んだ時に初めて火の手が上がっている事に気付いた。

どうして、どうして教会が火事になるのか。

誰が、どうして、いつやったのか。

どうしていち早く私は気付けなかったんだろう。

考えようとする程頭が混乱し、上手くまとまらない。

必死で恐怖を押し込め、ダレットはナキムの手を握り微笑む。

「大丈夫、私達がついています。ナキムは煙を吸わない様に、ずっとハンカチをあてているんですよ？」

「う、うん……」

不安や恐怖は伝わる、震えてなくても握っている手からナキムへ伝わっているだろう。

それでもダレットはめげる訳にはいかなかった、この子達を逃がさなければ。

「トワおねえちゃん！あそこ！」

トワと手を繋いでいたユツカが、左の方向へ指差す。

赤く照らされた部屋の中で、炎の少ないドアが見える。

裏庭に出る為の扉、早くでる事に超した事は無い。

ナキムの手を強く握り、ダレットは小走りにドアへと向う。

だが。

「おお……！まだ子供達がいたんだね……！」

出口に見えるのは、あまりにもこの場には不似合いな人物だった。

大きい腹とキラキラ光る宝石の目立つ貴族、カフである。

「貴族様……！？どうし、てこんな所に……！」

咳き込むトワの顔は、突然の事に驚きを隠せない。

燃え盛る炎をものともしないカフは、まるで肉親の様に大きく手を開き

「こちらへおいで、子供達。助けに来たよ」

と、この場に不似合いな笑みを蓄える。



わなかつたのかカフは唸り始める。

あああ、うとう、地を這いつくばる様な声を出したかと思えば、今度は自分の髪を掻きむしる。

助けて、来るな、貴様等どこかへ行け……途切れ途切れに聞こえるそれは、経験の無い彼女でもはつきり分かった。

この男は、麻薬中毒者だ。

「は、早くしないと、足りなくなる……！炭坑に、子供を送る、でないとげ、ゲンジユ草がああ！」

「この人も、ゲンジユ草を……！」

思わず後ずさりするダレットを、カフはざらりと睨みつける。濁ったその目は、彼女が今まで見た誰の目よりも汚かった。

「げ、げ、ゲンジユ草が、あるんだあの奥に！私は、早くそれを、手にいれるいれたいんだ！だ、から早く子供を、寄越せ！」

「嫌です！貴方の私欲の為に、子供達を渡したりはしません！」

「ふ、ふふふ、ふざけるなよ小娘があ！あれの価値をし、知らないからそんな事がいえるのだ！」

引き攣った顔のカフは、今度は自分の頬まで引つ掻き始めた。

赤い線が引かれ、その痛みすら感じないのか、聞き取れない言葉を吐き続ける。

「ゲンジユ草は、炭坑の奥になんかない！もうこの国には、ゲンジユ草は一つも……！」

「あるんだよ馬鹿が！！こいつが、教えてくれたんだよ！炭坑を掘れば、ゲンジユ草が沢山あるってなあ！」

そう言ってカフは隣を指差す。

勿論何もない、あるとしたらそれは彼の幻覚である。

幻覚に幻聴、熱さも痛みも分からぬ麻痺……もうこの人は救えない。

「わ、渡すんだ。渡さないと、こ、殺してやる！」  
徐に取り出したのは、大粒の宝石を鏤めた短剣。  
鞘を抜き、美しい銀色の刃をこちらへ向けた。  
そして、構えようとダレットも腰元の短剣を取り出そうとした瞬間である。

カフが突然、短剣を振り回しながら突進してきた。  
醜い叫びと共に突進してきたカフの短剣は、  
避けようとしたダレットの腕をかすめた。  
鋭い痛みと、その部分への熱が生まれる。

「はやく、はやくするんだ！子供もごろすぞ！」  
もう彼の声をマトモに聞く事はできない。

痛みに耐えながらも、ダレットは彼が塞いでいた出口へナキム達を誘導する。

子供達を逃がすには、今しかない。

「トワさん、早く子供達を外へ逃がしてください！」

「だ、ダレット！あなたはどうするのよ！」

「いいから早く……！」

困惑するトワの背中を押し、出口へと押し込む。

外も危険じゃないとは言い切れないが、この男がいないよりは幾分マシな筈だ。

「待てよお！お前等……！」

銃声が背後で鳴り響く。

振り向くと、カフは一丁の銃を真上に向けていた。  
脅しだったのか、こちらへ銃を向けていないのは奇跡だっただろう。

「逃げるなよお！ゲンジユ、草の為に、働くんだよ！」

今度は銃をこちらへ向け、じりじりと近寄って来る。だが、ダレットは決してそこから動こうとはしなかった。銃を恐れていない訳でも、ムキになって対抗したい訳でもない。子供達を守る為には動いてはならない、ただそれだけだ。

「ど、どけ！どけどけ！どくんだ！」

「絶対に、どきません……！」

発狂。

カフはぶるぶると震えるながら、歯をがちがちと鳴らしながら、叫び続ける。

怖い。

今日の前に居る人は、人じゃない。

いつ撃つて来るかもわからない、何がきっかけで怒るかもわからない。

こんなのを、どうやって対処すれば良いんだ。

怖い、怖い、どうしてこんな事になってしまったの。

誰か、助けて。

「……おい！！何やってるんだ、お前！！」

背後の声、聞き覚えのある嫌な声。

それでも今この状態にとって、彼の声は救いの声でもあった。

「ウオ、ウォーレス、王子……！！？」

「銃……！！？……おいお前、ダレットに何するつもりだ！」

思いも寄らない人物の登場に、ダレットはただ目を丸くする。けれどすぐに、険しい表情に戻った。

「王子！どうしてこんな所に……、早くでていって……」

「う、あああ！あ、あ、悪魔あ！」

ダレットの声を遮ったのは、銃を構えていたカフだった。ウォーレスの顔を見るなり、顔を引き攣らせ、一気に青ざめる。しきりに彼を悪魔と吐き付けて、絶叫にも似た声を発し、出口へと突進して行った。

「お、お前ちよつと待て!!」

「うわああどけよ悪魔めえ!」

もの凄い勢いでダレットとウォーレスを突き飛ばし、外へと逃げ出した。

彼がウォーレスの姿に何をみたのだろうか。

「ダレット!俺達も出るぞ!」

腕をいきなり強く引っ張られ、足がもつれる。

緊張が解けたのか、もう足に力はない。

転びそうになったダレットを、反射的にウォーレスは受け止めた。何か喋る前に、ウォーレスはダレットを抱き上げて、出口へと向って行く。

「あ……!!」

抱えられながら、横目に燃え続ける教会を映す。

私の家が。

私達の家が。

その時初めて、ダレットの目から、涙が流れた。

51 私達の家（後書き）

ウォーレスの一番の見せ場でした  
その割に、特別かつこよくなかったのでウォーレスらしくて良かったです笑

52 黒い男(前書き)

少し長め+少々残酷描写アリです

燃える教会を背に、ウォーレスはダレットを抱えながら座り込んでいた。

後ろから伝わる熱、焦げ臭い匂いが離れた所まで臭って来る。

黙り込んだダレットをひしと抱きしめたまま、ウォーレスはゆくりと息を吐いた。

「し、死ぬかと思った……！くそ、喉が痛え……」

情けない声を出し、喉を抑え咳き込んだ。

かつこ良く助けるつもりが、これじゃあかつこわりいだけじゃねえか。

……いや、助けるのにかつこいいも糞もないか。

だが今もまだ震える自分の足が、酷く情けなく見えた。

「……そうだ！だ、大丈夫かダレット！」

抱きしめていたダレットを引きはがし、慌てて確認する。

しかし、確認する前に、彼女は力無く倒れ込む。

咄嗟に彼女の手を掴んだが、ダレットはだらりとしたままである。

こいつ、こんなに腕細かったか？

「お、おい……」

「私達の家が……！……私の、私の所為だ……！もっと、もっとお金を稼いでいれば……、あの時断ったから……！」

「あの時？」

涙を流し、嗚咽を零す彼女の姿は、いつもよりも小さく見えた。

何か声をかけようにも、何を言えば彼女が泣き止むのか、ウォーレスには何一つわからない。

「あの時……、あの人に……か、買われていれば……、こんな事には……！」

「買われる……？お前……まさか」

「殿下！！ダレット！大丈夫ですか！？」

声を遮ったのは、血相を変えたヤエだった。

こちらへ駆け寄り、すぐさまダレットを抱きしめる。

もう大丈夫だよ、とひたすら呟く彼女の方が小刻みに震えていた。

「ヤエ、俺もダレットも大丈夫だ。あいつ……あのデブは教会から出た後どこに行った！？」

「あ、あの貴族の人ならすぐにどこかへ逃げて行きましたけど……」

「くそっ、今から騎士団を呼んでも間に合わねえか……恐らく、国外へ逃げるつもりだろうな」

立ち上がったウォーレスは、辺りを見渡し、険しい顔でヤエを見直す。

「お前はエドガーを呼んでこい、ヤエ。今は、あいつは確か巡回中だったと思う……あいつならお前の言う事も聞いてくれるだろ」

「わ、わかりました……！」

本来なら自分が行く所だろうが、今ここにヤエ達を残しておく訳には行かなかった。

奴隷商と言い、この火事と言い、今はこの国で何が起きるかわからないのだ。

それに、今のダレットを放っておけない。

城の方へ帰って行くヤエを見送った後、項垂れるダレットの肩をつかみ無理矢理立たせた。

「しっかりしろ、ダレット！この火事は、お前の所為なんかじゃ

ない！」

「だけど、だけど……私が、あの人の言う事を聞いていれば……！」

「お前が身売りした所で、今の現状は本当に変わるか？そんな事、わからないだろ？あの糞野郎が、裏切る可能性はゼロじゃないんだぞ」

頭を振り、でもでもと反抗し続けるダレット。

彼女の中で、どれほどの罪悪感が渦巻いているのだろうか。

「……お前は、何でもかんでも自分で解決しようとしているんだよ。ヤバい仕事だって……お前、飯食う暇も無くしてやってたんじやねえのか？」

「それは……」

「俺が教会に行った時だってそうだ、お前……あの男に立ちふさがってただろ……それがどんな事をしているか、わかってたのか……？」

ウォーレスの声が少し掠れる。

ダレットの肩を掴む手から、震えが伝わって来る。

ゆっくりと顔を上げると、彼の顔は悲しげに歪んでいた。

「あんな炎の中で、そんな怪我までして……銃を持った男に立ち向かうって事が……どれだけ、危険か……お前、死んじまう所だったんだぞ……！？」

彼の泣き顔は、初めて見た。

面と向って『嫌い』と言った時も、平気そうだったのに。

自分の為に、何で泣くんた。

「俺は……、俺は、お前が死んだら悲しい」

一筋、また一筋と彼の頬を涙が滑る。

子供みたいに顔をぐしゃっと歪め、鼻をすすする。

「お前に、幾ら嫌われても無視されても……俺は、もう人に死んで欲しくないんだよ……」

目をこすり、涙を拭う。  
弱くなった言葉尻は、ダレットの心に深く突き刺さった。  
彼は、誰かの死に遭遇したのだろうか。

「ご、ごめんなさい……貴方に、迷惑をかけるつもりじゃ……」  
「迷惑じゃねえよ……馬鹿野郎……お前、本当に馬鹿だよ……」  
悪態を吐きながらも、ウォーレスはもう一度ダレットを抱きしめる。

強い力で抱きしめられた所為で、少し息苦しい。  
けれど、何故か拒絶しようとは、思わなかった。

「え、偉い事だ……！遂にやつちまった……！！」  
暗い夜の道を、太った貴族がもの凄い形相で駆けてゆく。  
汗まみれのその顔は、禁断症状の黒いクマがにじみ出ている。  
路地を右に、左に曲がりながら、カフは広場近くまで辿り着いた。  
体型と走り慣れていない所為で、もう足は動かない。  
荒い息が、静かな夜に響く。

「お、俺は何をした……！？気がついたら、あそこに……殿下もいた……！ああ、俺は何て事を……！」  
頭を掻きむしり、顔を引き攣らせる。  
王子の友人に手をだした、しかも恐らく放火もした。  
紛れも無い犯罪者である。

「に、逃げるしかない……！早く金を……！」  
「もし、そこの御方」

ふと、誰かに呼び止められる。  
誰もいない道に、誰かの声。

ゆつくり後ろを振り向くと、黒いローブを頭から被った人物がそこに居た。

背丈は高く、ローブの為に体型はよく見えない。

声からして男であるだろうが、……それにしても酷く消え入りそうな声だ。

「なつ、何者だ!？」

「私はただの物乞いです……それよりも貴方は、貴族様でありますか？」

ふらふらと身体を揺らしながら、喋る黒い男。

少し警戒もしたが、こんな男は教会にはいなかった筈である。

「そ、そうだが」

「ならば、貴族様は何故この様な時間に一人でいらっしゃるのです?……何か、あつたのでしょうか?」

黒い男は、ひたひたと音を立てながらこちらへ近づいて来る。よく見ると彼は裸足だった。

「誰かに追われている……私にはそう見えます。違いますか?」

「そ、そうだ!俺は、罪を着せられて今追われているんだ!」カフの頭に悪い知恵が働く。

自分が放火した所は、まだ誰も見ていない筈だ。

証拠なんてありはしない。

ならばこの物乞いに罪を被せれば……

「そう、です、か」

黒い男が、一瞬だけ笑った。

顔は見えないのに、笑ったのだ。

そして気がついた時には、カフの目の前に黒い男がそびえ立ち、

彼の太った左胸を、長剣で貫いていた。

「会えて、よかったです」

黒い男は、ゆっくりとその長剣を引き抜いた。

## 52 黒い男（後書き）

でしたー、遂に黒い男登場です。ここまでかなり長かった・・  
登場早々、危険人物ですが一応・・重要人物ですね。

そして、王宮編は次回でラストです。

区切りを付けたいので、近々投稿します^^

教会の火車から、一週間程経ったある昼下がりに。

城の出入り口にある石橋の前で、ヤエはふと立ち止まった。

後ろで見送りをするウォーレスとアナベル、そしてゲルダの方を向き直す。

「見送り、ありがとうございます。アナベル殿下まで来てくださるなんて思いませんでした」

「貴女には随分苦勞させてしまいましたからね、せめて見送りぐらいはさせてください。今までご苦勞様でした、ヤエさん」

穏やかなアナベルの微笑みは、いつもより三割増しに輝いている。キラキラとしたオーラでも出ていそうな彼に、ゲルダは小さく肘で小突いた。

「こら、殿下。その顔で何人女の子をひっかけたんです？ヤエちゃんだつて困りますからね」

「私はそんなつもりはないんだけど……」

不満そうにアナベルは唇を突き出す。

何だか子供みたいだ。

「はいはいそうですね。……ヤエちゃん、今度遊びに行くからね。だからヤエちゃんも遊びにくるのよ？」

「そ、それは難しいかもです」

和やかな雰囲気の中で、ウォーレスだけが暗い表情を浮かべていた。

ここ最近の騒ぎが無事終息し安心していたかと思えば、内心彼は複雑でもあったのだ。

火事の日の翌日、犯人と思われたカフが路上で死体となって発見された。

死因は刺殺、左胸以外にも複数の刺し傷が見つかったと言う。殺人鬼の仕業だという理由で、麻薬中毒や事業の失敗、人身売買などのエステム家の事情が暴露され、

一週間の内にエステム家は没落。殺害されたのは自業自得の事だと言われる様になった。

予想はできていた事だったが、これを望んでいた訳ではなかった。ましてや当主が殺されるなど……犯人といえど気持ちが良いものでもない。

「ほら、ウォーレス。貴方も何か言う事があるでしょう」

「え、あ、ああ……」

アナベルにつつかれ、複雑な表情を見せるウォーレス。

気恥ずかしそうに頭を掻いて、「あー、その」と口ごもる。

「その、あれだな。お前が居なくなると、やっぱり寂しいな」

「また会えますよ、同じ国にいるんですし」

「それもそう、だな」

はははと乾いた笑いを見せ、ガラにも無い言葉を並べているので思わず吹き出してしまふ。

いつもならそれに対して拳骨やら頬をつねられたりやらあるのだが……今回は違った。

「でも、俺……あんまり城からはでなくなる。ダレット達の見舞いには、できるかもしれねえけど」

「何か、やるんですか？」

「勉強するんだ。俺、この国についてもっと勉強するんだ。王子とっして」

はつきりと答えたその言葉に、不満や諦めは何一つない。

彼の顔は、先程までの不安そうな色は見えていない。

「今回の件で、反省した。俺は、全然何も知らなくて……何もできなかつた。奴隷の事も麻薬の事も……俺は、王子としてできる限りの事をあいつらにしてやりたいんだ。もちろん、国民にも」

「……殿下」

「……でもまあ、第二王子だからな。自由もあるけど、権力も兄貴よりは無いし……移民の髪の俺なんかがでしゃばっても悪影響がもしれねえけど……やってみたいんだ」

王子として、ウォーレスが成長すれば、それに並行して嘲笑も増えるだろう。

ほらまた、移民の血の入った第二王子が、何か始めている。

第一王子の真似事でもしているつもりなのね、無理だと言つのに。

それらの声に、彼は立ち向かわなければいけ無い。

教会の子供達の為に。

ダレットの為に。

「悪影響なんてないです、殿下」

ウォーレスの手をそっと握りしめ、ヤエはこくりと頷く。

「殿下なら必ずできます、信じています。会えなくても、私はずっと殿下の味方ですよ」

いつか、誰かに言われた言葉が自然と口から漏れる。

自分が言つと思わなかつたけれど、これで彼が安心してくれるならば、喜んで言おう。

「……ああ、お前がそう言ってくれれば、嬉しい」  
優しげに微笑し、ウォーレスは少し腰を屈める。  
そして彼女の手を口許へ寄せ、手の甲に唇を落とす。  
目を丸くしたヤエを見て、愛おしさが込み上げる。  
同時に生まれる物悲しさは、必死で押し込めた。

「じゃあな、ヤエ」

次に会えるのは、彼女が本当に幸せな時だろう。

53 別れ（後書き）

すみません！遅くなりました！><  
近々といいつつこんな間が・・・いや、忙しくて

なんやかんやで王宮編終了です！

最終章・・・といたかったのですがすみません、あともう一章増えます

次章は奴隷商編くらいの短さですが、必要だったので・・・嘘つきですみません；；；

番外編も、次章前か次章後に載せたいと思ってます！もう少しお待ちください！><

久々に帰るアルケミラ家の門は、不思議と大きく見えた。

「……………やっと帰って来れた」

ふつと息を吐き、ドキドキと高鳴る胸をぎゅっと掴む。

黒く磨かれた門の前で、いつ入ろうか、勝手に入っていいのか、そんな事ばかり考えながらも十分はそこにいた。

帰りがかったのは本心だが、いざ帰るとなるとやはり緊張してしまふ。

いつも普通に暮らしていたのが……………嘘みたいだ。

「戻って、よかったのかな」

自分で呟いて、気が沈む。

王宮のドタバタで忘れていたが、この家の人々にはあまり良く思われていなかった。

今更帰った所でまた嫌われるかもしれない。

それに、ルカとの約束も。

「……………はいりにくいなあ」

「おや、ヤエじゃないですか。そんな所で何をしてるんです」

恥ずかしい独り言を漏らした瞬間、目の前にじょうろを持ったガイルがひよっこりと現れた。

思わず口を開けると、「何してるんですか」と嗜められた。

「まったく……来るなら来ると、前もって連絡するのが常識でしょう。花壇の手入れをしている途中だったというのに」

「すみません……」

ぶつぶつと文句を吐き、ガイルは手についた泥をタオルで拭う。髪や服の身だしなみを整えながら屋敷の中を歩く様子は、相変わらずといった所である。

「あ、あの何か変わった事とかありましたか？」

「貴女がいなくなった所で仕事が増える事はもちろんありませんでしたよ、いたっていつも通りです」

「はあ」

「まあ、強いて言えばアンナがしょっちゅう泣き言をいつていたくらいでしたね。良い見物でしたよあれは。ですが、ルカ様にご心配をかけた事を罪が重いですよ、ヤエ」

刺のある言葉なのに、ちっとも嫌にならない。

嫌みを言うガイルでさえ懐かしく思え、あらぬ期待までしてしまう。

ガイルさんも、心配してくれていたなら嬉しいな、なんて。

「すみません、もうどこかにいなくなったりしません。心配もおかけしません」

「……何にやけてるんですか貴女は。だらしない」

指摘されて思わず頬を抑える。

ガイルも、思わぬ彼女の様子に呆れ顔を見せた。

こちらを一瞥し、やれやれとでも言いたげに眉をひそめる。

「まあ、そう思うならば良いでしょう。うじうじして後ろ向きな娘だと思っていましたが……成長した様で安心しました」

そう言っただけでガイルに頭を撫でられる。驚いた顔で見上げると、彼はもっと先へ歩いていってしまった

る。

嬉しさで更ににやけると、「早く来なさい」と急かされた。

ガイルはもうとっくに、ルカの部屋の前まで着いてしまっていた。

「いいですか、くれぐれもルカ様の前で号泣なんかしたらいけませんよ。困るだけですから」

「わかってますっ」

もう一度ネクタイを直し、ごほんと咳払いをする。

ガイルがそつとドアノブをひねり、ゆっくりとドアを開く。

そうだ、ここにはルカさんがいるんだ。

やっと会える、やっとマトモに会える。

覚悟を、彼に伝えられる。

……が。

「ルカ様！ずっとお慕い申しておりますわ！」

扉を開けた瞬間、可愛らしい声がヤエの耳に飛び込んで来た。

余りにも勢いのある声に、ガイルもヤエも驚いて目を丸くする。

部屋にはこの家の当主であるルカと、もう一人長い赤髪の少女がいた。

しかも、少女はルカに嬉しそうに抱きついた様子で。

おまけにルカは驚いた様子で固まっている。

「ルカ、さん……？」

「ルカ様！私、頑張って貴方の立派な妻になってみせますわ」

可愛らしい笑みを零した後、少女は勢いのままルカの唇にキスを

した。

54 キス（後書き）

新章突入！

それと共に修羅場確定（笑）  
そしてガイルも久々登場です

55 優柔不断(前書き)

長めです

突然の事で、頭が真っ白になる。

今までの出来事の、遙か上をゆく衝撃が彼女の頭の中で駆け巡っていた。

美しい見知らぬ少女のキスシーンを目の当たりにする事なんてそうないだろう。

それも、ルカとのキスシーンで。

「な、な、なにをしていらっしやるのです！！マトリカリア様！！」

誰よりも先に、真っ青になったアンナが悲痛な叫び声を上げる。

キスをする少女をひっぺがし、放心状態のルカの目の前に立ちふさがった。

少女は不思議そうに目を丸くし「口付けですわ」と正直に返事をする。

「く、口付けて……！結婚もなされていない淑女のする事ではございませんわ！」

「いいじゃない、もうすぐ結婚するんですもの」

さも当たり前かの様に答え、ふふつと微笑んだ少女はこちらを一瞥する。

固まったヤエを見、その後にガイルの方へ視線を映し、満面の笑みをたたえながらこちらへ身体を向けた。

「初めまして。貴女がルカ様のご友人のヤエさん、ですわよね？」

「……え、あ、その」

「私、マトリカリア・バウムガルドと申します。今日でルカ様の婚約者になりました。よろしくねヤエさん」

そう言うなり、少女マトリカリアは嬉しそうにヤエに抱きついて来た。

ぎゅっと強く抱きしめられると、花の香りがふわりと鼻孔につく。自分も抱きしめられるという予想外の展開に、ヤエは耐えきれずガイルに助けを求める。

しかし、彼はというとマトリカリアをじっと見たまま反応一つしない。

悲しそうな瞳が、彼に不似合いだった。

「……マトリカリア様は、挨拶する時は誰にでも抱擁をするのですよ。ヤエ」

しばらくして、ようやくガイルが助け舟をだす。

マトリカリアは同意する様に頷き、ヤエからすぐに離れた。そしてガイルにも抱きつこうと近寄ったが、ガイルはするりと彼女から遠ざかり、すかさずヤエの腕を掴む。

「ヤエ、さっそくですが仕事があります。それではルカ様、マトリカリア様失礼します」

「え？ちよ、ガイルさん？」

「マ、マトリカリア様！マトリカリア様のお部屋へご案内致しますわ！」

「あら、ありがとうアンナ」

彼に引きずられる様に引っ張られ、部屋から連れ出された。

アンナも焦りながら、マトリカリアをルカの部屋から出そうと画策している。

笑顔の似合うかわいい子。

ルカと並べばさぞ美しい恋人同士になるだろう。かてっこない、こんなのおんまりだ。

そして、ルカの部屋にはルカ以外誰もいなくなった。  
やっと我に帰ったルカは、不安げに眉を潜め、自分の唇にそつと触れる。

今、何をされたのか。

そしてそれを見ていたのは……

「みーちゃったみーちゃった」

「ア、アンリー!!」

にやけ顔のアンリが、ゆっくりドアを開けてこちらを覗いている。  
不気味な声で笑ったかと思えば、思いっきりルカの背中を叩く。

「おめーは、随分とモテモテじゃねえの？積極的なお嬢ちゃんだったなあ」

「や、やめてくれよアンリ！僕は別に……」

キスされた映像が甦る。

意識していないのに、自然と顔が赤くなってしまっ。

こういう事は、慣れていないのに。

「ふーん、そうかい。……じゃあ、お前はどっちが大切なんだ？」

「それは！もちろん……ん」

「勿論？」

「……ヤエ、だけど」

言葉が詰まる。

断言しようとしたのに、できない。

「……ルカ、お前の悪い所だぞそれ」

「え？」

「お前は好きなものは好き、嫌いなものは嫌いってはっきり言えないんだ。本当に好きなのに、あの嬢ちゃんを悲しませたくないからキスされても何にもいわないんだらう？」

直後に額に痛みが走る。

どうやらアンリにでこぴんを喰らわせられたようだ。

しかし、自分の本心を見抜かれた所為で、そうされた事にすら反論できない。

「それは……、彼女はお世話になっている人の娘さんだし……彼女が好意を持ってくれているのに、無下にもできないし……」

「……おい」

「僕は当主だけど、結婚に関しては我が儘は言えないんだ……。僕が父さん達から当主を引き継いだ時も、侯爵殿達からは世話になってるんだし……！」

「おい、ルカ」

「ヤエも大切だけれど、でも、マトリカリアは……全てを投げうって僕の婚約者になってくれた訳だし……」

「いい加減にしるよ、お前」

突然、ルカの胸元をアンリが乱暴に掴んだ。

驚いて顔を上げると、アンリの拳がすぐに右頬へと飛んで来る。

鈍い音が響き、痛みを感じる前にルカは床に投げ出される。

起き上がるうとするが、今度は左頬を殴られた。

「あ、アンリ……！？」

「何いい子ぶってんだよお前は！自分が何言ってるのかわかってんのか」

激昂するアンリを、初めて見た気がした。

痛みで怒りがふつつつとやってくるが、原因が自分にある事は十分わかっていた。

「お前のそういう態度が、あの嬢ちゃんもヤエも蔑ろにしてるんだろ！？無下にできない？だから結婚しても良いって訳か！？」

「違う！僕は……僕は……！」

「だったら何ですぐにヤエを追いかけないんだ！お前は同情してるつもりなんだろうが、お前は結局ヤエに告白する事が怖くてやりたくねえだけなんだろう！」

詰め寄られたアンリの顔が、怒りで歪む。

彼の言っている事は、正しい。

力任せだけれど、僕よりも僕を分かっている上で言っている事だ。僕は、それに応えなければいけない。

「ち、ちが……」

「違わねえよ……！」

けれど僕は、ヤエを幸せにできない事ぐらい、わかっていた。

55 優柔不断（後書き）

今回のタイトルは悩みましたがやはりコレで^^  
ルカの良い所は悪い所と同じ回、です（笑

56 本音(前書き)

ちよつと長めです

「一緒にお茶でも飲みませんか？ヤエさん」

今から十分前。

ガイルの手伝いをしていた時、笑顔のマトリカリアにそう誘われた。

思わず頷いてしまったのが失敗であった様で、彼女の勢いに負け気付いたら庭園の茶会用の椅子に座っていた。目の前には少し大きめの丸テーブル、目の前には優雅に微笑むマトリカリア。

テーブル上にはいつの間にか用意されていた、ティーポッドにティーカップ。

鮮やかな彩りの美味しそうなケーキが少量乗ったケーキスタンド、とまるで外国の茶会にいるみたいである。

……いや、外国の茶会なのだが。

「私、ずっと貴女と二人でお話したいと思っていましたの」  
側にいたメイドが、ティーカップにゆっくりと紅茶を注ぐ。  
メイドを下がらせ、絶えず微笑みを蓄えマトリカリアはティーカップを手にする。

優雅にティーカップを口許へ運ぶ彼女の一つ一つの仕草は、貴族階級のそれなのだと思うせる。

短い間ではあったが、一応王家には仕えていたのだ。

ウォーレスやアナベルの仕草を見てきたので、ある程度はそれなりの仕草もできると考えていたが……

「そんなに緊張なならないで、ご友人との茶会の様に接してください」

「ぎこちない動作は、やはりバレてしまうものである。」

「あ、あの……お話、つて」

慣れない手付きで紅茶を飲み、必死に喉を潤してみる。

綺麗な人と二人きりでお茶会、という状況に加えて今のヤエにとってはマトリカリアは気まずい存在でもあった。

勝手に浮かび上がる、ルカとマトリカリアのキスシーン。

婚約者、キス、結婚、侯爵の娘。

考えたくない事まで次々と浮かび上がってしまう。

「ええ、ルカ様の事で、貴女にお話が  
やっぱり。」

どきりと心臓が鼓動し、体中が熱くなる。

動揺しているのが、自分でもよく分かる。

けれどマトリカリアから視線を決して外そうとはしなかった。

「ヤエさん。貴女は、ルカ様の事が好きでしょう？」

直球な質問だった。

けれど確信を持った質問だった、彼女の目は自信に満ちている。

「事情は大方ガイルから聞きました。貴女は異世界とやらから来た人で、ルカ様の家に居候の身だとか。……沢山苦労なされたのも聞きましたわ。ルカ様を好きになるのは、仕方の無い事です」

「……そう、ですか」

ちらとヤエの髪を見たが、それっきりマトリカリアはヤエから視線を移す事は無かった。

「信じられませんよね、異世界の人間だなんて」

「そうですね、私は少なくとも半分は信じていません。異世界

と言われても、魔法とやらの類いも無い国で世界を行き来する手段があるとは思えませんし」

正論だ。

どうやって来たかも分からないのに、帰る手段なんて尚更分かる訳がなかった。

「……信じてはいませんが、貴女はルカ様にとって大切な人だという事はわかりますわ」

「……え？」

「見れば、分かります。それにお噂もよく聞いていましたもの」  
空になったティーカップの淵を、何気なく触れる。

微笑みはそのままだが、目は笑ってはいなかった。

「……変わりましたわ、ルカ様は。以前お会いした時よりも、ずっと優しいお顔をしていますわ」

「ルカさんは、いつも優しいですよ？」

「年相応、とでも言えばいいでしょうか。昔はいつも大人びて、無理をなされた顔をなされていたんです」

無理をしていた。

彼は現アルケミラ家の当主、そういえば彼の両親はこの家には居ない。

自分と同じぐらいの歳なのに、貴族の位を受け継ぐ事は相当な責任であるに違いない。

ルカは、年相応に遊びたかったのかもしれない。けれど、そんな自由は無い。

「貴女が、ルカ様の支えになっているのかもしれないね」

「そ、そんな事は……」

「ですが」

言葉を遮られた。

嫌な予感しかしなかった。

「貴女は、自分の国にいずれ帰ってしまうのでしょうか？ルカ様を残して」

国に帰る。

ヤエの目的はそれだ、この世界から日本へ帰る事。

ルカと離れる事は、わかっていた筈だった。

「国に帰るのならば、恐らく二度とルカ様には会えないでしょう。そうなれば、ルカ様はとも辛い思いをなされます。貴女が恋人になったとしても、永遠にここに残る事を貴女は選べるのでしょうか」

「そ、れは……」

「どちらか辛い思いをするくらいならば、私にルカ様を譲ってください。貴女がルカ様を想っている様に、私もルカ様を想っています。私ならば、ルカ様を悲しませたりはしません」

そうだ。

彼女なら、ルカから離れる事はない。

好きな人とずっと一緒にいられる。

ルカの支えになれる。

自分にはできない事だ。

「……嫌、です」

「え？」

「譲るとか、そういう事じゃなくて……私は、まだルカさんに伝えてないんです。私のものじゃあ、無い」

「だつたら……！」

「だけど……！私は、ルカさんと一緒にいたいんです……、もしルカさんに伝えてしまう事でルカさんが嫌な思いをするんだつたら

……このままで良い。でも、だからといって好きになる事を止めたりなんかはできません……！」

驚いた顔で、マトリカリアはこちらを見つめた。

少し眉を潜め、「……そんな事ができるとでも思っていますの？」と呟いた。

「身分も権力もお金も無い貴女が、移民に間違われてしまう貴女が、ずっと彼の側にいられると本当に思っているんですか」

「……わかりません」

その返事に、マトリカリアは思わず立ち上がった。

珍しく慌てた様子なので、立った拍子にテーブルに手が当たり、ティーカップが倒れかける。

「わからないならば、どうして？ 貴女はともかく、ルカ様は貴族の当主。いずれは結婚をしなければならぬ、そうすれば貴女は鍾になるんですよ？」

「その時は、ここから離れます。ルカさんに想いを伝えようが伝えまいが、彼が望んだ人と結婚したいなら私はもうここにいてはいけませんから」

彼の為に告白をしない、というのはただの猫かぶりだ。

本当は伝えたい、彼と恋人になりたい。

けれどそれだけでは駄目なのだ、簡単には言えないのだ。

「……可笑しいわ、そんなの」

俯き小刻みに震えるマトリカリア。

か細い声は、悲しいからそう成っている訳ではない。

「身分も権力も関係ないなんて、そんな事あり得ない。政略結婚でなければ、成り立たないのに」

「……ここでは、そうかもしれません」

「好きだけなんて気持ちだけじゃ、どうにもならないのに！そんな、甘い考えで一緒にいれる、なんて事、絶対に、絶対に無理なのに……！」

気がつくと、彼女の真下にはポタポタと涙が落ちていた。優しい彼女の声は、掠れて涙声になりつつある。

「私だって……！本当は、私だって、一緒にいたい……！でも、身分も権力も違うのに、一緒になるなんて……できやしないのに」  
「……マトリカリアさんは、身分も権力もあるじゃないですか……？なのに、どうして……」

ルカと一緒に成る事はできる。

なのに、彼女はどのようにこんな悲しそうなのだろうか。別の誰かの事を言っているとも言うのだろうか。

「私だって……ガイルと、一緒にいたい」  
消え入りそうな声で、思いも寄らない人物の名前がそっと呟かれた。

56 本音(後書き)

茶会での女子の本音、婚約者編もそろそろ終盤です。  
早い様ですが、短めを予定していますので・・ご了承ください(笑)

57 本当に好きな人（前書き）

今回結構長めです。

57 本当に好きな人

気がつけば、マトリカリアは泣いていた。

静かに涙を流していたのはほんの数秒で、心情を吐露したかと思えば子供の様にわんわんと泣きわめく。

余りにも大声で泣くものだから、下がっていたメイドも慌てて戻って来てしまった。

何とかメイドを返した時には、少しは収まっていたものの未だハシカチで涙を拭っていた。

「私とガイルは、幼なじみなのです」

乱れた呼吸を整えながら、彼女はぽつりと呟いた。

ガイルの幼なじみ。

彼については全くと言って良い程知らなかったので、それだけでも驚いてしまう。

「私の父上は、彼の父上……バルヒェット子爵と古くからの友人でした。家も近かった事もあって、私はよくガイルに面倒を見てもらっていたのです」

「ガイルさんは……貴族、だったんですか？」

「ええ……正しくは元貴族ですが」

執事としてそつなく仕事をこなしている彼が、貴族出身だった。

どこか気品さも垣間見えていた為に、そこまで驚きはしなかったが、想像はできない。

「ガイルの家は、私が十の時に没落しました。何でも事業に失敗し多くの借金を抱えていたと……ガイルは両親と共に消息を立ってしまったのです。恐らく夜逃げだと、父上は嘆いておりました」

「没落……」

「大好きだったのです、昔から。けれど、ガイルはすぐにどこかへ行ってしまつて……六年後に再び会えた時は本当に嬉しかった」

再びマトリカリアの瞳に涙が溜まる。

懐かしそうに微笑んでいるのに、悲しそうだった。

「その時、既に彼はルカ様の家で執事として仕えていました。私は、彼に会いたくて、思いを告げたくて……近くにいたくて、結婚の話ののんだのです」

「……ガイルさんの為に？」

「ごめんなさい……！ルカ様の婚約者になれば、またガイルと近くにいれると思つたのです……！その為に、ルカ様を、利用して……！」

でも。そう呟いたつきり、マトリカリアは黙り込んだ。

彼女だつて分かつている筈だろう、近づきたい為とはいえそれは無謀であると言う事ぐらい。

「……本当は、結婚なんかしたくないの。ルカ様は素敵だけれど、好きなのはガイルなの」

「なら……ちゃんと、ルカさんにそれを話した方がいいです」

「……けれど、許してくれるとは思えない。ガイルだつて、こんな事知つたら……！」

「でも、本当の事を言わないまま結婚するのは、辛くないんですか」

何故か、自分までも泣きそうになる。

必死に堪え、唇を引き結び、マトリカリアを見つめた。

私だつて、人の事は言えない。

言わなきゃ、私も、彼に。

「……ガイルさんは、本当の事を言つてくれない方が嫌だと思ひ

ます。マトリカリアさんが、一番分かっているんじゃないですか？」

「私が……」

「だから、がんばりましょう？ 私も手伝います、微力かもしれませんが……。一緒に、本当に好きな人に、ちゃんと言いましょう」

マトリカリアはこくりと頷く。

涙がこぼれそうになったが、力強くそれを拭った。

頑張ります、と微笑んだ彼女は先程よりも美しかった。

……そして一週間。

身体を震わせればそと泣いているマトリカリアの姿があった。

「……マ、マトリカリアさん……。泣かないでください、だ、大丈夫ですから！」

「駄目ですわ……。私、本当に役立たずで……。ガイルとマトモに喋る事もできないんだもの……！」

体育座りをし、わんわんと泣き始める。

この一週間、彼女はずっとこの調子である。

ガイルに近づき、会話し、最終的には告白をしようと言っヤエの計画も、初期段階で頓挫しそうである。

近づこうとマトリカリアは必死に彼を追って入るものの、それが空回りしてしまうのだ。

片付けの手伝いも、単なる世間話も、全てが裏目に出て失敗してしまう。

マトモな会話一つできないまま一週間が経ち、勿論何も進展はしなかった。

「最近ガイルさん忙しいみたいですし……。ルカさんだって考慮して話す時間を作ってくれていますよ？ 次頑張れば……」

「で、でもガイルは私を避けている様だし……もう、本当に駄目かもしれないわ……！」

自分の言った言葉に傷ついている。

こんな様子が一週間も続くと、さすがにヤエも疲れてしまう。

何とかルカに婚約の件の誤解を解いたらしいが……マトリカリアはそこから進めていない。

どうにかして進展できないものだろうか。

そう思っている自分でさえ、ルカにマトモに口を聞いていないのだから説得力も何も無いのだが。

「そんな事は……」

「いいんです、私は何やっても駄目な人間なのです。一人じゃ何もできない癖に、完璧なガイルの手伝いをしようとしたのがいけなかつたんです……！」

完全にネガティブな思考に陥っている。

何度慰めても、更に悲しんでしまっってはどうしようもない。

「わ、私……その、アンナさんに呼ばれているので……ちょっと行ってきましたね」

ここでガイルに呼ばれたとも言え、悪循環になるのは目に見えていた。

仕事が無い訳では無かったが、この為にアンナの名前を利用するのは心が痛む。

「どうぞ……頑張ってくださいねヤエさん」

力無い返事が来たので、苦笑しつつヤエは部屋から出て行く。

しくしくと泣くマトリカリアの声のみが、部屋の中で響いている。

「ヤエさんにも呆れられてしまったわ……、当然だもの……いつまでも引きずって泣き続けて……本当に子供だわ」

昔から彼女は極端な人間だった。

嬉しかったり楽しかったりする、陽気に突っ走り何事にもポジティブに考えていた。

逆に、一度でも後悔するとことんネガティブな思考になってしまふのだ。

自分でも、面倒くさい女だとは分かっていた。

距離を置かれても仕方が無い、と。

だから、周りに嫌われない様にマトリカリアは常に我慢する様になつた。

嬉しくてもあまり顔にはださず、暴走しない様に。

悲しくても大声で泣きわめかない様に。

が、今の今までセーブしていた分、どっと反動が来てしまった。泣いても泣いても止まる事がない、自虐してもし足りない。

「これじゃあ、いつガイルに嫌われても可笑しくないわ……」  
「私が、何ですか」

頭上から振つて来た声に、マトリカリアはびくりと反応した。上を見上げると、思い人が不思議そうに彼女を見つめていた。

57 本当に好きな人（後書き）

マトリカリアメイン回。

彼女は、結構子供っぽい性格をしています。

前回とはえらい違いですね（笑）

58 選びなさい(前書き)

今回も長め。

「……どうなされたんですか、そんな顔して。どこか、怪我でも？それとも具合でも悪いんですか」

無愛想な表情はそのままに、ガイルは座り込んでいるマトリカリアを無理矢理立たせた。

油断していた為、あつという間に立たせられ、ベッドに座らせられる。

困惑した彼女の目の前で、ガイルは同じ目線の位置までしゃがみ込む。

ぼろぼろ溢れる涙を、流れ作業の様にハンカチで抑えた。

「涙が止まりませんね、やはりどこか痛むのですか」

「ちつ、違うのどこも怪我なんてしてないわ……！」

「では、ヤエにでも苛められましたか？それともアンナに？後で私が戒めておきますから……」

「だから違うわ！二人は関係ない！」

思わず声を荒げて、一生懸命首を横に振る。

しかし、ガイルは不安そうに顔を歪ませていた。

「……本当ですか？」

「私が勝手に泣いていたのよ、あの二人を責めないで」

しばらくガイルは黙っていたが、不服そうに「わかりました」と頷いた。

「あなたがそこまで言うなら、仕方ありません」

「良かった。……ガイルったら、こんなに心配性だったかしらね。昔より過保護になったみたいね」

「……そう、ですね」

ほっとする彼女の顔を見て、ガイルも薄く微笑する。

彼の笑った顔を見るのは久しぶりだったので、何故か緊張してしまっただけだ。

思わず俯いてしまうと、彼の手が優しく頭にのせられる。

「貴女が泣くのを見るのは久しぶりだったので、随分焦りましたよ。随分たくましくなったと思っただら、泣き虫は昔から変わりませんね」

「そ、そんな事ないわ！私だって、あまり泣かない様にしていたもの……！」

「わかっていますよ、貴女は頑張りやですから」

……そんな事を言うなんて、狡い。

「そ、そうだガイル！」

「はい？」

「ガイルは、元気にしてた？その、今までというか……私とまた会うまで」

話題を変えようと出た言葉に、ガイルの表情は途端に険しくなる。眉を潜め、唇を噛み締めている。

言いたくないのだろうか。

「あ……言いたくなかったら、言わなくてもいいのよその、私にただ気になっただけで」

「いえ」

不意に呟く。

彼は、少し潤んだ瞳でマトリカリアを見つめる。

その熱い視線に、自分の顔が赤くなってしまった事を隠すのを忘れてしまっていた。

「貴女には、知ってもらいたいです。私の事を」

「……何か、あったの？」

「……私は貴女と離れてからずっと地獄にいたんです」  
地獄。

それが、何を比喻して言われた言葉なのか、彼女にはまだ理解できない。

「簡単に言えば、私は一時期奴隷だったんです。借金のカタとして奴隷商人に売られ、まだ幼くつかえなかった所為で別の商人にまた売られたんですがね」

「ど……れい」

再び呟く彼女の声が掠れる。

顔がさつと青ざめ、辛そうに顔を歪ませる。

今にも倒れてしまいそうだ。

淡々と話すガイルは、それとは正反対に表情を変えずに話を続けた。

「剣奴専門の商人に売られ、裏社会にあるコロシウムに出場させられました。人間以下の扱いを受けた者達が、貴族の娯楽と金の為に殺しあう場所です。私の最初の相手は、今にも倒れそうな老人でした」

「殺しあいつて……！」

「幸い、初戦は不戦勝でした。殺す前に、相手は心臓発作で死にました。薬や治療は与えられないですから、病で死んでしまうのは稀ではなかったんですけれどね」

けれど、毎回不戦勝な訳は無かった。

二回戦目は自分より少し大きい青年、身体は細かったが力は強かった。

すぐに身体を捕らえられ、殴られる。

「死を覚悟しました、このままでは確実に殺されると。だから……」

……」  
口を閉じる。

言わなくても、マトリカリアは察する事ができた。

「……私は人殺しです。それはもう誰に責められても反抗なんてしません。ですが……人殺しという事実は本当に、本当に……辛かった」

歯を食いしばる音が聞こえる。

表情は変わっていないが、拳は強く握られていた。

「その後、他国の軍に売られ捨て駒として働きました。ある大戦で、今も自分が生き延びているのが不思議なくらい」

「戦争……、もしかして第三族国の……？」

「ええ。戦争は早く終わりましたが、捨て駒の奴隷は皆殺され……私はほぼ死体同然の形でルカ様に拾われたんです」

大丈夫ですか。

全身血まみれ、傷だらけ、酷い形相の男に彼はそう言った。

訳がわからなかった、だが、それはガイルにとっての転換期だった。

「ルカ様には、命を助けてもらった事も含め感謝しても仕切れない恩があります。……だから、結婚の事も……ルカ様が幸せになっていただければ、相手が誰であろうと構わないんですよ」

それが、ヤエならば良かった。

心の中で、そっとガイルは呟く。

「……ねえ、ガイル」

「何ですか？……ああ、すみません。こんな話聞きたくなかったですか」

「ううん、そんな事ないわ！……ガイルが、話してくれたんですもの、私も話すべきだと思って」

自分の胸をぎゅっと抑え、深呼吸をする。

今いふべきではないのかもしれない、が、もう隠す事はしたくなかった。

「あのね、もう……結婚の話は無しになったの」

「どういう、事ですか。ルカ様を、嫌いになったと？」

「そうじゃない、ルカ様はとても優しくて素敵よ。……でも、私がいたいのは、ルカ様じゃないのよ」

声が震え、自然に目が潤む。

頑張らなきゃ、ここでまた泣きたくはない。

「貴方と、ガイルと一緒にいたくて……結婚の話を進めたの。本当にごめんなさい」

「……」

「だから、その……本当は、本当は、ガイルが好きで……居なくなった時からずっと心配して……また会えた時本当に嬉しかったから……こんな形で、一緒にいようとして……」

もう既にマトリカリアの頭の中はぐちゃぐちゃだった。

何を言おうかすらまとまらず、子供の言動の様にただ吐露し続ける。

言わなければいけ無い事なのに、言えば言う程罪悪感で押しつぶされそうになる。

「……くだらないですね」

「……ええ」

冷たい声に、びくりと身体が反応する。

その瞬間、一粒涙が溢れた。

「私なら、身分や金を利用してまで貴女を側に置かせます」

「……え？」

「ぬるいですよ、他人と結婚をして側に居るなど……甘い考えにも程があります」

ガイルの手が、そっとマトリカリアの両手を包み込む。

優しい手付きとは裏腹に、少し怒っているかの様な声音で話し続けている。

「……まあ、貴女がそう言ってくれた事はとても嬉しいんですがね」

「どういう事？だって、ガイルは……」

「私は、ルカ様の婚約者じゃないならば貴女を奪っていました。

ルカ様とキスしていた時も、嫉妬すら湧きましたよ？」

当たり前前の事の様に言われ、首を傾げるガイル。

彼女は更に混乱してしまった。

「この意味、わかりますね？」

「でも、私嘘付いたのに……！嫌われると思っていたのに……！」

「それはこちらの台詞ですよ、私は人殺しで奴隷でヤエをよく虐めています。そんな男と、結ばれたいのですか？」

ガイルに手を引く張られ、彼女の上体が揺れ動く。

ガイルに身を預ける様に倒れ、彼の腕の中にすっぽりと収まった。抱きしめられた、冷静に見えた彼の心臓の音が早く鼓動している。

「……結婚が破談ならば、もう迷う必要はないんですね」

「ガイル……」

身体を離し、今度はガイルの顔が近づいて来る。

思わず身構え目を瞑ると、彼の唇が脛にそっと触れた。

「マトリカリア」

名前だ、やっと呼んでくれた。

目を開けると、真剣な眼差しが自分のそれとぶつかる。

「私を選びなさい、他の人間では無く……私を」

そして影が彼女を覆い被さる様にかかり、そっと彼女の唇に口付けした。

58 選びなさい(後書き)

今回は結構長めです。

でも切りたくなかったので、一話にまとめました。

そして(できたら)次回で婚約者編は終了します、主役はもちろんあの人です

「ヤエ」

耳元でルカの声が、静かに聞こえる。

吐息と共に聞こえる甘い声に、ヤエの顔は真っ赤に火照る。

力はかけず優しく抱きしめられたまま、上擦る声で返事をしてみた。

ルカは、咳く様な小さい声で何回も返事をする度彼女の名前を呼ぶ。

部屋には誰もいない、邪魔をする人間ももう誰も。

彼の吐息がかかる度に、ヤエは恥ずかしくて縮こまる。

なんでこんな事になってしまったのだろう。

今から三十分前の自分は、きっとこの状態を予想できなかっただろう。

三十分前、マトリカリアは自分の家に戻っていった。

結婚の話は破棄になった事、自分には違う好きな人がいる事。

彼女は両親にそれらをちゃんと伝えなければならなかった。

涙で腫れた目を必死に隠し、そそくさと帰っていくマトリカリア。

彼女の家まで送っていくガイル。

どちらも何だか幸せそうに見えた。

「おめでとうございます、マトリカリアさん」

そう言った時の彼女は、嬉しそうに微笑んでいた。

「ガイルもマトリカリアも、幸せそうだね」  
見送っていた際に、隣でルカが言った。

嬉しそうに微笑んでいる彼は、「ね？」と首を傾げる。

「はい、本当に良かったです。でも、まさかガイルさんがずっとマトリカリアさんを好きだなんて思いませんでした」

「ははそうだね、ガイルは仕事人間だから恋愛にも興味がなさそうに見えるしね」

笑いながら、さらっと酷い事を言っている気がする。

けれど彼が楽しそうな顔をしているので、何も言わないでおこう。

「……それで、さ。ヤエ」

「はい？」

急にルカの声がぎこちなくなる。

心無しか顔も赤く火照っている。

熱でもあるのかと思いい、ヤエの顔が不安で歪む。

大丈夫ですかと彼の頬に触れようとすると、一層彼の頬は赤くなる。

「やっぱり熱でもあるんじゃないですか？ルカさん」

「ち、違うんだ。その……」

気まずそうに頬を掻き、視線を泳がせている。

「僕の、部屋に来ない？」

そして三十分後の今に至る。

ヤエもその言葉に緊張し、赤面したまま部屋に入った。

こうしてみると、同じ家に住んでいたのにルカの部屋には初めて入った気がする。

頭が真っ白になりながらも、必死に彼に話しかけ続けた結果、抱きしめられた。

もう、ヤエの頭は思考を停止してしまっている。

「あ、あの！ルカさ、ん……？」

「ヤエ」

「は、い！」

「……ヤエ、の身体熱い」

「へっ」

吐息の様な熱を帯びたその声に、びくりと身体が縮む。そりゃあこんな状況になれば、身体だって熱くなる。

「僕も同じ。ヤエといると、いつもそうだよ」

「そ、そうですか……」

何と返せば良いのか。停止してしまった頭をフルに回転させてみる。

しかし、ルカの言葉の方が更に掻き乱す。

「……僕は、最初の頃君の事を可哀想だと思っていた。ごめんよ、同情していたんだ」

ルカの声が低く、暗くなる。

少しだけ震えている様な気もした。

「でも、ヤエと一緒にいて……単純に一緒にいたくなっただよ。可哀想だからとか、そんなんじゃないよ」

「あ、ありがとうございま……」

「わかる？きみが好きって事だよ……？」

好き。

「そんなに驚かなくても」

あまりの事に声すら出せなくなる。

今の自分の顔は絶対に見られたくない。

が、ルカはヤエからそつと離れ、彼女の手を包み込む様に握りしめた。

「あつさり言い過ぎ、かな？すごく吃驚してるよ、ヤエ」

「え、だ、だって！ど、どうして、ルカさん、が？わ、私の事を

……！？」

呂律が回らず、顔は目も当てられないくらい真っ赤になる。

嬉しい、と言う気持ちよりも信じられないという方が遥かに強い。

これは夢なのだろうか、現実なのだろうか。

信じられなかった、そんな事あり得ないと思っていた。

「うん、好きだよ」

甘く囁かれ、優しい微笑を与えられる。

大好き、ともう一度囁かれヤエの目尻に涙が溜まった。

夢じゃない、目の前にいるのは本当にルカさんだ。

「わ、私も……」

好きです。

その言葉が肝心な時に言えなかった。

もどかしかった、けれど震えてしまつて中々言えない。

「うん。ちゃんと聞くよ。だから、ちゃんと……？」

「え……」

瞼に熱が生まれる。

次は頬に、耳に、首に。

彼の口付けが幾度も当たる度、その部分が熱を生じ、彼女を更に困らせる。

恥ずかしくて仕様がなかった。

けれど、ちゃんと言わなければ。

「す、す……」

「うん」

「好き……で、す」

「うん。誰を？」

彼はこんなに意地悪だったのか。

嬉しそうに微笑んでいる彼を見て、言いたくなくなってしまふ。

「ルカ、さんです……。ルカさんが、好きです」

「……うん、僕もヤエが好きだ。大好きだよ」

女の子の様に笑う彼の顔が、ゆっくりと近づいて来る。

目を閉じる様に促され、慌てて目を閉じた。

暗闇の中、マトリカリアやミーシャの顔が浮かんで来る。

恋をして、結ばれた嬉しそうな表情、気持ち。

ああこういう事だったのか。

そう思っている途中で、唇に柔らかい感触が落ちる。

やっぱり恥ずかしくて、思わず目を開けると、彼もまた恥ずかし

そうな顔をしていた。

恋人。その言葉はとても大きい。

好きな人と結ばれる事は、とても幸せな事なのだ。

……たとえそれが、間違いだったとしても。

59 きみが好き（後書き）

やっと終わりました、婚約者編。

そしてやっと結ばれた主人公二人、うーん長かった。

そして次章から始まる最終章、本当に波乱です。

シリアス全開ですので、自分でも嫌になりそうです笑

番外編も執筆中です！次章前に投稿予定！笑

彼女に恋したきっかけ(前書き)

番外編です。

ルカ視点になります

## 彼女に恋したきっかけ

黒髪黒目の彼女と出会った時は、正直言って驚いていた。

黒髪黒目の人々。

彼らは「西の移民」と呼ばれていた。

昔から移民の存在は知っていた。

彼らはこの国で、最も忌み嫌われる人種である。

かつてこの国に大きな惨事を呼び込み、大戦の引き金を引いた人々。

国民の多くの恨みを買ひ、人間扱いされない彼らは、奴隷として売られていると噂されていた。

だから彼女を見つけた時、本当にびっくりした。

まさか、こんな所にいるなんて。

『……日本という国に生まれて……髪も目も日本の人間なら、大抵はこれです』

当然信じられなかった。

ニホンという言葉すら聞いた事も無かったし、移民の容姿が普通だなんてもつと信じられる訳がない。

多分、この時点で自分は彼女に同情していたのかもしれない。

頭でも打って狂ってしまったのか、人買いに虐げられ逃げている途中なのだろうか。

おまけに白夢病にも罹るなんて、なんてこの子は『不幸』なんだと。

そんな彼女に、恋心を抱くとは思ってもみなかった。

「あ、そのルカさん……」  
「ん？」

ある日の正午、ルカはヤエと昼食をとっていた。  
まだ慣れない場所で緊張しているヤエは、申し訳なさそうに昼食の煮魚を口に運んでいた。

そんなに緊張しなくていいよ、といったものの逆効果だったらしく、一層ガチガチになったまま食事を続けてしまった。

(やつぱりまだ僕が怖いんだろうな)  
そんな彼女を見つめながら、ルカも食事を続ける。

ヤエに会う時は、ルカは極力笑顔で接する様にしていた。  
元々臆病だった彼女は、まだ自分に起こっている現状と最初に受けた脅迫(演技ではあったが)で、かなり怯えているようだったからである。

が、いくら優しく接したとしても怖いものは怖いだろう。  
自分と同一年くらいの少女が、たった一人で知らない場所で迫害される。

怖がらないはずもなかった。  
最初の自分が軽薄すぎたと、彼は密かに臍を噛んだ。

「どうしたの？ヤエ」

昼食を終えた後、彼女に話しかけられた。

まだか細く小さな声だったので、本当は何を言っていたのかは聞き取れなかったが。

やはり笑顔で応えてみたが、ヤエはほんの一瞬体を強張らせていた。

「あ、あの、その……」

「うん。何？」

「……あ、いえっ！な、んでもないです……！」

焦った様な表情を見せたかと思うと、ヤエはすみませんと勢いよく頭を下げる。

そして脱兎のごとく、その場から走り去ってしまった。

何を言いたかったのだろうか。

聞きたかったけれど、追いかけてまた怯えさせるのも嫌だったので、自室へ戻ることにした。

その日からほとんど毎日、ヤエがこちらの様子を窺うようになっていた。

物陰から覗き、何かを言おうと声をかけてみたものの結局怯えたように逃げ去ってしまう。

最初は不思議に思っていただけだったが、もしや自分は嫌われているのだろうかと考えるようになってしまった。

彼女の性格上、言いたいことも言えないのだろう。

もしかしたら文句や不満を言いたかったのかもしれない。

「……僕は、仲良くなりたいたいんだけどなあ」

ぼつりと一人呟いて、もの悲しくなってしまう。

元々この家には自分とメイドのアンナ、執事のガイル、その他の召使いがいるだけで

親族は一人もいない。

彼の親族はもうとつくの昔に死んでいたからである。

だから同い年の少女が、たとえ居候でもこの家にいる事は少なからず嬉しかった。

もちろん移民と関係ないとはいえないかもしれない。

でも寂しいこの家にヤエがいる事で、ルカは多少なりとも安心していった。

できるならもっと仲良くなって、友人として一緒にいたい。

けれど、怖がらせてはそれも意味がなかった。

「あ、あの！」

ほら、また来た。

今度は怖がらせないようにしなくちゃ。

「やあ、ヤエ。どうしたの？」

「あの、その……、ル、ルカさんに、言いたいことがあります……！」

言いたいこと。

頭が痛くなってきた。

予想通り、文句でも言われるのだろうか。

「あの、……これを！」

顔を真っ赤にし、それを隠すように取り出したのは薄桃色の袋だった。

大きさは硬貨が十数枚はいる程度の小さな袋で、かわいらしい紐で口を縛ってある。

「？これは……」

「あ、その、く、く、く？」

更に顔を赤くし、震えるヤエを見ているとなんだか申し訳なくなくなってしまう。

「ク、クッキー！……です」

「クッキー？」

袋を受け取り、紐を解く。

中から見えたのは綺麗な狐色に焼けた楕円型のクッキーだった。

「これ、どうしたの？」

「そ、その、私がキッチンをお借りして……作らせてもらいました。その、お礼がしたくて」

「お礼？」

「はいっ！え、えと、……助けてくれて、ありがとうございます……ここに私を置いてくれて、本当に感謝してるんです……」

お礼を言われた。

怯えていると思ったのに、彼女はお礼を言ってクッキーまで焼いてくれた。

じわりと胸の奥が熱くなる。

(うわ、何だこれ。なんだか、すごく嬉しい)

「あ、ありがとう……！わざわざ焼いてくれたんだね」

「は、はい……お口に合わなかったら捨てても構いませんから……」

苦笑いをする彼女に、妙にも悲しさを感じる。

自分の為にせっかく焼いてくれたのだ、無下に捨てることは絶対にしたくない。

「絶対捨てないよ、ヤエが焼いてくれたんだから。全部頂くよ」

「あ、はあ……」

マナーは悪いが、その場で一つクッキーを口に運ぶ。

程よい甘味とサクサクとした触感に、自然と表情を綻ぶ。

言う事無しの腕前だ。

「おいしいよ。すごくおいしい。だから、また今度作ってくれたら嬉しいな」

お世辞でもなんでもないその言葉を、ヤエは嫌がらず受け取ってくれるだろうか。

その思いとは裏腹に、彼女はぽかんと目を丸くし表情を変えない。しまった、嫌だったかな。

そう不安になった時、ふふと息が漏れる音がした。

「わかりました、私のでよければまた作らせていただきます」  
穏やかに美しく、彼女は笑った。

いつもの怯えた顔ではなく、安心した様なそんな顔。

青ざめた顔も、少し色を取戻し頬はピンクがかっている。

笑ってくれた、ヤエが、僕に。

彼女がその場を立ち去った後、彼の顔は人知れず赤くなっていた。

彼女に恋したきっかけ（後書き）

番外編！ルカの視点からお送りしております笑

ルカが恋したのはちょうどミーシャに会った直後ぐらいですかね、結構前の方なんです。

それにしても初期のヤエは、久々に書くと大変だったなあ

61 デート(前書き)

最終章突入です！  
若干長め。

「デートしようよ、ヤエ」  
満面の笑みと一緒に告げられたデートのお誘いを受けたのは、告白して数時間後の事だった。

(……デート、か)  
水色のワンピース、ピンクのパンプス、ルカに貰った四葉のペンダント。

以前いけなかったデートの時と同じ格好だ。  
唯一違う所は、ルカからのプレゼントである。  
着替え終わった後、ペンダントをつけようとアクセサリケースに手を伸ばす。

一番大切な人から貰った、一番大切な物。  
いつもこれを見る度、自然と笑みが零れてしまう。

「ヤエ様、楽しそうですね」  
「アンナさん」

ヤエの服を整えながら、アンナは言う。  
まるで自分がデートに行くみたいに、鼻歌まで歌いながら微笑んでいる。

「やっとデートですものね、いろいろゴタゴタがありましたけれど……本当に良かったですわ」

「はい……アンナさんにもご迷惑かけてしまって……すみませんでした」

「迷惑だなんて……!!」

感極まったアンナが涙目になりながら、ヤエを抱きしめる。

豊満な彼女の胸に顔を押し付けられ、同性といえどかなり心臓がドキドキしてしまう。

す、スタイルいいなあ……。

「アンナは、アンナは嬉しゅうございます! ヤエ様は、この世界に来てから本当にかわいそうでかわいそうで……私が変わるものなら変わりたいと幾度思ったことか」

「は、はは……」

「……ですから、ヤエ様がルカ様と結ばれた事が幸せでならないのです。ヤエ様とルカ様の幸せは、私の幸せですわ」

優しくもう一度ぎゅっと抱きしめられた。

この人は、初めからずっと優しい人だ。

こんなにも他人の事を想ってくれる、心の綺麗な人だ。

この人に喜んでもらえて、私も嬉しい。

「ありがとうございます」

「……さ、ヤエ様。髪を整えたらすぐに行きましょう? ルカ様はもうきつとお待ちですわ」

目じりに溜まった涙を素早く拭い、アンナはヤエから離れた。

手早く髪を梳かし、大きめの麦藁帽を渡す。

外にでる時はいつも頭を隠す為にフードを被っていた。

けれどデートではそういう訳にもいかない。

「髪的事も、今日は忘れて楽しんできてくださいね」

嬉しそうに微笑むアンナを見て、少しだけあつた緊張も自然に和らいでいた。

……と、思っていたのだが。

「ヤエ、緊張してる？」

「へっ！？あ、いやその……ごめんなさい」

デートをしてもう何時間経ったのだろうか。

極度に緊張しているヤエにとって、それはどうでも良い事だった。顔はずっと赤くなっているし、緊張のせいで汗もでてきてしまう。動きは堅く、上手いように会話ができない。

デートというのは、こんなにも緊張してしまうものだったのか。

いくら恋人になれたとはいえ、慣れないものは慣れない。

「謝ることないよ、いつもと同じでいいんだよ？」

「そ、そうですねっ！いつも、と同じで……」

「……顔引きつってるよ？」

苦笑するルカに指摘され、恥ずかしさがこみ上げる。

自分の間抜けな顔を見られたなんて。

「……」

恥ずかしさで顔を隠しつつ、ルカの隣で街を歩く。

本当はルカの顔を見たいのだが、指摘されたのが案外心に残っている。

前はもっと普通に話せたのに、今は何でできないんだろう。

「……ヤエ」

悶々と悩んでいると、隣からルカの声が聞こえた。

反射的に顔をあげると、優しい彼の顔が見える。

そしてゆっくりとルカの手が自分のそれに絡めるように繋いだ。

「手、繋ぎたかったんだ。こうやって恋人みたいに」

「そ、そう、なんですか……！」  
しまった、声の上擦ってしまった。  
「かわいいよ、ヤエ。笑った顔も焦った顔も、全部愛しい」

……さらつと、すごいことばかり言う人だ。

この人には一生勝てないかもしれない。  
嬉しさなのか恥ずかしさなのか分からないくらい、顔が真っ赤に  
染めあがる。

それを見て嬉しそうに彼は「また赤くなった」と笑う。

「だ、だって……ルカさんが恥ずかしいことばかり言うから……  
！」

「恥ずかしいの？僕の言ってる事って、嫌だった？」

「そういう訳じゃ……！」

「本当？」

「ほ、本当です！」

「……そこまで必死にならなくても」

きよとんとした顔をしたルカは、ヤエの頬に手を伸ばす。

思わず身構えたが、彼は頬を優しく拭って「涙でてるよ」と言っ  
た。

「涙、ですか？」

「うん、ほら涙がでてる」

「私、泣いてなんか……」

ぼっ。

頭のとっぺんに、冷たい感覚。

それに気づいた途端、しとしとと頭上から冷たい雨が降り始めた。  
雨だ。

「大変だ、今日は晴れるって聞いたのに」

ぼつっとしているヤエの手をつかみ、強く引く。

思わずよろけそうになりながらも、走る彼に置いて行かれないように雨の中走り続けていった。

屋根のある場所についた時には、雨は本格的に降り出していた。傘があればなんてことないレベルなのだが、生憎二人は傘は持ち合わせてはいなかった。

それ故に二人とも頭の前から下まで雨に濡れ、ヤエに至っては帽子をかぶっていたのに髪の毛も濡れてしまった。

帽子についた雨粒を払いながら、「いきなり降り始めましたね」とヤエは苦笑いを見せる。

「そうだね、せつかくのデートなのに台無しになっちゃったね」

「でも、ルカさんはそんなに濡れてないから大丈夫ですよ」

とはいいつつも、彼の髪はびしょびしょだ。

こうしてみると、いつもと違ってなんだかもっと大人っぽく見える。

かっこいいいなあ。

惚けてみてしまうのは、惚れた弱みかもしれない。

ずっと見つめていると、やがて彼と視線ががち合った。

ルカもまた同じようにこちらを見つめ、濡れたヤエの前髪にそっ  
と触れる。

雨で額にへばりついた髪を整え、意味深に微笑んだ。

「何だか」

「?はい」

「何だか、雨に濡れたヤエは色っぽくて素敵だね」

歯も浮くようなセリフその2である。

もう恥ずかしがるのは無駄なのかもしれない。

反応すると面白そうに笑うあたり、半分からかっているに違いない。

顔を赤くしながら拗ねて背を向けると、「ごめんごめんとすぐに謝ってくる。」

（でもまだ笑っていますよ、ルカさん……！）

笑いながらヤエの頭を撫で、「ごめんと謝りながら彼女に触れ、一瞬だけ路地裏に視線を移す。

だがすぐに視線をヤエに戻し、他愛のない会話を再開する。

その視線の先に見えていたのは、見覚えのある、女の死体だった。

61 デート(後書き)

最終章です！うわあやっど！  
のっけからバカップルな二人です・・ルカのキャラが違う？いやそ  
んな筈は

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5952n/>

---

きみが好き

2011年10月28日10時21分発行